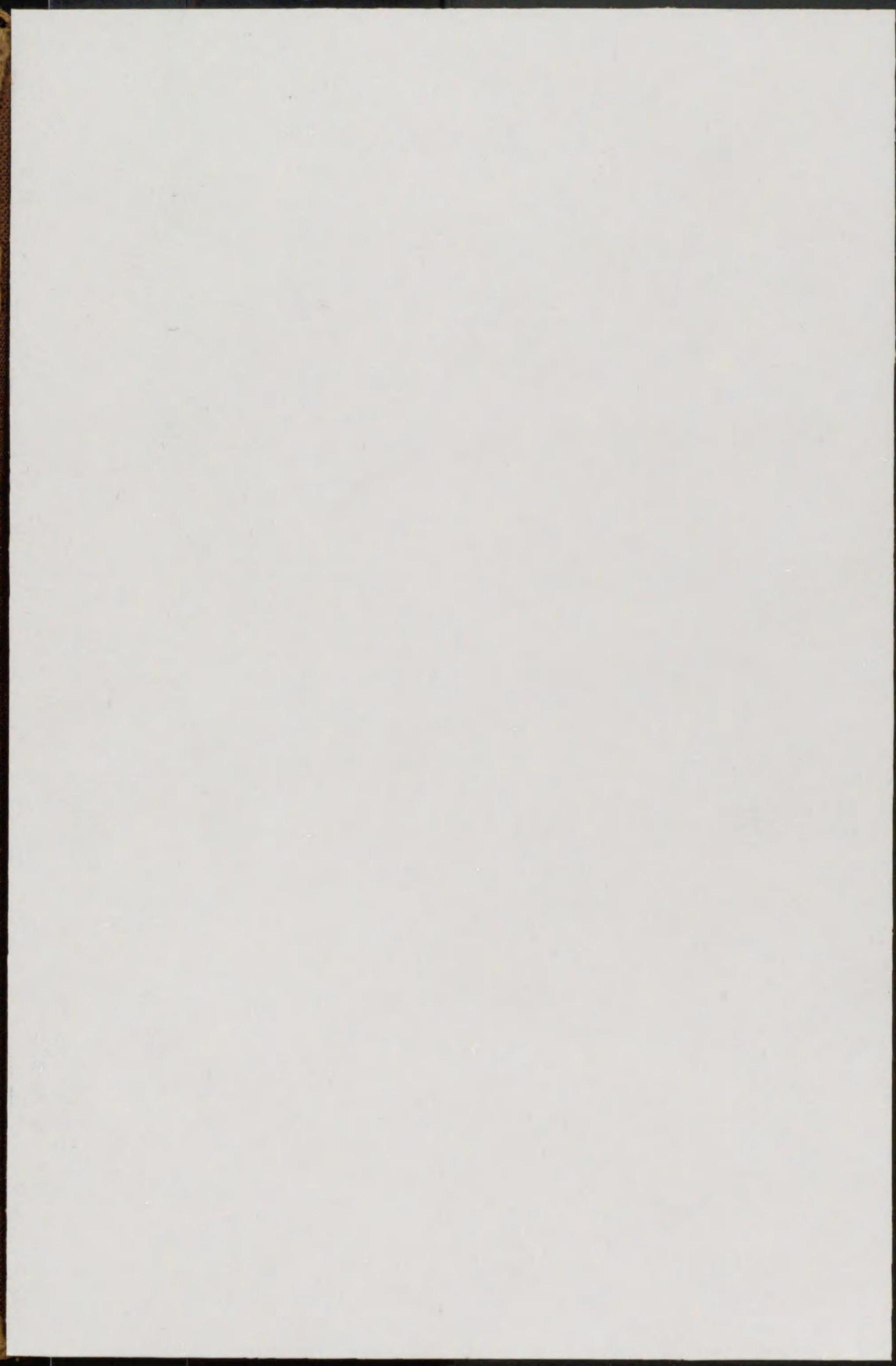
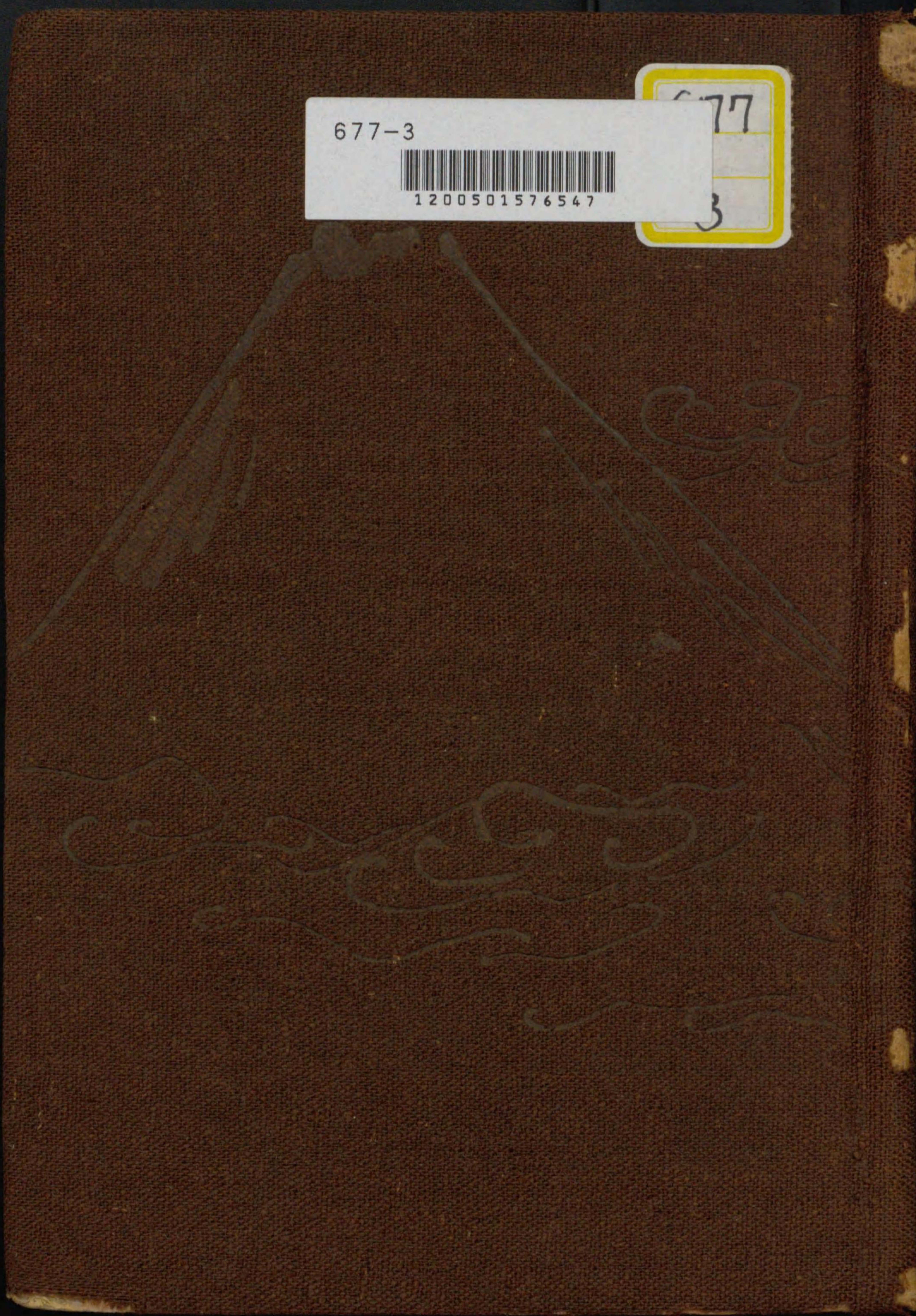


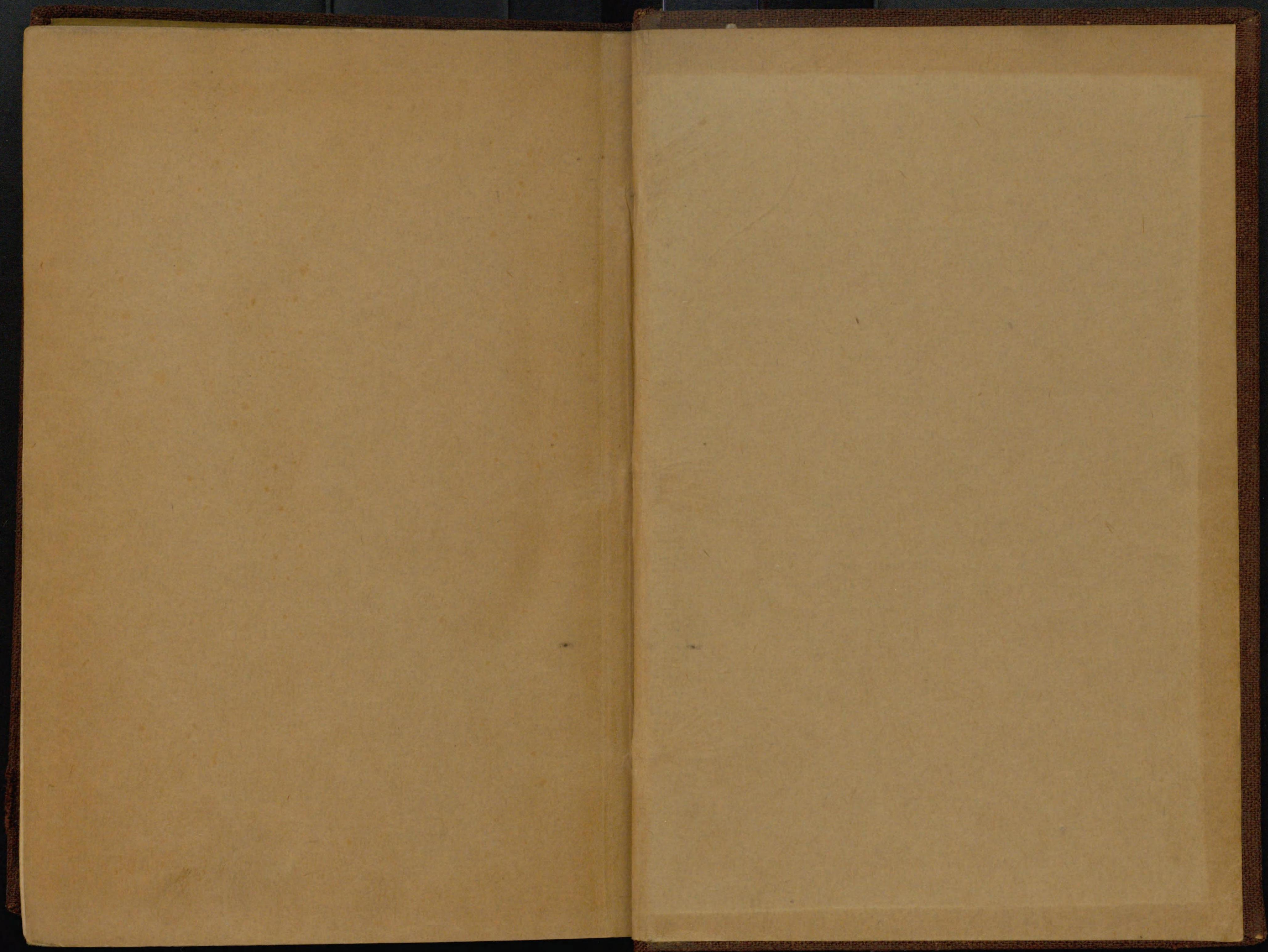
677-3

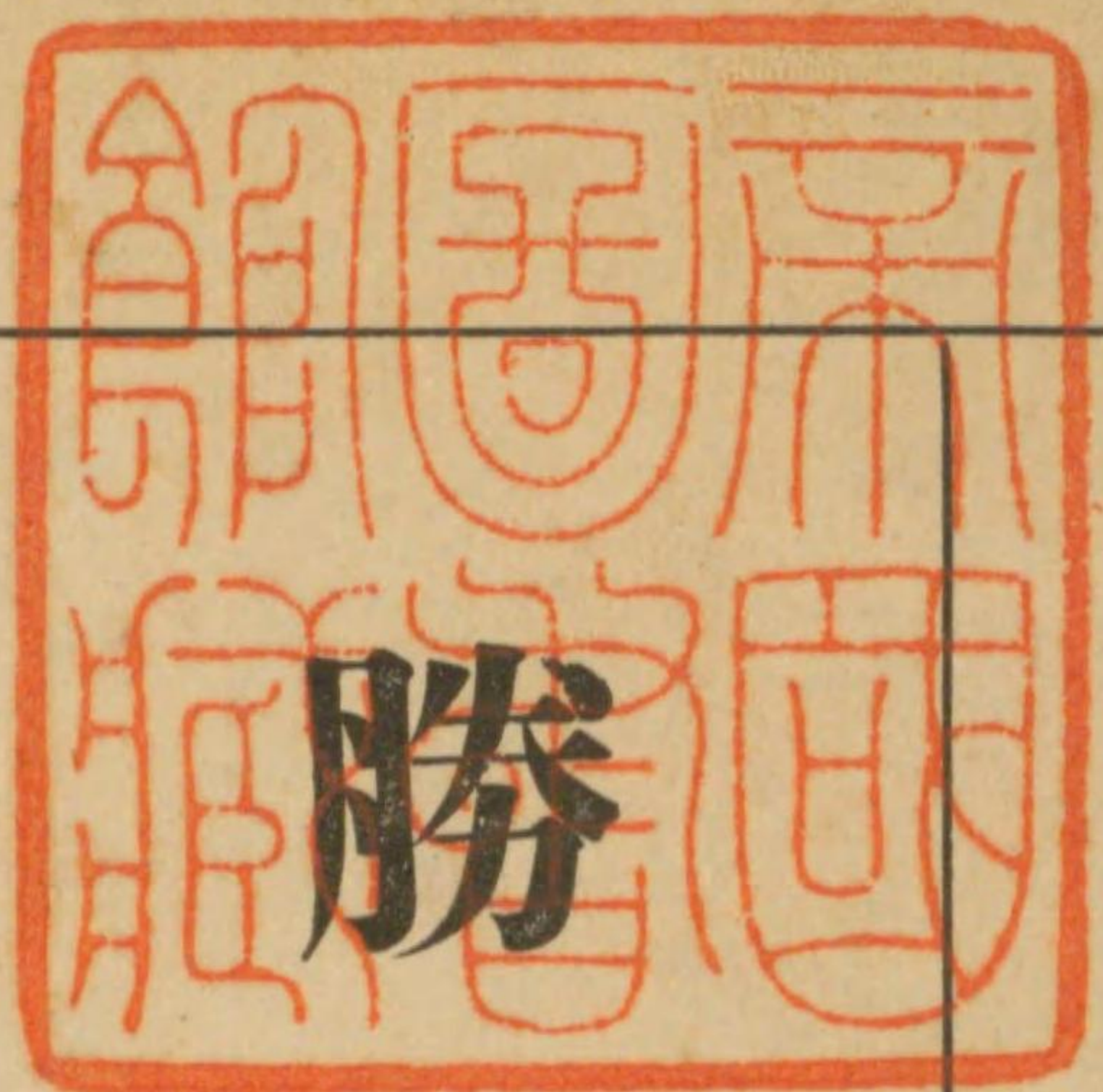


1200501576547

677
3







伊藤痴遊著

實錄維新十傑 第七卷

海舟

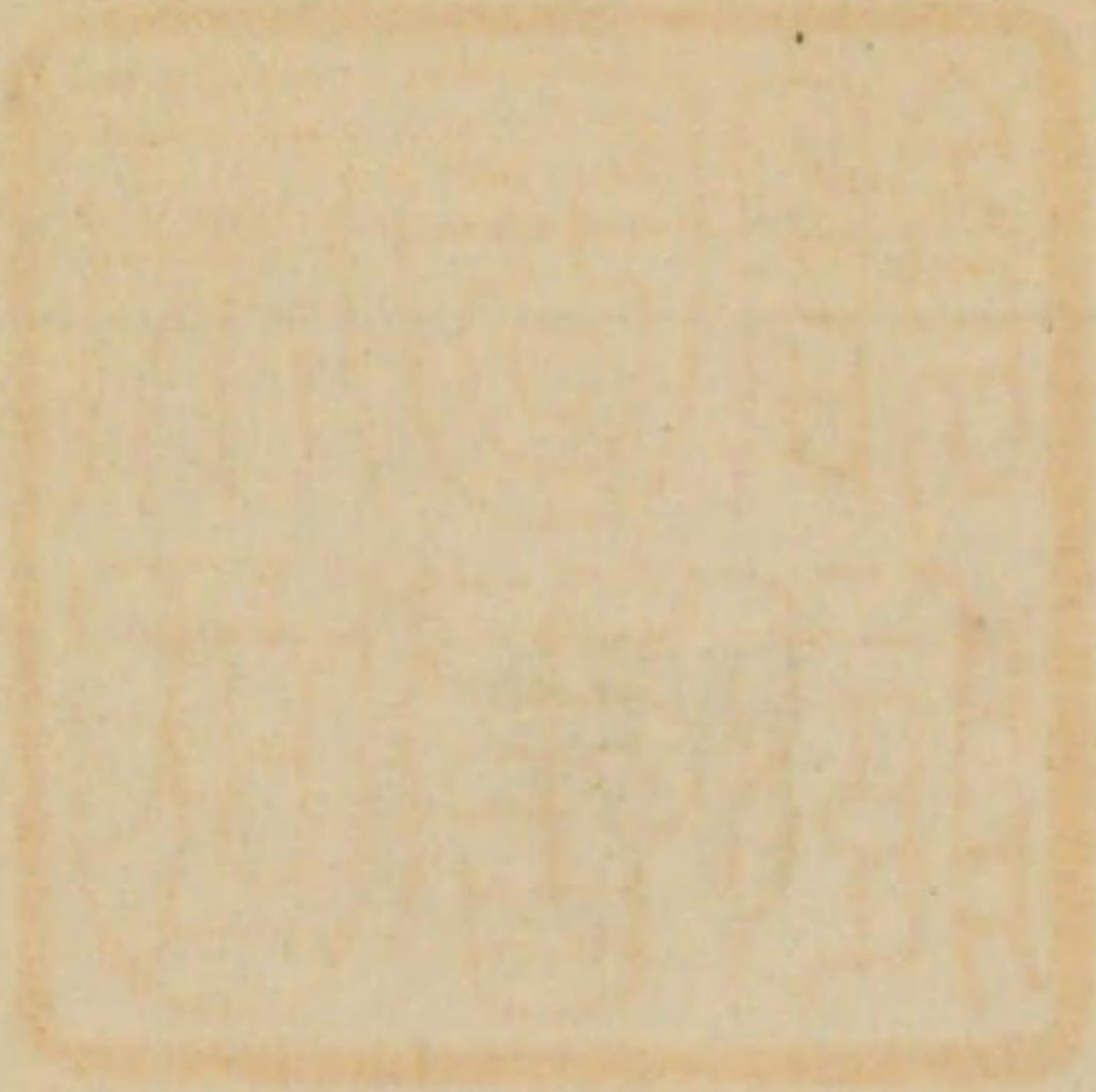
平凡社



677-3

第七卷 勝海舟 目次

海舟概観(上).....	一
海舟概観(下).....	二七
談叢と遺文詩歌.....	五三
少壯時代.....	一三五
幕末の三舟.....	一六三
小栗上野介.....	二六五
長州征伐の前.....	二七九
征長軍の進發.....	三二三
將軍辭職の紛訂.....	三三四



勝海舟

征長の失敗	三三五
征長中止の使者	三八八
宮島談判	三八〇
勝と大西郷	四〇七
福澤諭吉と勝	四一九
日記の中より	四五〇
父の自叙傳	四七一

海舟概観 (上)



著者が、先生に會うて、親しく話したのは、明治二十年の事であつた。

▲以下敬稱を省く。

其頃は、伊藤博文が、最初の總理大臣で、内務には、山縣有朋が居り、外務には、井上馨が居た。

薩摩からは、大山巖、西郷従道、松方正義の三人が、閣僚となつて居たのだから、薩長聯合の内閣ともいふべく、三條實美や、岩倉具視は、完全に、排斥されて居た。

若し夫れ、政黨人の感情を離れて、公平に視る時は、昔ながらの傳統を打破つて、假令、微賤から身を起した者でも、實力と信用さへあれば、如何なる者でも、大臣に成り得る、といふ、新しい型を作つてくれたのであるから、無條件に、之を歓迎しても、よかつたのであらうが、世間の事は、それ程に、單純なものではなく、薩長といふ薩閥のために、政權を壟斷された、といふ事が、ひどく、政

黨人の感觸を害うて、何等かの機會があつたら、内閣を倒壊し、藩閥の大官を斥けて、政權を、政黨の手に收めよう、との希望が、なか／＼に、熱烈であつた。

殊に、明治十年の頃から、自由民權の旗印を掲げて、薩長藩閥に、對抗し來つた、その感情は、容易に解け難く、況して、藩閥の側では、政黨人の集會や、言論に向つて、極度の壓迫を加へ、それが爲に、政黨人の苦難は、筆紙に盡し難きほどであつた。

或は、牢獄に投ぜられ、或は、生活の窮苦に喘ぎ乍らも、それを堪忍んで、闘ひ來つたのであるから、藩閥の人々に對しては、非常な敵愾心を、有つて居たのである。

詔勅に依つて、明かに約束された、國會の開設は、まだ三年の後である。靜かに、その日が來るのを待つ、といふ程に、政黨人の心理は、悠長して居なかつた。一日も早く、其期を早めて、目的の達成に努めよう、といふのが、政黨人の氣分である事は、掩ひ難き事實であつた。

時恰も、谷干城が、歐米の視察から、歸つて來た。谷は、此内閣に、農商務大臣として、異色を有つ、一個の存在であつた。

どちらかと言へば、保守的思想に據り、伊藤一流の歐化主義には、反對して居たのであるが、谷の同志には、鳥尾小彌太、三浦梧樓、陸實、高橋健三、杉浦重剛、淺野長勳等の人々が居て、歐化主義に對しては、すべてに於て、反對の傾向があり、政治的にも、對立して居たのであつた。

伊藤等は、新内閣の組織に當り、それらの人の、感情を和らげる意味に於て、谷を、内閣へ引込み之に依つて、多少の聯絡を、取り得るものとして、狡く考へたのであつたが、事、志と違つて、却て、谷の爲に、内閣へ、龜裂の入るやうな、馬鹿らしい結果を、見るに至つた。

谷の保守的思想は、洋行に依つて、一段の強味を加へ、伊藤等の歐化主義は、我日本の國粹を、破壊するものであるとして、歸朝の後には、盛に其説を、唱ふるに至つた。

時も時、井上外相は、條約改正の手段として、丸ノ内に、鹿鳴館を作り、長夜の宴をつゞけて内外人の交際と稱し、其頃の事としては、物珍らしく思はれた。舞踊會なるものを、連夜の如く、打續いて開き、又、別に、人種改良會なるものを興し、内外人の離婚を唱へたり、演劇改良會を設けて、傳來の歌舞伎に、西洋趣味を加へようとしたり、洋式文化の進歩といふよりは、寧ろ、輕跳、浮華、淫靡の風俗を、助長せしむるが如き、種々な計畫が、突飛的に、行はれ始めたから、そこで、反動的に、國粹保存の運動が、旋風の如く、捲起つて來た。

一般の情景が、斯ういふ風に、なつて來た時、谷は、條約改正の缺點を指摘し、施政の弊を數へて一篇の奏文を上り、大臣の椅子を抛つて、野に下つた。

茲に於て、各方面に、歐化主義反對の運動が、盛になつて來た。その機會を捉へて、自由黨の倒閣運動が、非常な勢ひを以て、起つて來たのであるが、それと前後して、或は上奏に、或は建白に、時

局を憂へ、各種の意見が、公にされて来た。
 板垣退助、副島種臣、尾崎三良、佛人ボアソナード、勝安房等の人々が、それらの立場と、異なる觀察から、歐化主義に、反對の意見を、發表するに至つた。
 その中に於て、海舟の意見書には、頗る異色があつて、識者の注意を惹いた。

一 論鋒不合、彼れ我れ見を殊にすと、中心不快にて、萬不折合と、鳥渡見候得ば、其の異なる點同様には見得候へ共、結果大に異なれば、邦家或は一家と雖も、各心中不快を懷き、不折合に候得ば、富豪の家は貧家と變じ、邦家に於ては、貧國に移り可申、經濟の要、一國不快ならざる事、最も第一の注意すべき、緊要の點に御座候事。

一 舊政府天保の末年には、儉素の力にて、國産近世に無之、充實致候得共、一家不折合を生じ候より、忽ち金庫空乏を生じ、何かに耗損候哉と存候様相成り、誠に實際に臨み、尤確と致し候後鑑と存候事。

一 戊辰已來は、百萬石の持高、纏に七拾萬石と相成候得共、一家の不折合を生ずる計りにて、かつ今日まで生活相立ち候、是又經濟の要、和不和に止まり候能き實驗と、存候事。
 一年々、下民貧困に陥入り候様に及べば、是より遡昇り、府政の缺乏を生じ候事、久しからず、

是を實際に顯る、様なる形勢と可相成、痛心の儀に御座候、是等の處、最も厚く御注意の事。

一 邦家の政權、近來にては、舊薩長兩藩人にあらざれば掌握難きが如く、衆人相心得、他は絶念の恨に候、何人にも宜敷候得共、右様之人情にては、兩藩人自から政權を争ひ候形勢に陥入可申候間、各少しも御留意御心中に無之様、益々御協和被成度候事。

一 兩藩人は他藩人よりも、一層も二層も、御さしはまり御心思を苦しめ、可相成丈け、偏頗に不相成様、御心掛專一と存候事。

一 是迄當藩人、互に御協和、勉て御一致の姿、下より見候得ば、顯然に候得共、猶厚く御注意有之度、藩士敗北被爲候共、邦家轉覆は、致間敷候得共、他に兩藩人の如く心思伸び、精力強きは無之候間、御自重有之度候事。

一 近來、高官の方が、さしたる事も無之に、宴集夜會等にて、太平無事、奢侈の風に御流れ候哉に相見へ候、何とか御工風、穩便の御宴會に、被爲度候事。

一 舞踏會盛んに被行、附いては淫風の媒介となる如き風評も、下にては紛々、窃に相傳候。左様の儀、萬々有之間敷候へ共、今少し御控へ、所謂ゆる程能く被成候方、宜敷候事。

此二箇條は、どうにても宜敷儀ながら、下民困窮の餘り、喋々訛傳に至り、終に偽をして眞と成し又眞を偽となし候情有之、外國人共、思誤無之とも申難く、左様にては、大に萬事相響を生じ

候様相成可申と存候事

一 御東幸以來、近年に及び候得ば、唯だ下民厚税に困み候のみにて、荷恩の感覺、愛國の精神、減耗候哉に存候。下民と雖も、心掛け宜しく、士大夫に恥ざるものも可有之、是等時々御取調、家

一 近來、洋學大に進、舊洋學者輩の陳腐に屬する者、草莽に多く相成候。是等は時として、其上等なるものは、公然拜調被仰付、中以下と雖も、時々御取調へ御褒詞、或は學資被下、舊時の功勞

一 邦内長里數の鐵道は、人民の便利のみに無之、軍備の必要、其多きに居り候事、故に、陸軍省にて多人數徵兵を被召候事を被止、鐵道築造に、費用御差出相成度候事

一 近衛兵は、可成丈、士族の子弟御選抜、御用相成度候事

一 總ての御改良、甚だ恐懼ながら、御規模遠大ならず、目前の成功を急ぎ被成候故、小事に汲々として、また成就せる前、既に財用の缺乏し、半途にして止候事而已多く、財寶は海外に出不返

一 數百年の慣習は、一朝に改り候事には無之候。御維新以來、御改の廉、二十年を経て、元

復し居候事、甚だ多く、従前の御改革は、無用徒勞に屬し、是れが爲めに財用莫大、空しく消費

候事

一 米作を廢し、田畝を變革候事は、中々出來難き儀に候間、先づ其儘にて宜しき事は、御手を附られざる方、可然と存候事

一 田租は低く相成候得共、國內は舊より賦課大に相増り、下民困窮相極め候。牧民の事、厚く御注意有之度候事

一 幕法兎角、御好み不被爲、無益の御改正御座候得共、幕法とて、徳川家にて元來新法相立候儀には無之、總て舊慣に依り、其弊を改めし迄の事に候處、久しくして再び弊を生じ、良法掩はれ候儀にて候、能く御調へ相成候はゞ、詳悉御了解可相成候事

一 慶長以來、邦内の金銀、數多からず候處、維新以來、其半ばを消費せしのみにて、別段富國の基相立ち候や、分り不申候。是等は多年取調べ置候書物有之、明了にて候。自今以後、支那の交易を盛にし、後年富國の基礎相成候様、御計畫有之度候事

一 支那は隣國、誠に我國の制度文物、悉く彼の物より傳來せし國柄故、今更仇敵の様、御覽なされず、信義を以て厚く御交際、片寄り不申、愛憎偏頗に不陷様、被成度候。既に舊政府の轍も有之、能く御鑑みの事

右等の事共は、數年來、林下に罷在り、志士論客の内話を、窃に聽取候所あらましにて、全く私

の意匠に出候儀にては無之、御優渥の天恩感佩の餘り、不避忌嫌、無腹藏、申述候儀に御座候。總て世上の事は、寛濶正大の中に移換候儀は、自ら公平にと行候譯にて、既に幕府の末路瑣事に汲々として、人物も育ち申間敷形勢の處(中略)横井、佐久間、西郷、大久保、木戸數氏の如き人物、變死致し候後、後世具眼の者、必ず定論も可有之、是事も現今に及び候ては、一睡の夢と相成り申候。今日の事、行末今ま二十年も経候は、成程同一大樞、泉下に相逢て、相哭可致は、不免可の數に候間、後年今日に立勝り候様の人物、輩出候様に、御工夫專一に候。方今の高官何もかも、御一世に餘さず洩さず、可被成遂とて、御性急は、勞して其の功無き事、顯然の儀に候。既に目今の英士を培養せしは、寧ろ誰れなる乎。御閉目、御一考被成候は、即座に御了解相成る可きこと、存じ候。件々陳腐に屬し候得共、無詔の直言、獻芹の微衷、宜しく聽納奉希候也。

一一

著者は、横濱の同志と共に、井上條約案に、反對の意見書を持つて、東京へ、出て來たのであるが先づ、赤坂氷川の勝邸を、訪問したのであつた。

海舟の事に就ては、種々、聞いて居る事もあるし、一度は、親しく逢うて、其教を受けたい、と思つて居た折柄、此運動を始めて、政府へ意見書を、提出する事になり、二千餘名の調印ある、委任状

を携へ、その代表者として、上京したので、此機會に、同志を説いて、共に、海舟を、訪ねたのである。

海舟の此の建白書は、餘り理窟張らず、全文が、平易に書流してあるが、當局者としては、之を讀んで、どう考へたらうか、といふやうな事を、思つて居たので、それらに就ても、自分等の考へを、話して見るつもりであつた。

高位高官に在る者が、頻に宴會を開いて、奢侈の風を、一般に教へるが如き、態度に對して、物柔かに、諭して居るのが、吾々には、ひどく氣に容つたのである。

又、舞踏會に就ても、國民の中には、貧窮に陥つて、可成り困つて居る者が多くあるから、少し遠慮したらよからう、といふやうに、なんどりと、説いて居る所が、頗る妙である、とも考へた。

其他、幕府時代と對照して、政弊の急所を、ギユツと、押へて居る所なぞ、流石に、老練の人物である、といふ感じを、深く持たせられた。

殊に、その結論の如きは、何とも言へぬ、妙味があつて、當時の大官が、之を讀んだ時には、臍の邊りが、むず痒かつたらう、と思ふ。

さうした事を、同志の間で、語り合つて居たので、海舟を、訪問する事には、一人も異論がなく、政府へ、書面を提出する前に、先づ以て、海舟に、會つて見よう、となつたのである。

所が、先生に、會つて見ると、その態度は、餘りに無雜作であり、十年も、馴染んだ人の如く、少しの隔りも置かずに、叱り付けもすれば、教へてもくれる。毒舌、諷刺は言ふも更なり、縦横無盡に説き立てる、その調子には、少なからず驚かされた。

これが縁になつて、其後も、ちよいと、お訪ねして見たが、むづかしい事を、やさしく話す、議論の骨は、實に絶妙と言ふべく、大に得る所があつた。

時には、その経歴を聞かされ、幕末時代の人物や、大きい出来事に就て、輕妙な比喻を交へ乍ら、話される中には、種々の教訓が含まれて居た。

「先生には越後の小千谷から出た御方が、御先祖である。と聞いて居りますが、本當でせうか」

「ウム、其通りだ」

「どういふ御方でせうか」

「それは、男谷檢校といつて、なか／＼偉かつた人らしい」

「その御方の家筋は、どういふのでせうか」

「そんな事は、判らない」

「然し、先生の御先祖だとすれば、その子孫である、先生が、御存じないといふのは、可怪しいでは

ありませんか」

「いくら可怪しくつても、判らん事は、判らんのぢや」

「どういふ所が、偉かつたのですか」

「詳しい事は知らぬが、貨殖の道には、よほど通じて居たに違ひない。江戸へ出て來た時には、五百文か、六百文の端錢を、持つて來たのだが、一代のうちに、十萬兩分限になり、地所ばかりでも、十ヶ所以上を、有つて居た、といふ事ぢや。昨今でこそ、地面持は幾らでもあるが、舊幕時代には大きい地面持は、さう澤山は、なかつたものぢや」

「稼業は、何をして居たのですか」

「金貸といふのだから、どうせ、高利を取つた事ぢやらう」

「高利貸といふものは、大層、儲かるといふ事ですから、一代に、十萬兩なんて、偉い金持になつたのでせう」

「十萬兩といつても、實は、もつと澤山、持つて居たに違ひない。わしの祖父は、三萬兩の持參金で武士の家へ、養子に行つた、といふ事であるから、實際の身上は、大したものであつたに違ひない」

「祖父さんといふのは……」

「それが、男谷平藏といつて、これも、變つた人間であつた、と聞いて居る」

「兎に角、先生ほどの御方が、その御先祖が、國許に居る時、どんな身分であつたか、といふ事を、知らないといふのは、實に、變なものです。調べて見たら、判るでせう」

「それア、判るかも知れんが、そんな事は、どうでもよい」
「何か少しでも、御承知なら、お聞きしたいのですが、どうでせう」

「わしの想像では、十五か六歳で、僅の錢を持つて、國を離れたのであるし、それに生れつきの盲目といふ事ぢやから、まア、乞食のやうなものぢやつたらう。元來、小千谷といふ所が、瞽女の本場といふ事で、冬を越してから、雪が解ける頃になると、破れ三味線を背負つて、道中を稼ぎ乍ら、江戸へ出て来る、といふ事を聞いて居るから、要するに、その仲間ぢやつたらう、ハツハ、」
偉くなつた人は、先祖の事を、自慢らしく話もすれば、又、話す程の先祖がなければ、態々、先祖を拵へて、吹き立てるものである。然るに、海舟は、そんな事に頓着なく、先祖は、瞽女と一緒に、出て来た乞食のやうなものだらうと、平氣で、さう言うて哄笑されたのだから、著者も、意外の思ひをした。

「若し、先生のお許しがあれば、小千谷へ調べに行つて見よう、と思ひますが、どうでせう」

「お前も、可成り物好ぢやのう、他人の先祖を、探して歩く奴が、あるかい」

「それでも、調べに行つて見たいと思ふのですが、許して下さいますか」

「そりア、お前の勝手ぢや。但し、旅費は、自分持ちぢやよ、ハツハ、」

こんな話をして、引取つて来たが、それから少し経つて、著者は、小千谷まで、調べに行つた事がある。けれども、結局、要領を得なかつた。

土地の人は、男谷檢校といふ事さへ、さらに知らないばかりでなく、自分の土地から、そんな偉い人が、出て居るとは、少しも知らなかつた。殊に、勝安房の先祖と聞いて、物好きな人が、いろいろと、調べてくれたけれども、少しも當りがつかぬので、空しく歸つて来た。

三二

著者が、海舟の事を、調べ始めて、非常に敬服して居る事は、幕府が倒れる頃、小栗上野介といふ旗本中の傑物があつて、伏見鳥羽の戦役に、主戦論を、頻りに主張したが、海舟は、既に陸軍總裁といふ、偉い肩書を、有つて居たので、小栗は、海舟に向つて、盛んに主戦論を唱へ、箱根の險を扼して、薩長の兵を迎へ撃つべく、戦略上の事まで、打明けての相談をしかけた事がある。

然るに、海舟は、非戦論であつたから、之に對して、堂々と、その意見を述べたかといふに、そんな事はなく、小栗の強い意見を、素直に聞いて居て、たゞ首肯くばかりであつた。

小栗の背後には、陸軍の教官をして居る、佛蘭西人が居て、小栗を、煽つて居るのを、知つて居る

から、議論腰になつて、小栗と争ふやうな、へまな事はせず、邸へ歸つて來てから、佛蘭西人の傭を解いて、禍ひの根を絶つてしまつた。

小栗は、海舟が、相手にしなかつたから、今度は、慶喜に對して同じやうな事を言ひ、頻りに主戦論を強調したので、慶喜は、小栗の職を解いてしまつた。

斯ういふ風の遣り方で、主戦論者の鋒先を避け乍ら、自分の立場を、作つて行つたのだから、横着といへば、横着な遣り方であるが、非戦論の信念を以て、終始した事は、實に偉いものであつた。

坂本龍馬が、攘夷論に熱して居る頃、海舟は、大阪の安治川口に、私塾のやうなものを、開いて居つた。

海舟の開國主義は、弘く知られて居たから、坂本は、頻りに憤慨して、海舟を斬つてしまはう、と考へ、千葉東吉を紹介者として、海舟を、訪ねた事がある。

坂本は、千葉周作の門人でなく、周作の弟、東吉の門人であつた。北辰一刀流は、相當に使ひこなした人である。

東吉は、坂本の師であつたが、主義に於ては、同志の關係に、なつて居た。坂本から頼まれて、海舟の所へ、案内して來たのである。

海舟は、島田虎之助の門人で、劍術は、可成り強かつた。従つて、東吉とは、其道に於て親しかつた。

東吉の口添へで、坂本が、初対面の挨拶が終ると、

「君が、土州の坂本か」

「左様です」

「さては、やるつもりで來たな」

と言ひ乍ら、右の手を上げて、斬る眞似をした。

これには、流石の坂本も、ぎよツとして、何を答へやうもなく、先生の顔を、ぢつと見詰めて居た。

海舟は、世界の太勢から説き始めて、西洋諸國が、我國へ、通商を求めて來るのは、當然の事でも

あるが、同時に、日本から、進んで之に應ずるのは、日本のためである、といふやうな事を、頻りに論じて、若し、之を拒まうとするには、國を擧げて、戦ふの外はない。それには、軍艦や、兵器の

改良と、充實を圖つてからでなければ、勝ち歩のある戦は、出来るものでない。殷鑑遠からず、支那

の現状を見る、と喝破して、坂本の攘夷論を、深く戒めた。

其日は、それで済んだが、其後、幾度か、海舟を訪ねるうちに、遂に海舟に服して、坂本は、その

門人になつてしまつた。

よく似た話が、もう一つある。海軍奉行をして居る時、幕府の軍艦に乗つて、大阪灣へ乗込み、姉小路公知を誘つて、此船へ乗込ませた。大阪灣を出て、紀州沖へかゝつた時、風が強くて、船の動揺が、大分はげしかつた。姉小路は船酔のために、頭も上がらず、頗る苦んで居る。

それを見て、海舟は、姉小路を、無理に引起し、甲板へつれ出した。

『攘夷論の本家が、そんな事では、愈々西洋と戦を始めた時、どうして戦へるか。もつと、しつかりして、先づ船の事から、覺えて行かなければ、なるまい。』

殊に、日本は、四方が海であるから、外國と戦ふには、海の守りが第一である。攘夷を實行しよう。とするには、海防の設備を研究し、船の操縦を、覺える事が、最も肝要である。

と言つて、これから、攝海の海防に就て、大に論ずる所があつた。此時には、流石の姉小路も、へと／＼になつてしまつたが、海舟の言ふ所には、非常に感服して、今迄の攘夷論は、何時か知らず、忘れたやうになり、海防や、軍艦の事にばかり、心を傾けるやうになつた。

それから、暫くして、姉小路は、攘夷派のために、暗殺されたのである。

四

野田卯太郎は、貧家に生れて、若い頃には、豆腐の行商をして居たのであるが、志を起して、福岡の縣會議員になり、自由黨へ入つて、徐々に、歩を進めて、衆議院へ進出した。

六尺豊の大男で、學問は無かつた人であるが、茫洋として、捉へ所のない、どことなく、禪味を帯びた、一種の人物であつた。

筑豊の炭山は、九州に於ける、富の根源ともいふべく、我國に於ける、名物の一つとして、世に知られて居るが、炭山主の多くは、井上馨と、深き縁故があり、四十年前の不況時代には、井上の庇護を受けて、それが爲に、二大戦役を経て、炭價の暴騰に依り、千萬長者が、續出した後も、井上の一喝には、頭の擧がらぬ連中であつた。

そこで、野田は、炭山主の顧問となり、井上との聯絡係として、動もすれば、爆發しかける、井上の疝癪を融和することに、永い間、努力したものであるが、流石の井上も、野田に逢つては、疝癪の利めがなく、野田の馬鹿笑ひに、ごまかされたものである。

斯うした事情から、三井家とも、深い因縁を有ち、自由黨が、政友會となつてからも、此大男は、無くてはならぬ人として、黨の方からも、重用されて居た。

原内閣の時に、遞相となり、閣内に在つては、調和の方を利かせ、政友會と、三井の關係をして、愈々深からしめたのは、野田の働きであつた。

早くから、勝と知り合ひ、東京へ、出て来れば、必ず訪問するのが、常例であつた。怒ひに、少しばかりの學問があれば、それが邪魔をして、勝にも、取入る事は出来なかつたであらうが、學問のない代りに、常識は、非常に發達して居たから、勝の方でも、野田に對しては、紐を緩めて、話込む風があり、野田は、勝の一話一言に、何物かを握り得て、益する所が、少なからずあつた。

初めて、代議士に當選した時、先づ、東京へ出て来て、氷川の勝邸へ、やつて来た。勝は、爐端の机に、もたれ乍ら、何か讀んで居た。所へ、大きい男が、ノソリと入つて来た。

「ヤア、先生、暫くでござつす」

「ウム、卯太さんぢやな」

と言つて、ニヤリと笑つた。

野田は、代議士の當選を、誇り顔でやつて来たのだが、卯太さんと言はれたのでは、拍子抜けの加減で、すぐに自慢話も出来なかつた。

「時に、どうぢや。面白い事でもあるか」

「ハア」

「國の方に、變つた話はないかのう」

「別に、變つた話は、ありませんが、わしはなア、代議士に、當選しをつたのぢや」

「やれ〜」

斯ういはれて、野田は、又行詰つた。やれ〜といふのは、失望嘆息の言葉であるから、野田としては、意外に感じたらう。

「先生」

「ウム」

「わしは、當選したのぢや。落選ではござつしえん」

「それぢやから、やれ〜と言つたのぢや」

「ハ、ア」

「お前ほどの體身を有つて居て、若し、力士になつたら、さしづめ、横綱ぢやらうが、代議士では、大きい陣笠で、税は上るまいよ、ハツハ、、、」

それで、折角の自慢話も、出来ず、雑談に時を移して、野田は歸つた。

此應接法は、象山譲りで、大概の者は、斯ういふ風に、扱はれて了ふから、グーとも言へずに、歸るのが常であつた。

然し、野田の場合には、大した苦言であつて、恐らく、野田の發憤は、此一言に刺戟されたのであらう。幾年かの後には、党内一流の人となり、閣臣の列に加つたのであるから、世間並の陣笠とは、

大に異ふ所があつた。

勝の言ふた如く、横綱にはなれなかつたが、安く見ても、三役には、なれたのである。野田が、人に對する應接のうち、一種の調子があり、何となく超然として居ながら、その癖、何事にも、ぬかりの、無かつた、あの呼吸は、勝から習うたものと、著者は見て居る。

五

勝を語る場合には、高橋泥舟と、山岡鐵舟を、見廻す事は出来ぬ。高橋は、千石取りの槍術師範であり、山岡は、幕臣小野朝右衛門の倅で、高橋の兄、山岡靜山の女に、入婿となつたのであるが、無刀流の開視として、武術に於ては、幕臣中、屈指の人であつた。

鐵舟と、泥舟に就ては、別項で、述べるつもりであるが、茲に一つ、傳へて置きたい事は、海舟は開國論者であり、泥舟と、鐵舟は、攘夷論者であつた。それにも拘らず、三舟の間には、一種の諒解があつて、海舟の立場に、支持者となつて居た事である。

殊に、二舟は、三河以來の幕臣であるが、海舟は、途中から飛込んだ、謂はゞ、新參の成上り者といふべく、勝といふ家は、小祿ながらも、幕臣の列に在り、そこへ養子になつた男谷檢校の倅が、海舟の祖父であつた。

さうした因縁からすれば、海舟は、遠い祖先からの直參ではなく、二舟の如き、三河以來の直參に比べたら、出身の上に、大なる差があつて、普通の交際としても、對等には見られず、況して、開國攘夷といふが如き、國家の大問題に就て、意見に隔りがある以上、對立的になるのが、當然であるにも拘らず、議論や意見を別にして、二舟が、海舟のために、努めてやつた事は、頗る異とすべきである。

要するに、三舟の交りには、一點の私心がなく、東西、道は異にしても、落付く先は、同じ事である、といふ點から、互に諒解し合つて居たに違ひない。

武術の家に、身を起した者は、兎角、何物かに捉はれて、頑強な所があり、容易に、人と和する事は、むづかしいのであるが、三舟の間に、其事がなかつたのは、流石であると思ふ。

明治になつてからは、三舟が、各々、その行く所を異にし、勝は、政府に入つて、樞要の位地に就き、鐵舟は、宮中に入つて、高貴の御前勤めに終始したが、獨り泥舟のみは、官府に入らず、浪人生活に、生涯を終つた。

海舟の進退に就ては、世に、様々の批評も起つたが、鐵舟は、一箇の武人として、且つ、その晩年は、禪門の人として、清き一生を終り、武人の龜鑑として、今に及んでも、その人格を推賞する者が多く、進退の上にも、自ら節度があり、他の批評を、受ける事がなかつた。

泥舟に至つては、幕臣としての、意地を立て通し、一箇の江戸ツ子として、その存在を、認められ
たに過ぎなかつた。

六

海舟に就て、大に味ふべき所は、人間學の修業に、専心した事である。同時に、心膽を鍛へる事に
努めて、略ぼ、體得した點である。

若い頃、島田見山に、劍術を、教へられたのであるが、見山は、或時、海舟に向つて、

『武士である限り、武術を學ぶのはよいが、徒に竹刀を振廻して、技巧を銜ふばかりが、武術の本意
ではない。それよりか、心膽を鍛へる事に、努めなければならぬ。それさへ出來れば、劍術の如き
は、自ら上達するものである』

と、教へられたので、それから、海舟は、王子の權現へ、通ひ始めた。

さればとて、神信心をするのではなく、權現の境内は、樹木が鬱蒼として、日光を遮り、晝のうち
でも、何となく物淋しい。夜になれば一層の淋しさで、大概の者は、恐れを爲して居たのである。

そこへ、海舟は、毎晩の如く、出かけて行き、木劍の素振りをして、くたびれると、社殿の椽端に、
休息して居る。一夜の中に、幾度か、それを繰返して居たのであつた。

往復の道程も、相當に遠く、それだけでも、疲れは覺へるのであるが、徹夜、同様の修業をして、
歸つて來るのだから、随分、辛い事もあつたらうが、殆んど、半年餘りは、一日として休まず、それ
を續けたのであつた。

斯うして、心膽を練り、身體を鍛へたのであるから、度胸も据れば、危變に臨んで、その態度にも、
餘裕があつたのである。

本所の青柳や、枕橋の八百松へ、行くやうになつた時は、その身分も高く、金廻りもよかつたので、
豪遊こそはしなかつたが、餘裕のある、遊び振りであつた。

何のために、斯ういふ所へ、親しく出入したか、といふに、其頃の料亭には、一種の風俗があつて
どうかすると、女將の中にも、男勝りの偉いのが居た。

八百松の女將は、却々のしつかり者で、海舟には、最も氣に容りであつた。青柳の女將も、それと
同じやうに、偉い所があつたので、それを相手に、一杯やり乍ら、世間の噂を聞いたり、多くの雇人
を、どういふ風に使ひこなすか、といふやうな事を、それとなく、見て居たのである。

斯ういふ事は、うつかりして居ると、何でもない事であるが、注意して見れば、一つとして、参考
にならぬ物はなく、人の上に立つ者は、そこに迄、注意する必要がある。

軍艦奉行にもなれば、陸軍總裁にもなり、若年寄並として、幕府の實權に、觸れて居ながら、市井の俗事に、深い注意を拂ひ、常識を取入れる事に、専念したといふのは、流石に、海舟なればこそである。

晩年の海舟が、興に乗ずれば、其頃の思出話に、例を取つて、有益な話を、よく聞かせてくれた。それを喜んで、多くの人が、氷川参りを、盛にやつたものだ。

福澤諭吉が、『瘦我慢の説』を公にして、海舟の進退を、詰論した時、海舟は、顧みて他を言ひ、人は人、俺は俺、といったやうな、茶化した言葉で、一蹴し去つた、あの調子は、海舟の特色として、頗る面白かつた。

大西郷と、海舟の交りは、餘程深かつた。互ひに、諒解して、心の交りを續けたのであるから、頗る妙である。

海舟は、知恵の固りの如く、大西郷は、それと異つて、智を現さず、無智の如くして、却て大智に、生きて行くといつた風の人であつた。

大西郷が、海舟に許した如く、海舟も亦、大西郷を信じて、互ひに、その胸奥を開き、維新の前後を通じて、どこ迄も許し合つた所に、兩者の大なる所がある。

大西郷に對する、世間の批評は、いろく、残つて居るが、其中に於て、最も適切である、と思はれるのは、勝の批評であつて、而も、其内容には、他に對する、教訓的の言葉もあり、大西郷の心境を、ハツキリと、認識し得るものがある。

依つて、その批評の一部を、茲に掲げて、兩雄の交りが、どの程度に迄、深くあつたか、といふ事を、明かにして置く。

古より邦家の爲に大勳あるもの、其終りを得しは甚だ稀なり。維新の際、大事に任じ、大議を決し、斷然不顧、其能に矜らず、其功を思はず、洪業成るに當て、其瑣事は人に任じ、忘るゝが如く、知らざるが如きものは、予、西郷氏に於て、之を視る。これに次で、大久保氏木戸氏あり、共に一世の雄、然りと雖、西郷氏に比せば、亦降ること數等、兩氏が爲す所、非常にして端倪すべからず、是を以て忌憚せられ、其説諸官と相合はず、西郷氏は然らず、自ら人を評して云く、彼は余に勝れり、亦余の及はざる所なりと、絶へて介意の事なく、其遠識大度、豈一世にして窺ひ知るべけんや。

西郷は、漠然たり、茫然たり。大久保は、截然たり。整然たり。官軍の江戸に入るや、江戸市中の取締、甚だ面倒となれり。幕府既に去り、新政未だ行はれず、恰も無政府の姿なりし故なり。豈料んや、西郷の大量なる、此難局を、余が肩に投げ掛けんとは、江戸を去るや、曰く『どうか宜しく

お頼み申します。後の處置は、勝さんが、どうかなさるだらう」と。此漢々茫茫たる「だらう」には、余も閉口せり、大閉口せり。もし大久保ならば、此事は斯く、彼の件は斯く、とそれ／＼几帳面に、豫め談判し置くべきに、さりとば餘り漠然ならずや。
西郷と大久保の優劣こゝに在り、西郷の天分、極めて高き所以、亦こゝに在り。

亡友南洲氏 風雲定大是 拂衣故山去 胸襟淡如水

悠然事躬耕 嗚呼一高士 只道自居正 豈意素國紀

不圖遭世變 甘受賊名訾 笑擲此殘骸 以附數弟子

毀譽皆皮相 誰能察微旨 唯有精靈在 十載存知已

友人 海舟 勝 安房

海舟概觀 (下)

▲大正十四年十一月二日、上野公園自治會館に於て、清明會主催の「海舟先生事蹟講演會」が舉行された時に「幕末の海舟先生」と題して、著者の試みた、講演の速記があるから、茲に掲げる事にした。

海舟先生の幕末に執られた、行動の一つに付て、申述べるのであります。私のは、別に色々な文書を公表して、歴史の資料を作る、と云ふやうな、さう云ふ遠大な考で、お話するのではない。興味を本旨とした、一つの物語に過ぎないもので、無論、御参考になるやうな事、あるべき道理がない。唯、自分の知り得た事で、斯う云ふ事があつた、海舟先生は、斯う云ふ大きい方であつた、と云ふことの一端だけを、極く簡単に、申述べて見たい、と思ふのである。

東京の人は、少くも一昨年の震災で、相當の苦しみを、體驗して居るだらう、と思ふ。それは今迄にない苦しみを、體驗して居る。若し、あの通りの事が、六十年前にあつたならば、どうであるか。

六十年前に、あの通りの事があつて、更に又、一昨年さくねんに於て、之これを重かさねた場合に、此東京このとうきやうは、どうなつたであらう。斯う云ふことを、考へて來ると、海舟先生かいしゆうせんせいの、偉大なる仕事いだいなるしごとが、始めて頭の中へ、入ることになる。

幕末ばくまつの當時たうじに、若し海舟先生かいしゆうせんせいが、あのやうな態度たんどを執とらないで、官軍くわんぐんに對抗たいかうするとか、敵對行爲てきたいかうゐを執とるとか、或は總てを放棄ほうきして、成行なりゆきに委まかせやう、と云ふやうなことを、なされたならば、六十年前ねんぜんに、江戸えどは、全滅ぜんめつして居る。さうして、其全滅そのぜんめつした後の、復興ふくこと云ふものは、少くとも三十年以上ねんじやうを要えする。丁度ちやうど、それが出來上つた時分じぶんには、又一昨年またさくねん、破壊はくわいされると云ふことになる。其間そのかんに於ける一般いぱんの人の苦くるしみは、言ふまでもない。此東京このとうきやうと云ふ一地方いちほうに於ける、文化ぶんくわ其ものゝ進歩しんぽを止とめることは、容易やういならぬ影響えいぎやうを、日本全國にっぽんぜんこくに及およぶものである。

斯う考へて來て、六十年前ねんぜんに、此災禍このさいくわを、未然みぜんに防いで下くださつた、と云ふ、此功績このこうせき、其恩澤そのおんたくに對しては、少くとも、現代げんたいの東京とうきやうの人は、之これを思おもはなければならぬ。斯う私は、考へて居る。其考への下もとに、海舟先生かいしゆうせんせいの事蹟じせきを、殆んど二十幾年いくなの間、間斷かんだんなく語つて居り、又不斷まただんに懇うへて居る。然るに、最近さいきんになりまして、漸やうやくさう云ふやうな事柄ことがらが、他の位地みちのある方かたからして、盛さかんに唱となへられて來まして、大分各方面たいぶんかっほうめんに於て、海舟先生かいしゆうせんせいの恩おんを知る人ひとが、出來て來た、と云ふことを、私は、嬉うれしいこと、と思ふ、と同時に、海舟先生かいしゆうせんせいの事蹟じせきを知る場合ばあひに於ては、どうしても、維新史いしんしと云ふものを、見て置おかなければならぬ。

所ところが、此維新史このいしんしの完全くわんぜんなものは、何人なんびとが見ても、所謂完全いはずるくわんぜんした、と云ふものは少ない。絶無ぜつむとは言はぬが、甚はなだ少ない。只今講演ただいまこうえんをなされた、本多辰次郎先生ほんだたつじろうせんせいの著あはされたものが、完全くわんぜんなもの、一つとして、存ぞんして居る。佐幕さばくにも偏へんせず、勤王きんのうに片寄かたよらず、極めて公平こうへいに、さうして廣ひろい意味いみに於ての材料ざいりやうを、殆んど網羅もうらされて、それを極めて簡略かんりやくに、縮少しゆくせうせられて、書いてあるものが、本多先生ほんだせんせいの著書しよのやうに、私は承知しょうちする。御目おめに掛かかるのは、只今始めてあります。けれども、私は、常に講演こうえんの席上せきじやうに於て、維新史いしんしの最も完全もつとくわんぜんなものは何か、と云ふことを、忙しい人いそがひが、短い時間みじかで、讀むのに適てきした書物しよぶつを、聞きかれた場合ばあひ、本多さんほんださんの書かかれた物が、一番簡潔ばんかんけつである、と云ふことを、答へて居るのであります。

私が、最も維新史いしんしの上に於て、深い信仰しんかうを拂はらつて居る御方おかたが、講演こうえんせられた後に立つて、其門生そのもんせいの如ごとき關係くわんけいの、私が、其後そのあとを承うけはることは、聊いさか窮屈きゆうくつの感かんじを、持もつ譯わけである。併しかし、私わたしは、人に教へるのでなく、自分じぶんが、樂たのしみに話はなすので、聽きいて居る方かたが、聽きいて居らうと、居をるまいと、私わたしの關かんした事ことでない。けれども、斯うして話はなす以上いじやうは、聽きいて戴いたかなければ此處ここへ出でて來た、意義いぎをなさぬ。それで是非ぜひ、聽きいて貰もらはなければならぬ。斯ういふ譯わけであります。

當時たうじ、鳥羽伏見とばふしの戰たたかひが終はりまして、慶喜公よしのぶこうは、江戸へ御歸りおかへになる、と同時に、最も力強ちからつよく唱へ

られたものは、戦争のやり直しである。それには、佛蘭西人が、暗中飛躍を試みて、幕府の背後から煽り立てた、と云ふことも、事實あつた。海舟先生に對しても、陸軍の教官になつて居ります。佛蘭西人などが、盛に戦争の利を説いたけれど、更に受け付けず、果は、顔色を變へて迫つた、と云ふことが、幾度かあつたのを、先生は一蹴してしまつた。此力が、私は、大層強い力だ、と思つて居る。

當時、幕府の陸軍と云ふものは、佛蘭西人に教へられて居たから、さう云ふ場合に、幕府の、極めて地位の高い人は、深い資縁を持つて居る、その教師たる人を、背景とし、尙ほ擴げて言へば、佛蘭西政府を背景として、さうして、陸軍歩兵の教官をして居る、と云ふだけの、力を持つて居る人が、海舟先生に向つて、戦争繼續の議論を、吹込んで来る。それを一蹴してしまつた。此力と云ふものは、私は、頗る強い力である、と思つて、敬服して居る譯である。

殊に、海舟先生の、身分の上から考へて、その時代に、之を併せて考へて見れば、一層、さう云ふ感じを深くする、海舟先生の位置は、幕府に於て、一二を争ふほど、頗る高い位置に居りましたけれども、元來の出身から申しますれば、三河以來の譜代ではなく、一口に言へば、一時傭の家來と言つたら、一番宜いと思ふ。そのくらゐ幕府とは、資縁の浅い間柄である。

今日とは、事情が違つて、當時に於て、殊に江戸に於ては、三河以來の御譜代と言つたら、それは實に偉いもので、飛ぶ鳥も落すほどの勢ひであつた。百萬石の前田の行列さへ、たつた一人の旗本に

ぶつ止められて、どうすることも出来なかつた、と云ふのが、旗本の威力である。それだけの威力を幕府から認められて居る、旗本の多數が、戦争を繼續しやう、と云ふ議論である。

而して、海舟先生は、其旗本なるものではなく、遠き先祖は、と云ふと、何だか分らない、越後の國の小千谷から出て來た、盲さんが金持になつて、檢校になつた。それから、幾代か後の人に當るのである。小千谷へ行つて、調べて見ても、そんな人が、居たか居ないかさへ、分らなかつた。さうしたならば、當時、先祖はと云うて訊かれても、それには答への出來ぬほどで、先生の生れた家は、幕臣であつても、血統の上からいふ、先祖の事は、少しも判らなかつたのである。

唯だ先生には、實力があつた、其實力で、自分一代に、あれだけの位置と云ふものを、築き上げたのである。今日の時代なら、さういふ人程偉い、と云つて、一世の崇敬を受けますが、當時は、門地、門閥、系圖など、云ふものを、唯一の寶として、尊敬した時代であるから、其時代に、何處の者か、分らない者の孫さんが、出て來て、出世したのであるから、それに對して、議論では叶はぬ、力では叶はぬが、蔭に廻れば「なに、座頭の孫が、何だ」と云はれて、甚だしい輕蔑を受けた。

其中で仕事をすると云ふことより、むづかしいものはなからう、と思ふ。世を擧げて、戦争の議論を、唱へて居る中に、戦争反對の議論を押し通す、と云ふ力を、持つて居る人は、偉人でなければ、能はざることだ、と云へる。それを成し遂げてしまつた、そこに海舟先生の、偉大なる人格が、現は

れて居るのではなからうか、と、私は、斯う見て居ります。

併しながら、單り海舟先生のみに、強い力があり、尊ぶべき仕事をした人としても、その相手方になる者に、偉大な者が、出て来なければ、その大仕事は、決して出来なかつたであらうが、幸ひにして、官軍の方に、西郷吉之助なる者があつて、それで海舟南洲の兩先生、此兩雄の相對した、と云ふことが、總ての問題を、談笑の間に、解決してしまつた。

さう云ふ事に依つて、江戸は、始めて救はれたものである。江戸の救はれた、と云ふことは、言葉をかへて言へば、日本が救はれた譯である。當時、奥羽十五州は、大部分が聯盟を作つて居る。一二の雄藩が、只今の馮玉祥のやうな、態度を執つて居つたけれども、馮玉祥が、さういふ態度を執つて居るのは、弱いと決まつた譯ではない。そこが、馮玉祥の値打である。奥州にも矢張り、それが居た。大きい大名で、二三人は、どつちへ行かうか、ふらくとして居る。其ふらくとして居るのが、どつちか力が強ければ、強い方に附くに、決つて居る。唯だ其解決が、江戸の戦が、どうなるか、と云ふことに根差して居たものと、見なければならぬ。其江戸が、戦はずして終つてしまつた。そこで奥羽聯盟といふものは、びしやつと、根底から潰れてしまつて、會津と長岡が、如何に踏張つても、あの場合、奈何ともすることが出来ない。

然し、お前は、さう云ふけれども、江戸にも、戦があつたぢやないか、上野に戦争があつたぢやないか、と云ふ人が、あるかも知らぬが、あれは戦ではない。運動會の、少し大きいもので、戦の程度には行かぬ。どうせ、世の中の變る時、政府の代の變る時には、あの位のことはあります。それでも、慶喜公の江戸立退と云ふことが、まだ遅れたならば、あれでも、もつと大きくなつたのでせう。然しながら、御立退が早かつた。城の受渡しは、早く済んだ。それが即ち、海舟先生の力である。

然し、其當時に於て、唯だ海舟先生は、理窟の方から考へて、永遠の意見を以ちまして、日本を救はう、江戸を救はう、と考へて居られたには違ひないが、平和の方法ばかり、執つて居つたのぢやない。平和の方法を執つて、何處までも、それで押して行かう、と云ふ半面には、矢張り、戦の覺悟もして居つた。如何程に、道理を説いて話しても、官軍が、應ぜざる時には、どうするか。宜し其時には、力で行かう。そこが偉い。また其考へがなくて、唯だ平和と云ふのでは、是は誤りです。無條件降伏です。無條件降伏などは、偉い人でなくても、出来る。大概な者には出来る。

當時、下谷の稻荷町に、新門辰五郎と云ふ、俠客が居た。是は、慶喜公の御蔭で、あれだけになつたもので、慶喜公の御恩は、忘れない男である。辰五郎の所へ来て、海舟先生が、どう云ふことを、教へたかといふに、

「俺の方から、さア好いから始めろ、と言つたら、江戸の四方から、火を付けろ」と云はれて、辰五郎は驚いた。

辰五郎と云ふ男は、いろは四十八組の、火消人足の總元締である。その火消の總元締の所へ行つて火を付ける、と云ふことを言つたから、是は辰五郎も、驚いたに違ひない。

どう云ふ譯で、さう云ふことをするのですか」

「さうするのが、公方様の御恩返しになるのだから、さうしろ」

辰五郎は、これだけでは、頓と分らぬ。

「火をつけて、江戸を焼くことが、公方様に對する、御恩返しと云ふのは、どう云ふ譯でございませうか、其譯を、聞かして下さい」

其時に、海舟先生は、容を改めて、

「貴様は、全體、江戸ッ子ぢやないのか」

「私は、親代々の江戸ッ子でございませう。全くの江戸ッ子です」

「江戸ッ子と云ふ者は、どれは何うなつて、あれはあアなつてと、根掘り、葉掘り、譯を聞かなければ、仕事は出来ないものか、そんな廻りくどいものか。貴様は、公方様の御蔭で、今日の身分になつた、其御恩は忘れられない、脚を向けても寝ないと、常に言うて居るぢやないか。それ程、御恩を感じて居る、と云ふことを、俺は知つて居るから、そこで斯うすれば、御恩報じになる、と云うて聞かせるのを、どう云ふ譯か、譯を聞かなければ分らない、と云ふのは、それは百姓ぢやないか」

江戸ッ子ではないぢやないか。江戸ッ子か、百姓か、それを一つ、決めて貰ひたい」

それで辰五郎は、すっかり參つてしまつた。

「宜しう御座います、分りました。何時でも、貴方様から仰しやれば、火を付けます」

さういふ譯で、火付けの方の準備は、ちやんと出来た。

それから、今度は、江戸で名高い、博徒の親分の所を、一軒々々歩いた。其頃の海舟先生の身柄から考へて、博徒や火消人足の所へ、自から足を運んだ、と云ふだけで、これらの人に取つて、有難いのは、どれ程か分らぬ。

「貴様達が、天下の御禁制になつて居る、博奕をして、子分子方を集めて、樂な生活をして、此處は誰の繩張、彼處は誰の繩張と、國司大名の、言ふやうな事を言うて、幅を利かして居るのは、誰の御蔭だ。徳川さまの御蔭ぢやないか、有難いと思ふか、思はないか」

「いえもう、有難いどころでは御座いませぬ。公方様の御蔭だ、と存じて居ります」

「それならば、貴様達は、今、天下の大事な場合、何か御恩報じをしなければ、ならぬぢやないか」それはもう、仰しやる迄もございませぬ。殿様の仰しやる通り、御恩報じをしなければならぬ、と存じて居ります」

「それならば、お前達に、やつて貰ひたい事がある。それは私が、もう好いから始める、と云ふ使を

寄越したら、肩に錦布を付けて居る、官軍を見たら、應接なしに、有無を言はず、片端から斬つてしまへ。分捕勝手次第、事が治つた後は、商賣の方は、大目に見てやる」

商賣繁昌の本ですから、大喜びであつた。こんな事を云うて、博徒の家を、ずつと説いて歩いた。しまひに、日本橋の魚河岸にやつて来た。魚河岸の會所には、役員が詰めて居る。

「権現さま、御入府の砌りに、橋の袂に、佃島の安右衛門と云ふ者が、桶を並べて、生きた魚を、賣つて居た。それが御目に止まつたのが元で、此處に、公に魚を賣る市場を建てる、御墨付を戴いたのが魚河岸の始祖である。日本全國に、魚市場多しと雖も、御墨付を戴いたものは、此處だけである。さればこそ、江戸の魚河岸か、魚河岸の江戸か、と云ふやうに、名前も大きくなつたのである。それを有難いと思ふなら御恩報じをしなければ、いかぬぞ」と、云うて聞かせる。

「御尤もで御座います」

「それならば、俺の方で、さア好い、といふ號令を掛けたら、官軍の兵士なら構はぬから、どしどし斬つてしまへ。暴れ放題暴れる」

「へい」

話して居るうちに、氣の早い奴は、鮎庵丁を磨いで居る。斯ういふやうな譯であります。それから、神田の多町へ来て、同じ事を言ふ。大根河岸へ行つても、同じ事を、言うて廻つた。戦をすべき勤めを、持つて居らない町人を、斯うして始めから説いて、何時でもやれる、と云ふ備へを作つて置いた。

表向、戦をすべき役に居る、兵士或は、旗本の連中は、何處までも抑へつけて、動いてはならぬ、鐵砲など、擔いで歩いてはいかぬ、表へ出たければ、丸腰で出よ、と命令した。戦の勤めを持つて居て、而も戦ふ力のある者は、抑へられる程、其力は強くなる。その力は、抑へられる程、跳ね返る力が、大きくなる。

それであるから、若し西郷との對談の結果、平和が破るれば、此焼討を、博徒、魚河岸、青物市場、其他、斯ういふ威勢のいふ、江戸ツ子に、荒ごなしをやらして置いて、其後押として、そこへ、陸軍の兵隊を放せば、忽ちわつと、一時に出るから、片つ端からやつてしまつて、官軍は、一人も生かして歸さぬ、と云ふ、これだけの準備をして居た。

さう云ふ準備をして居ながら、それを、色にも出さないで、西郷に會うて、にこ／＼笑ひながら、「城を渡す、と云ふのに、受取らないと云ふ法は、ないぢやないか。受取つたら宜い。慶喜公は、申譯がないと言つて、上野の大慈院に、謹慎して居るぢやないか。官軍は、逆賊朝敵を征伐する、と

云うて、兵を進めたのである。その逆賊朝敵と、認められて居る者は、寺へ入つて、刀を投出して御辭儀をして居るのである。戦の相手はない筈である。全體、江戸ツ子が憎くて、戦をするのか、誰が憎くて、戦をするのか、考へて御覽なさい』と論じ詰めた。

今度は、先生の遺墨展覽會が、あるやうですが、其中にも、現はれて來ますが『無偏無黨、王道蕩々矣云々』といふ、あの西郷に送つた、書面の文意を、敷衍して言ふた。理窟は、それに相違ないしまた西郷は、無茶苦茶に戦をしよう、といふ人ぢやない。殊に、勝を能く知つて居る。そこで、兩先生の意見が一つになつて、

『宜しい、それでは、城を受取る』

『渡しませう』

にこ／＼笑つて、話は片付いてしまつた。

どつちかゞ鯨鋒張つて、何糞といふ調子でやつたならば、もう江戸は、滅茶苦茶になつてしまつて居る。同時に、若し日本全國の騷亂になつたならば、その結果は、どうなつたか。

その後になつて、遷都の事が行はれたが、若しあの時に、江戸が、兵燹に罹つて、燒野原になつて居たと假定して、考へて御覽なさい。東京が帝都となるべきことは、どうしても、事實の上には有り得

ないのは、當然である。さう考へて、其一事から見ても、海舟先生の恩といふものは、東京を中心としたる、關東の人は、之を感じなければならぬ。全國的に申せば、全國の戦になる所を、さうならしめないで呉れた、といふ恩を、感じなければならぬ。斯ういふ事に、歸着するだらう、と思ふのであります。

更に又、さういふやうな、大きい仕事から離れた、平生の海舟先生を、段々調べて見て、唯だ偏へに、敬服に堪へないことは、是は展覽會には出る、と思ひますが、先生は、曾て、和蘭の字引を、引寫しにして居る。佐久間象山先生の家、に、居られた時分の事である。和蘭の辭書は、日本に多くない自分は又、求めようとしても、蓄へがない。そこで、之を引寫しにして、詰り字引を寫したのである。昔の學問をする人は、斯うして、勞苦を忍んだものであります。それだから、學問が、頭の中へ入る。今は、五十錢か一圓、持つて行けば、字引は幾らもある。古いものでも、間に合ふやつがある。古本屋に行けば、二十五錢である。だからそれだけ、書物を見ることが、粗末になつて行くのが、偉い人の出來ない、原因の一つぢやなからうか、と思ふ。昔は、一生懸命に、學問をした。

それを、象山先生が聞かれて、

『どうも、さういふ細かい物を、夜寝ずに寫す、と云ふやうな事をして、身體を損ずるといふかぬ、身體が大切だ。それ程にお前が、必要なら、お前に遣はすから、寫すのは止せ』

と言はれた。

吾々なら、喜ぶのです。それは難有い、といふので、無論、寫したやつは、涙を飲んでしまふ。所が、海舟先生は、之に答へて

「思召は有難いが、今、それを戴くと、折角寫した分が、無駄になるから、後の残りを、寫してしまひませう」

と言はれた、と、斯ういふ風に、聞いて居る。それが恐らく、今残つて居る、字引を寫したものでせう。さういふ所に、人の力がある、といふ事が、現はれて居るだらう、と思ふ。唯だ大きく偉いばかりぢやない、細かい點に於て、斯ういふ底力のある、一面がある。

それから又、常識を養ふ、といふ事に付いては、餘程、苦勞したものである。其中の一つとして、傳へられて居る事がある。枕橋の八百松を、先生は、非常に御最良であつた。その關係からか、焼ける前の八百松といふものには、先生の書かれたものが、なかくに澤山ありました。有名な、先代のお婆さんが、生きて居る時分には、一層、書いたもの、多くあるのを、私は、拜見したことがある。

あの八百松に、關係した事で、面白い逸話がある。幕末には、相當な身分になられて、本所に屋敷を構へられて、先生は、大概な日は、八百松へ、食事に行く。八百松の夫婦も、大層喜んで、どうも勝先生が御最良下さるのは、家の譽である、といふので、何ぼ町重にしやうとしても、先生は大概、

帳場の傍で食事をする。

「どうも、そこでは恐れ入ります」

と、言ふと、

「いや、俺は、此處が好きだ。此處で、やつて居れば、お前の方も、帳面に附け落しはあるまい」
先生はなかく、冗談を言はれる人ですから、冗談を浴びせながら、主婦を相手にして、食べて居る。八百松の方では、一層打解けた、御最良だと思つて、喜んで居た。

すると、或日、年の暮においでになつて、夫婦を前に置いて、

「是は年末の心附、是は今まで五月蠅く、通ひ詰めた御禮、是は婢小供、是は男一同へ」

と、さういふ事を、細かに、一々區別をして、祝儀を與へ、

「是からは、今までのやうに激しく、私は來ぬかも知れぬ。それで一括りの、お禮をして置く譯である」

と言はれた。八百松の主人は吃驚して、

「何か、御氣に召さぬ事でも、御座いましたでせうか」

と尋ねると、

「いや、氣には容つて居る。私は、お前の所へ、修業に來た譯だが、もう宜いのだ」

と言ひました。八百松の方では恐縮して、
 「お禮といふのは、何のお禮で御座いませうか。お禮と申せば、私の方からこそ、お土産を持つてお禮に出なければなりません」と言ふと、

「いや、さうぢやない。俺は、お前の所へ、修業に来て居たのだが、もう卒業したから、それで、もう来ぬ」

「それは全體、どんな事で、ございましたか」

「お前の家には、五十人から、男女の傭人がある。皆生れた所が違ふし、飛放れた強い奴もあれば、弱い奴もある。薄情な奴があれば、又人情の深いものもある。理窟つばいのもあれば、馬鹿に近い奴もある。それを、お前達夫婦が、どういふ風にして、手足のやうに使ひこなし、自分も満足し、又來るお客さんにも、満足と與へるか。兎に角、どうして、一家を治めて行くか、其邊の呼吸を、見に来て居たのぢやが、もう、すっかり分つたから、もう來なくても宜い、そこで此お禮なんだ」

之を聞いて、八百松の夫婦は、非常に感心してしまつた。
 多くの人を使ふには、此心得がなければなるまい、と思ふ。そこで、先生が、困難な立場に居られて殆んど孤立の中に、あの大事な仕事であり、大芝居を打たれた、といふのも、それらの人間の、位置

や身分は勿論、特色なり氣風なりを、よく見分けて、使分けの出來た、といふ事が、一つの原因であつて、それには、斯ういふやうな、平生の注意が、皆、加はつて來たのではなからうか、と考へられる。さういふ細かい所に、偉大な人物の出來る、重要な要素がある、といふ事も、後の世の人は、考へなければならぬ事であらう、と、私は考へるのであります。

斯ういふやうな、先生の平生に於ける、行事の一つ一つを、断片的に集めれば、殆んど、限りなくある。殊に、一旦、自分が、斯うと信じて、打出したらば、どんな事をして止めない。主張を押し通してしまふ。其力は、實に強い。それでありますから、江戸開城について、あれだけに、四方から反對を受けても、其中に決然として起つて、あれまでにやり遂げる、といふ事は、其覺悟といふものがあり、其決断といふものがあつた結果だ、と思はれる。

然し、其外に又、人間離れのした度胸がなければ出來ぬ。所謂理窟を超越しなければ、あア云ふ仕事は出來ぬ。斯ういふ事が、傳へられて居る。

當時のことであるが、用事の都合で、芝の山内を、馬上で通られたことがある。それは、此和戰兩様の議論の劇しい眞最中、唯だ馬丁だけを連れて、馬上で通られた時に、杉の木立の暗い中から、待受けて居て、狙撃をした奴がある。一發は、手綱を搔繰つて居る袖を打つた。一發は、笠を掠めた。尙ほ一發は、鬚の元結を切つた。實に危ない。鬚を切られましたから、頭の毛が、バラリと顔に懸か

つた。

其三發の狙撃を受けた時分に、先生は、そこへ来るまでの馬の足掻が、矢張り、狙撃されてから、其場所を去る時の、馬の足掻と同じ事だ。矢張り、事の起つた前と同様に、とつとくへ行かれた。

まア大概な者なら、どんといふ音を聞けば、弾が身體へ、觸らないでも撃つた音のする方を、振向く位のことをします。少し、修養の積まない者になれば、何だとか、誰だとか、言ふに違ひない。もつと修養のない者ならば、人殺しと云ふか知れない。先生は、振り返りもせず、其儘にして行過ぎる。顔へ頭の毛が、バラリと被つた時に、五月蠅いから、これは顔を振つたに相違ない。たゞそれだけである。實に、魂がしつかりして居なければ、出来ない。

難に遭つた時に、大きな聲で吠鳴ることは、私にも出来る。請合つて出来るけれども、是は弱いらだ。強い人は吠鳴るものでない。犬だつて強い犬は吠えませぬ、弱い犬ほど吠える。肩を張つて、強さうな事を言ふ奴は、必ず弱い。たゞニヤ／＼と、笑つて居る奴が、一番に氣味が悪い。海舟先生には、その膽玉があつた。

それですから、其前後に、龜澤町の屋敷へ、澁木剛太夫といふ、澁川流の柔術の達人、六十一か六十二になる、老人が乗込んで来て、一撃に倒してしまふ積りで、やつて来た時なぞも、却つて之を翻弄してしまつた。

こつちに、充分の力を持つて居り乍ら、官軍に降服するとは、怪しからぬ。獅子身中の蟲とも言ふべきは、勝安房である。俺が行つて、當て殺してしまふ。と云ふ譯で、やつて来たのであります。

其時分には、勝先生の所へは、盛に脅迫状が来る。夜などになると、屋敷へ、石が舞込んで来る。勝の屋敷の危ないことは、一と通りでない。知人からも、危ないから用心せい、と云ふてくれる程であつた。そこで、先生は、婦人や子供、年寄などを、親類へ預けて、若黨と二人に、なつてしまつた。どういふ譯かと、若黨が聞くと、一緒に居ては、萬一の事があると、足手纏ひになつて困る、と言はれた。

先生は、更に、若黨に命じて、

『今日からは、表門も裏門も、開けて置け。夜分になつて、玄關も縁廻りの戸も締めてはいかぬ。餘り寒くないから、成るだけ開けて置け。出入に便にして置かなければならぬ』

『何故、旦那様は、さう云ふことをなさいますか』
と聞くと、

『此頃は、大分物騒になつて、俺を狙つて居る奴がある。向ふは狙ふ方でも、なか／＼骨が折れる。かうして置けば、何時でも飛込んで来られるから、樂であらう』
若黨は、之を聞いて驚いた。さてさうなると、石ぐらゐは投げ込んで来て、門前で悪口を言うて行

く者はあるが、人間といふ奴は、割合に弱いもので、それから一向、やつて来ない。

それで若黨も、安心して居ると、或日、澁木剛太夫が、やつて来て、

「麟太郎は居るか」

と云ふて呶鳴つたのであるから、若黨が取次に出て驚いた。何しろ、大した勢ひであるから、其旨を取次ぐと、先生は、會つてやらうと云ふので、會ふ事になつた。

澁木剛太夫といへば、澁川流の柔術の先生として、江戸では一番強い、といふ事が聞えて居る。それで若黨は心配して、

先生、立會を爲さるのですか」

「いや、立會をやつたら叶はぬ。俺などは、十人くらゐ掛つても、蹴飛ばされてしまふ」

「それでは、どうなさる」

「無論、俺を殺しに來たのだから、快く殺されてやる」

「御戯談では御座いません」

「打つちやつて置け。殺さうと思つて來た者に、殺して下さるな、と言ふのは、無駄なことぢや。さういふ時は、進んで殺されるに限る」
と言つて、笑つて居られた。

澁木は、先生に對面すると、からだを斜めにして、ヤツと云へば飛掛れるやうにして、片膝は、浮いて居る。

「一戦を交へずして、官軍に、江戸城を明け渡す、といふ噂がある。又、上様が、上野に御立退きなさるやうにしたのは、貴様であると聞く。今日まで、徳川の粟を食んで、今の身分になつて居りながら、御恩を報ずる事も知らず、徳川の社稷を、謂れなく潰すとは、實に怪しからぬ。貴様の答に依つて、只は歸らぬぞ」

と言はれても、先生は、落着いて居る。

「理窟はさて置いて、先生は、今日は初めから、私を絞め殺すか、當て殺すつもりで、やつて來たのだらう」

「流石に、貴様は偉い、能る解る。拙者は、其つもりで來たのだ。さう解つた以上は、立上つて勝負をしろ、庭へ出ろ」

「戯談を言つてはいかぬ。先生と、私と勝負をして、私が叶ふ譯はない、直ぐに負けて了ふ。負ける事が、決まつて居る以上は、じたばたする事はない。快く腕を組んで、先生に、殺されるつもりである」

すると澁木は、もう飛掛らうとした。先生は、之を制して、

「まア、待つてくれ。さうは思つて居るが、然し、物事は相談ぢや」

「どういふ事だ」

「私にも、色々考へて居る事があるし、家族も居ることであるから、少し位の遺言は、して置かなければならぬ。どうだ、武士の交際に、聞いてくれぬか」

と言はれたので、澁木も、嫌とは言へぬから、

「良い覺悟だ、よし、ぢやア遺言を聞いてやる。早く言へ」

「まア、周章でないで、靜かに聞いて貰ひたい。少し長いが、宜しいか」

斯ういふ具合になると、殺さうと思つて、番町から腕をさすつて來たのだが、力が抜けてしまふ。

さういふ調子でやられたから、聞かぬとも言へず、

「ぢやア、言うて見よ」

となつた

是れから先生は、世界の大勢から説き起して、さうして、日本と世界との關係を論じて、

「徳川御宗家が、戦に勝つて、天下を續けた所で、足利尊氏ぢやないか、足利の天下は、十五代續い

ても、逆賊朝敵として、人に指彈されて居るではないか、楠の子孫は、三代で滅びて居る、然しな

がら忠臣の鑑として、史上に光を放つて居るぢやないか、能くそこを考へなさい。殊には、慶喜公

は水戸家から入つて、御宗家を、御相續なされた、御養子である。御實子でも、家を潰して宜いと

いふ道理はない、況して、御養子が家を潰して、而も朝敵の名を負うて、家を潰しては、濟まぬぢ

やないか。又、續くとしても、朝敵となつて續いたのでは、詰らぬことではないか。大勢から考へ

て、どうしても是は、朝廷に恭順する外あるまい、そこを能く考へなければならぬ。何も時節と

諦めるより外はない。王事に盡すには、別に途がある」

斯ういふ調子で、懇々と説諭した。それが一刻といふから、今の二時間、澁木の拳骨は、海鼠のや

うに、軟らかになつた。元々、澁木にしても、馬鹿な男ではないから、話を聞けば分る。聞かぬから

分らないが、聞いて見れば、段々分つて來た。

「成る程、一應は、尤にも思へる。然らば、徳川様は、どうなるか、それを聞き置きたい」

「大丈夫、疵も付かずに、無事に續き、御身分も御安泰」

「然し、薩長を初めとして、官軍と稱する者の暴状は、能く知つて居る。何處までも、亂暴で押通さ

う、となつたら、どうするつもりか。又所領は取られて、亂暴に御宗家を潰さう、と、力で來ると

なつたら、どうする」

「さうなれば、さうなつたで私にも、相當の備へがある。力ぢや負けぬ」

「用意があるか」

「ちやんとある」

「どういふ用意がある」

「それは、話すことは出来ぬが、ちやんとある。其時には又、安房は、安房の働きやうがある、見て居てくれ」

「それなら、萬一にも、戦ひが不利となつた時は、どうする」

「其時は、腹を切る位の覺悟は、俺も男ぢやから、してある」

「成る程、大分、聞いて居た所とは、話が違ふな。それでは宜しい。今日は、此儘に引取る。成行きを見てからにしよう。それ迄は、お前の命を、預けて置く」

「誰に、預けて置くのか」

「お前に、預けて置く」

「さうか、確かに預つた。預り證を出さうか」

「そんな物は要らぬ」

馬鹿にされて居るのだ。子供のやうに、駈られて居る。

此態度で、一貫してしまつた。後に傳習隊や、賞兵隊などが脱走して、えらい騒ぎをやつた時などは、田安の門前へ集まつて、地方へ落ちて行く、といふのを聞いて、夜中、馬で駈付けて、どんな危

害が、身に迫るか分らぬのに、大膽なものであつた。

馬上に、提灯を振り照らして、之を制止しよう、とした。自分は、狙はれて居ると、いふ事を知つて居りながら、提灯を照して、馬の上に乗つて、からだを見せてかゝる、といふのは、實際、死生の上、超越しなければ、出来ぬ事である。

果して、盛んに狙ひ撃たれたので、一發は、提灯に當つて、灯が消えた。けれども、からだには、一つも當らなかつた。それで、半ば脱走する者を、抑へ得て、先づ半ばは脱走したが、半ばは抑へた、といふ、逸事もある。

斯ういふ風に、死生の上、超脱してやつた。そこが、大に偉い所である。さうなると、彈の方で當らぬ。本人が、當つても宜い、と思ふと、彈は當らぬ。當つても詰らぬから、當らぬのかも知らぬが、物事は兎角さういふものだ。

それで、あの難局を切抜けて、遂に徳川の家も、今日に残し、日本に、大きい戦の開ける、といふ事を止めてくれた。私が、笑ひながら話し、又諸君が、笑ひながら聞く。此笑ひながら話して、笑ひながら聞くことの出来たのは、實に、海舟先生の恩として、感謝しなければならぬ。

近年になりまして、清明會が起り、さうして、海舟先生を研究する、といふ事が、一部の間に、非常な勢ひを以て、起つて來ました事は、嘗に、海舟先生の爲めばかりぢやない。維新のあの動亂の際

の、史實を確めて、今日の時代を生み出した、偉人を知る、といふ上に於て、一と通りならざる力強きものである、といふことを、私は感じて居るのであります。さういふやうな、感じを持ちまして、私は、海舟先生が、凡そ斯ういふ御方であつた、といふ、一部分だけを、申述べたいと思つて、今日は、出席致しました。甚だ整はぬ、粗末な話であります、先生の面目の一部だけを、申したつもりであります。

談叢と遺文詩歌

△談叢や遺文詩歌の如きものは、本傳の後に附す可きものであるが、著者は、その格を破つて、之れを巻頭へ、掲げる事にした。

△平生の淡話に依つて、その人柄を察し、遺文や詩歌を視て、其人の志を知り、之れを基として人物の大體を呑込み、然る後に、本傳へ入る、といふ事も、一つの試みである、と思ふ。

△殊に、先生の談論には、一種の風格があつて、後進の人、之を讀んで、益する所が少くない。

△古今を通じて、有らゆる人物を、無遠慮に、上下批判する所に、先生の卓識と炯眼が在る。

△或は政治を論じ、或は時局を批評して、一々、その急所を刺す所に、特種の鑑識眼がある。如何に罵倒されても、讀み込んでゆくと、笑ひを催す。而して、何事かを教へられて居るのだから、實に不思議である。

これは、安政三年のことだが、その秋はちやうど、海軍傳習所の學年代りて、生徒も教師も、大抵代つたけれど、おれは、なほ残つて居つたので、その際三日ばかり、休日があつた。そこで、おれは、ゴツトル船に乗つて、遠洋航海を遣らうと思つて、教師に願ひ出た所が、この二三日は、天氣が危いから、今少し後に延ばせ、との事であつたけれども、既に海軍へ出て居る以上は、難船して死ぬるの、固より覺悟だといつて、生徒柴弘吉外七八名と、水兵六名とを連れて、強ひて出掛けた。教師は、くれぐれも、強ひて危い所へは行くな、大抵十五六里位を限りにして、それより遠方へは出るなと、親切に注意してくれたけれど、深くも耳に留めずに五島あたりまでは、何の事もなく進航した。

すると、西南の方から、忽ち暴風が、黒雲と共に吹き起つて、帆も何も、さつぱりきかなくなつて来た。きあ大變だといふもので、之を防ぐ方法を、講ずるのだけれど、水兵どもは狼狽して、ちつとも指圖通りに働いてくれない。兎も角も、肥前の海岸へ寄らうと思つて、惣掛りであせるのだけれど、風はますます荒れるし、術は、まだ拙ない、と來て居るから、瞬間の間に、沖の方へ、吹き流されてしまふ。おれは、早く錨を下せと命令したが、海が深く、三十尋の錨繩では、底へ届かないといふ。彼是する中に、とうとう暗礁へ乗り上げて、舵は毀れるし、船には孔があいて、潮水が、どん／＼はいりこむ。

おれは、其處で、もう駄目だと思つて、大聲で以て、自分が愚かで、教師の命令を、用ひなかつた

爲に、諸君にまで、こんな難儀をさせる、實に面目もない次第だ、自分の死ぬるのは、正に此時だと叫んだ所が、水兵どもは、この語に勵まされて、再び勇氣を回復して、これからは、手足を動かすやうに、萬事おれの指圖に、従つてくれて、どうかかうか、暗礁をも離れた。それにまた、幸な事には風雨も、この時分から、次第に止んだので、一同全力を盡して、海岸の方へ、寄せ着けた。

その夜は、海上に浮びながら、兎も角も、船を、假りに修繕して、翌日、晴天になるのを待つて、とう／＼他人の助は、少しも借らないで、長崎まで歸つて來て、それから直ぐに、教師の處へ行つて昨日からの顛末を談して、その命令を用ひなかつたことを謝した所が、教師、名前はカツテンデーキといつたが、笑ひながら、それはよい修業をした。幾ら理窟は知つて居ても、實地危い目にも遇つて見なければ、船の事はわからない。危い目といつても、十度か十度ながら、各別なので、それに遭遇するほど、航海の術は、分つて來るのだと、教へてくれた。この時におれは、理窟と實際といふものは、別だといふことを、いよく明らかに悟つたよ。

これも矢張り、安政三年の、秋の末であつたが、咸臨丸に乗つて、五島あたりへ航海し、それからずつと、對馬の府中へ、はいり込んで、三日の間、いろいろ親切な待遇を受けて、更に釜山沖へ行つて、朝鮮の陸地を、眺望して歸つたことがあつたが、丁度この時、おれは、教師のハントローエンとハルヂスと、この二人と共に、對島の西北を、測量して居つたら、小川の海に注ぐのが、餘り景色が

よいので、三人して端艇を下して、その小川を、一二町溯つた。餘り深くはないが、水が非常に清
んで、底の石さへ數へられるのに、暫しは、餘念もなく、見とれて居た。

所が突然、二人の教師が、あつと叫んだので、おれは驚いて、四邊を見まはした。すると、川の岸
に、稲束を掛けて、干してあつて、その後ろに、一軒の瓦家があつたが、その稲の蔭で、二人の武士
が、火繩銃を以て、われ／＼を覗つて、今や火蓋を切らうとする所であつた。おれも、一時は驚いた
が、直ぐ様、艇から飛び出て、携へて居た、馬の鞭で、やにはに、その火繩を打拂うた。所が二人の
武士も、おれの勢に恐れて、後ろの瓦屋へ逃げ込んだのを、追かけて行つて、散々に叱つてやつた。

すると、向ふも始めて、おれが日本人である。といふことを知つて、大に恐れ入つて、申譯をして
いふには、異船が碇泊して、異人が上陸するのだと思ひ込んで、私共は、番士の職を奉じて居る所か
ら、只今のやうな、振舞に及びました、といふから、おれは、實際を、話し聞かせてやつたら、彼等
は、ます／＼恐れ込んで、若しこの事が、表沙汰になると、私共は、重い罪に、處せられるから、何
卒、内輪で濟ませて下さい、と頼むので、おれも、田舎武士の無識なのを哀れんで、それなりにして
やつたが、おれも、この時からは、随分膽がすわつて、冒險の心が、むやみに起つて來た。

安政六年になつて、幕府で近日、外國へ使節を派遣する、といふ議が決したので、おれは、少し考
へがあつて、斷然、江戸へ歸ることを、願ひ出た。直ぐ開届けられたから、正月五日に、朝陽艦に乗

つて、いよ／＼長崎を出發して、一晝夜で、下ノ關へ着き、それから讃岐の鹽飽島まで來て、こゝで
碇を下した。これは年來、おれと共に、船で働いてくれた水兵などが、皆この島の間だからだ。そ
れで十日に出帆して、十一日の曉には、紀州の大島あたりまで來た所が、雪が降り出して、風も相當
に、強くなつたけれども、先を急ぐから、物ともせず、どし／＼進航して、伊豆の大島へ、今三十
里といふあたりまで來た。

すると、風はますます／＼荒れるし、雪はいよ／＼降るし、波は屢々、甲板の上を洗ふので、船員必死
になつて、働けけれど、船は、少しも進まない。そこで、おれも決心して、少しでも風を受けないや
うに、端艇を悉く、切り捨て、しまつた。風が今一層、烈しくなつたら、檣も三本ながら、切り倒す
積りだ。士官や水兵は、随分、骨を折つてくれたのだけれど、何分、飯も食はないで、水の中を、働
いて居ることだから、力も何も抜けてしまつて、おれさへも、後ろの檣へ、體を縛りつけて、漸く指
圖をした位だ。後には、體が、氷のやうに冷えて、聲も出なくなつた。

夜になると、繩が自ら斷れて、おれは殆んど、海の中へ、ころげこむ所であつたけれど、辛うじて
起き上りて、再び體を結びつけて、それでもなほ指圖をした。一時は、おれも、目がまはつて、殆ど
人事不省に、陥つたけれど、水兵なども、それを助けてくれることが、出来なかつたのだ。かういふ
風で、波のまに／＼、漂つて居た所が、幸に風も、次第に衰へて來たから、一晝夜もかゝつて、漸く

伊豆の下田まで歸つた。實にこの時は、一同、死を決して居たので、その助かつたのは、まことに意外の事であつた。今日から、回想して見ても、ほんに身の毛が、よだつ様だ。

又、萬延年間に、おれが咸臨丸に乗つて、外國人の手は、少しも借らないで、亞米利加へ行つたのは、日本の軍艦が、外國へ航海した初めだ。咸臨丸は、和蘭で、製造した船だ。あの頃には、幕府も浪人も、口を揃へて、海軍の必要を論じたけれども、併し軍艦は、何うして製造するのか、金はどれ位入用なのか、また乗組人は、どんな事をするのか、一向、だれにも分らない。併し、兎に角、海軍は必要である、といふことだけは、氣付いたから、それで、おれなどを、長崎へ遣つて、和蘭の海軍教師の、ヘルセレーキといふ人に附けて、海軍術を、研究させたのだ。

その頃の海軍術も、今日の海軍術も、原則においては、少しも違はない。航海術、軍用術、機關術、算術など、六課目ほどを、毎日、勉強させられたのだ。天文學なども、無論勉強した。それに皆な横文字でやるのだから、おれの様に、前から蘭學を、やつて居たものは、都合がよかつたけれど、漢學ばかり、遣つた居たものが多かつたから、なかく骨が折れた。併し兎に角、二年で一まづ、卒業することだつたが、おれは、都合六年も居つて、新入生を教授したりなどしたから、可なりに技倆を、養ふことが出来た。その頃また、長崎の外に、築地でも、海軍所を建て、列藩の子弟を、教育して居つたが、これ等がまづ、日本海軍の基礎となつた。

さて、おれが咸臨丸に乗つて、いよく江戸を出帆せう、といふ場合になると、幕府では、なかなかやかましい議論があつて、容易に承知しない。そこでおれも、勝麟太郎が自ら教育した、門生を率ゐて、亞米利加へ行くのは、日本海軍の名譽である、と主張して、とう／＼、萬延年の正月に、江戸を、出帆することになつたのだ。

丁度その頃、おれは、熱病を煩つて居たけれども、疊の上で、犬死をするよりは、同じ事なら、軍艦の中で死ぬるがましだ、と思つたから、頭痛で、うん／＼云つて居るをも構はず、豫ねて通知して置いた。出帆期日も迫つたから、妻には、一寸品川まで、船を見に行く、といひ残して、向ふ鉢巻で直ぐ咸臨丸へ乗りこんだ。それから横濱へ行て、石炭を積み、いよく東へ向つて、日本の地を離れたのだ。

この咸臨丸といふのは、長さが三十間ばかりの、極めて小さい船だつた。噸數は、今一寸忘れたが乗組員は、上下合せて、百餘名もあつたらう。凡そこの頃、遠洋航海をするには、石炭は焚かないで、帆ばかりでやるのだから、咸臨丸も、幾たびか風波の爲に、難船しかつたけれども、乗組員何れも、かねて覺悟の上の事ではあり、且つは、血氣盛りのものばかりだつたから、左程、心配もしなかつた。おれの病氣も、まだ熱の爲に、吐血したことも、度々あつたけれど、一寸も氣に掛けないで置いたら、桑港へ着く頃には、自然に、全快して仕まつた。

桑港へ着くと、日本人が、獨りで軍艦に乗つて、こゝへ来たのは、之が初めだといつて、亞米利加の貴紳等も、大層賞めて、船底の掃除や、ペンキの塗りかへなども、悉皆、世話してくれた。それから、おれどもは、南亞米利加へまはつて、日本へ歸らう、とした所が、亞米利加の人たちは、こゝまで来ればよいから、そんな無謀の事は止めて、早く日本へ歸れ、といったけれども、船中、書生氣質のものばかりだから、そんなことには、耳を傾けない。そこで、おれどもより前に、亞米利加へ来て居た、日本の使節は、この事を聞いて、おれどもを、狂氣だといつて、斷然、南米廻航のことを禁じた。使節から、禁止せられては、一言もないものだから、おれどもは、鬱勃たる雄心を抑へて、すこゝ、歸國の途に上つたが、行きがけに何處へも、寄航しなかつたから、歸りには、布哇に立寄つて、それから、浦賀へ歸つた。

浦賀へ着いたから、おれは一同を、入浴の爲めに、上陸させて遣らう、として居る所へ、浦賀奉行の命令だといつて、捕吏がどやどやと、船中へ踏みこんで来た。おれも意外だから、無禮者め、何をするのだと、一喝した所が、捕吏がいふには、數日前、井伊大老が、櫻田で殺されたについては、水戸人は嚴重に、取調べねばならぬ、といふから、おれも穩かに、亞米利加には、水戸人は一人も居ないから、直ぐ歸れと、冷やかして歸らした。併し、おれはこの時、櫻田の變があつたことを、始めて知つて、幕府は、迎も駄目だと思つた。さて、それから品川へ、船を廻はして、一同上陸したが、お

れも久しぶりで、家へ歸らうとする途中で、虎列刺病に、取りつかれたのだ。

船海中、水夫等には、筒袖の襦袢に、裁附けを穿かして居たが、おれは日本服も着たり、西洋服も着たりした。この頃、桑港から便りがあつたが、あの時、おれが泊つたホテルで、掲げて居た、歡迎の旗が、今に保存してあつて、時々、おれどもの噂も出るさうだ。

文久三年の三月に、家茂公が、御上洛なさるについて、その頃、京都は、實に物騒で、苟くも、多少議論のある人は、悉くこゝへ集まつて居たのだから、將軍も、なか／＼嚴重に、警戒して居られたこの時、おれも、船で以て上京したけれど、宿屋が、何處も彼處も、塞つて居るので、致方なしに、その夜は、市中を歩いてゐたら、丁度、寺町通りで、三人の壯士が、いきなり、おれの前へ顯はれてものを言はず、切り附けた。

驚いておれは、後へ避けた所が、おれの側に居た土州の岡田以藏が、忽ち長刀を引き抜いて、一人の壯士を、眞つ二つに斬つた。弱蟲どもが何をするか、と一喝したので、後の二人は、その勢ひに辟易して、何處ともなく、逃げて行つた。おれも、やつとの事で、虎の口を遁れたが、何分、岡田の早業には、感心したよ。後日、おれは、岡田に向つて、君は、人を殺すことを、嗜んではいけない、先日のやうな舉動は、改めたがよからう、と忠告したら、先生それでも、あの時、私が居なかつたら、先生の首は、既に飛んでしまつて居ませう、といつたが、これには、おれも、一言もなかつた。

長州の兵隊が、宮闕を犯したのは、元治元年七月十八日であつたが、おれは、例の如く、神戸の海軍假局に居た所、夜になると、京都の方の空が、眞赤に見えた。これは何か、變つた事が、あるに相違ないと思つて、觀光艦に、出帆の準備をさせて置いたら、果して翌日、大阪から飛脚が来て、長州藩が、順逆を過つた爲めに、昨夜、蛤御門や、竹田街道や、伏見表で、戦争があつた、といふ事を知らせた。

そこで、おれは、すぐに船に乗つて、大阪へ行つたが、丁度この時、毛利家の嫡子、長門守が、上京の爲め、十三日に國元を立つて、今夜か明日か、兵庫へ着く、といふことであつたから、豫ねて、おれの家へ隠れて居た、長州の竹田庸二郎と、外に今一人を、神戸へ、残して置いて、若し、長門守が着かれたら、昨夜の事は、たゞ無謀の徒が、一時の快を取る爲めに起したので、決して、深い考へなど、あるのではない、長州侯の御意見は、固より、彼等と共に、事を爲さる、といふのではあるまい、と勝が申したと、傳へてくれよと、頼んで置いた。

さて、廿一日には、大阪城で、議論が沸騰して、少しも決しない。そこで、おれが發議して、斥候を放つて、京都の形勢を、覗はせたけれど、みんな恐れて、少しも深入りをしないから、容子は、一切分らない。仕方がないから、今度は、おれが自ら斥候になつて、櫻ノ宮から、ずっと淀川に傍うて進んで行くと、上の方から、一艘の船が、三人の壯士を乗せて、下つて来て、おれの立つて居る前ま

で来ると、三人とも、船を捨て、上陸した。おれは、どうせうかと、少し狼狽したけれど、兎も角も彼等の爲す所を見やうと思つて、ちつと立つて居たら、その内の二人は、突然刺し違へて死ぬるし、今一人も、喉を貫いて、死んでしまつた。

おれも、一時は驚いたが、少し経つと、動悸も靜まつて、は、あ、これでは長州は、既に敗れたのだな、と悟つた。これで一まづ、安心だと思つて、三軒家まで歸つた所が、川の中に、一人が船に乗つて居るのを、對岸から、官軍の守兵が、どんく、鐵砲を放して居て、その丸が、おれの頭の上を、雨の如くに、過ぎて通つて、一つは、おれの笠を貫いたけれど、幸に怪我もしなかつた。城へ歸つてから、更に人を派出して、先に自殺した、三人の姓名を、調べさせたけれども、どうも分らなかつた。

さて、その夜、長州の敗兵が、五十人ばかり、大阪へ、遁げて来て、藩の藏屋敷に隠れたので、また城内では、評議があつて、諸藩の武士に命じて、燒討にさせる、といふことであつたのを、これが爲めに、大阪の町が、灰になつてはならない、と思つて、おれが確く反對したので、とうく、屋敷を、明け渡さるだけで済んだ。その時の、長州のお留守役は、北條清右衛門といつたが、町奉行から、呼び出されて、禮服を着て、家來一人召し連れて出頭した。その禮儀作法の正しかつたには、後で皆々、感心して居たよ。大阪はまあ、これで一まづ、鎮まつたのだが、どうも、その頃の、物騒な

事といつたら、一寸、途中で過つても、壯士がすぐに、劔の柄に手をかける、といふ風で、斬りあひなどは、日に幾度となくあつた。その中には、おれも、随分危い目に遭つたが、とう／＼殺されもせず、濟んだのだ。

さて、殺されなかつたのは、よいけれど、その年の十月廿二日になると、情ない事には、大阪城代から、御用につき、早々江戸へ歸れと命ぜられ、十一月九日になつては、とう／＼退職を仰付けられて、家へ閉ぢ籠つた。この間には、實にこみ入つた事情があるのだが、兎に角、おれは、及ばずながら、國家の安危を、一身に引き受けて、三年の間、種々の危険を冒して、奔走したのに、一朝、説は聽かれず、謀は用ひられず、この通りに、退職を命ぜられるとは、まことに情ない事だが、もう斯うなつては、仕方がない。悠々自適の身を、榮辱の外に置くばかりだ。

併し、このまゝ、朽ちはて、累世の君恩に、報いることも出来ないだけは、如何にも残念だなどと考へて居た所へ、大久保一翁から、書面が来て、讒人が居る爲めに、裁判官中で、君の評判は、至つてわるいから、近日、封書の御尋ねが出る筈だけれど、餘り過激なことは、返答せぬがよからうと、密かに注意してくれた。

この封書の御尋ねといふのは、當時幕府で、若し役人に、落度があると認めたら、一番に封書で以て、その始末をお尋ねになり、その次に親類同道で、評定所に出頭して、お尋ねを受け、三番目に

また、嚴重なお尋ねがあつて、その時に切腹とか、終身預けとか、それ／＼罰が定まるのだから、随分、裁判の方では、重い事なのだ、それで大久保が、親切に、こんな事を、知らせてくれたから、おれも、密かに喜んで、何分の御沙汰があるのを、待つて居た。

然るに、生憎、いやおれの方からいへば、幸ひに、その頃は、長州再征の事もあり、將軍上洛の事もあり、實に國家多難の際であつたから、幕府の方でも、おれの事などに、構つて居る餘裕がないので、つひ延引になつて、おれへは一寸も、御沙汰がなかつた。おれ一身の爲めには、飛んだ僥倖とはいひながら、かういふ事情からして、幕府も、とうとう、滅びる様になつたのは、嘆かはいし事だ。

彼是するうちに、慶應二年になつて、その年の五月二十七日に、突然、奉書が来た。何かと思ひながら、披いて見たら、關老水野和泉守から、明朝禮服で登城せよ、といふ達しだ。これは通例、退職のものを、再び用ふる時の式ではなくて、實に、破格のことであつた。それで、お達しの通り、翌日登城した所が、軍艦奉行に任せられて、直ぐに大阪へ、出張を命ぜられた。おれも、少し臍に落ちない所があつたから、どんな御用向であるかと、老中に問うて見たけれど、此度の事は、將軍から、直接の御命令だから、われわれには分らない、といふから、兎も角も、兩三日経つて、おれは、大阪へ出發した。

大阪へ着いて、板倉伊賀守に會つた所が、伊賀守のいふには、長州再征の事について、薩州から、

大久保市藏とか、岩下佐治右衛門とか、内田仲之助とかいふ連中が来て、ひどく反對するから、お前京都へ行って、彼等を説き伏せて来い、との事だ。そこで、おれは、豫ねての意見を陳べて、長州征伐は、決して、國家の爲めに利でない、大久保や、岩下等のいふ所が、却つて道理になつて居る、といふことを、明瞭に辯じた。所が、會津藩だけは、容易に、おれの説に、従はなかつたけれど、いろいろ諭へなど設けて、説明して遣つたら、後には、とう／＼、おれの意見が、耳にはいつた。それで終に長州とも、和睦する様になつたのだ。

この後も、おれは時勢に應じて、いろ／＼建白したけれど、多くは役人の、機嫌を損するばかりで讒言をする奴は居るし、後にも先にも、據がなくなつたから、むしろ辭職せうと、思つたけれど、それも、許されなかつた。この頃は、おれも實に苦心したよ。

一一

戊辰の變は、おれは町奉行の知らせによつて、幕閣よりも、一日早く、承知したけれど、おれは當時、閑居の身だつたから、意見を進める機會を得なかつた。翌日になつて、いよ／＼幕閣に知れ渡ると、城中は、鼎を沸すやうだつた。それは祭りにさへ騒ぐ、江戸ッ兒の事だから、江戸の騒ぎも、大抵察せらるゝだらう。この時、幕議では、事の起りが、少々の行違ひだから、大した事にもなるまい、

との説だつたけれども、おれは獨りで、西郷めが、この機に乗じて、天兵を差し向けはしないか、と心配して居た處が、果して、やつて来た。西郷は、實にえらい奴だ。

當時、人心恟々として、おれは、常に一身を、死生一髪といふ際に、置いて居た。おれの眞意が、官軍にわからなくつて、官軍が、おれの家を、取り圍んだことも有た。また、幕臣中でも、標悍なもの、動もすると、おれを、徳川氏を賣るものと見做して、おれを殺さうとしたものも、一人や二人ではなかつた。おれが、品川の先鋒總督府と談判して、歸りがけにも、薄暮、赤羽根橋を通つて居たら、鐵砲丸が、おれの鬘を掠めていつたから、おれは馬を下り、轡をとりて、徐かにそこを過ぎ、四辻から再び、馬に乗つて歸つた。

おれの家には、護衛も、壯士も居なかつた。護衛や壯士は、實に恃むに足らず、また恃む可きものではない、壯士の代りに、二三人の女中を置いて、來客の應接、その他の用に辨じて居たが、これはどんな亂暴者でも、婦人には、手を出すまい、と思つたからだ。今もその例に依つて、おれの家には、この通り(傍に侍する婢を顧み)女ばかりを、使つて居る。

一二

横井小楠の事は、尾張の或る人から、聞いて居たが、長崎で、始めて會つた時から、途方も無い、

聰明な人だと、心中、大に敬服して、屢々、人を以て、其の説を聞かしたが、その答へには、常に、「今日は、かう思ふけれども、明日になつたら、違ふかも知れない」と、申添へてあつた。そこで、おれは、いよいよ彼の人物に、感心した。

大抵の人は、小楠を、取り留めの無い事を、云ふ人だと思つた。維新の初めに、大久保すら、小楠を招いたけれど、思ひの外だ、といつて居た。併し、小楠は、とても、尋常の物尺では、分らない人物で、且つ一向、物に凝滞せぬ人であつた。それ故に、一個の定見と云ふものは無かつたけれど、機に臨み、變に應じて、物事を處置するだけの、餘裕があつた。からして、何にでも、失敗した者が來て、善後策を尋ねると、其の失敗を利用して、之を都合のよい方に、遷らせるのが常であつた。

おれが、米國から歸つた時に、彼れが、米國の事情を聞くから、色々、教へてやつたら、一を聞いて十を知る、といふ風で、忽ち彼の國の事情に、精通してしまつた。

小楠は能辯で、南洲は、訥辯だつた。

小楠が、春嶽公に、用ひられた時、もちつと手腕を振ふことは、出来なかつたか、と云ふ人もあるが、あの時は、實際出来なかつたのだ。又、維新の時に、西郷は、何故、小楠に、説き勧めなかつたか、といふ人もあるが、之れは、必要がなかつたからだ。

小楠は、毎日の如く、藝者や辯問を相手に、遊興して居た。人に面會するのにも、一日に一人二人會ふと、もはや疲勞した、と云つて斷るなど、平生、我儘一邊に、暮して居た。だから、春嶽公に用ひられても、また内閣へ出て、一々政治を議するなどは、うるさかつただらう。かういふ風だから、小楠の善い弟子といつたら、安場保和、一人位のものだらう。つまり小楠は、覺られ難い人物であつた。

佐久間象山は、物識りだつた。學問も博し、見識も、多少持つて居た。併し、法螺吹きで困つた。あんな男を、實際の局に當らうとしたら、どうだらうか……何とも保證は出来ない。

横井と佐久間との人物は、何うだと、云ふのかね……、どうのかうのといつた所が、それは大變な違ひさ。全體、横井といふ男は、一寸見た所では、何の變つた節も無く、其の服装なども、黒縮緬の袴羽織に、平袴をはいて、まづ大名のお留守居役、とてもいふやうな風で、人柄も至極、老成圓熟して居て、人と議論などするやうな、野暮は決してやらなかつたが、佐久間の方は、丸で反對で、顔つきからして、既に一種奇妙なのに、平生、緞子の羽織に、古代様の袴をはいて、如何にもおれは、天下の師だ、と云ふやうに、嚴然と構へこんで居た。元來、霸氣の強い男だから、漢學者が來ると、洋學を以て威しつけ、洋學者が來ると、漢學を以て威しつけ、一寸書生が尋ねて來ても、直きに叱り飛ばす、といふ風で、どうも始末にいけなかつた。

藤田東湖は、おれは大嫌ひだ。あれは學問もあるし、議論も強く、また劍術も達者で、一廉役に

立ちさうな男だつたが、本當に國を思ふ、といふ赤心がない。若しも東湖に、赤心があつたら、あの頃の水戸は、天下の御三家だから、直接に幕府へ、意見を申出づれば、よい筈でないか。それに何ぞや、彼れ東湖は、書生を大勢集めて、騒ぎまはるとは、實に怪しからぬ男だ。おれは、あんな流儀は大嫌ひだ。

おれなどは、一つの方法で、いけないと思つたら、更に他の方法を求める、といふ風に、議論よりは、兎に角、實行で以て、國家に盡すのだ。毎度いふ事だが、彼の大政奉還の計を立てたのも、つまり、この精神からだ。併しながら、實際、おれの精神を了解して、この間の消息に、通じて居るのは、西郷一人だつた。榎本でも、大鳥でも、昔は、おれを殺さうとした連中だが、今になつては、却つて頭を下げて、おれの處へ來るのが可笑しい。併し、おれも『皆さんは、えらくなつた』と、云つて置くのさ。此間は、二十年ぶりで、慶喜公に、お目にかゝつたが、その時、おれは『よい事は皆、御自分でなさつた様に、わるい事は皆、勝が爲た様に、世間へは仰い』と申しておいた。

木戸松菊は、西郷などに比べると、非常に小さい。併し、綿密な男で、使ひ所によりては、随分、使へる奴だつた。あまり用心しすぎるので、とても大きな事には、向かないが……。

曾て、京都で、會つた時、彼れが直接に、おれに話して聞かせたことがある。元治元年の七月に、蛤御門の變があつた後で、あの男は、會津藩の邏卒に捕へられて、大勢の兵卒に、護衛せられながら

寺町通りまで來た時に、大便を催したから、廁へ行かせてくれ、といつた。すると、外の事とは違ふから、衛士も、許さぬといふ譯には行かず、止むなく、二三人の兵士を隨へて、廁へ行かせた。所か松菊は、廁の前まで來ると、地べたへ躊躇つて、袴を脱ぐやうな風をして居たが、いきなり脱兎の勢で、その場を逐電した。餘り意外な事だから、衛卒も、暫く茫然として居た間に、松菊は、早くも、對州の藩邸へ逃げ込んで、一旦、その踪跡をくらし、しばらくして、また、ある他の屋敷へ潜伏して、到頭、逃げおほせた、といふことだ。あの男が、事に臨んで、敏活であつたことは、まあ、かういふ風だつた。

それから、あの男が下の關で、兵士を鎮撫して居た時分に、或る人へ送つた、端歌がある。

きのふ二上り、けふ三下り、調子そろはぬ糸筋の、細い世渡り日渡りも、そこでなぶられ、こゝではせかれ、主の心に誠があらば、つらい勤めも厭やせぬ。

かういふのだが、どうだ、寓意が分るかね。

齊彬公は、えらい人だつた。西郷を見抜て、庭番に用ひた所などは、なか／＼えらい。おれを、西郷に紹介した者は、公だよ。それ故、二十年も以後に、初めて西郷に會つた時に、西郷は既に、おれを信じて居た。ある時に、おれは、公と藩邸の園を散歩して居たら、公は、二ツの事を、教へて下さつた。それは、人を用ひるには、急ぐものでないといふ事と、一ツの事業は、十年経たねば、取りと

めのつかぬものだ、といふ事と、この二ツだつた。

四

兵庫海軍練習所の事は、これ迄世間に、秘して居たけれど、今になつては、最早、公にしてもよからう。

文久の初、攘夷の論、甚だ盛にして、攝海守備の説、亦露々たり。予建議して曰く、宜しく其規模を大にし、海軍を皇張し、營所を兵庫、對州に設け、其一を朝鮮に置き、終に支那に及ぼし、三國合縦連衡して、西洋諸國に抗すべしと。

朝廷、予の建議を賞美し、

昭徳公、亦之を嘉納す。三年癸亥、公、蒸汽船に搭じて、大阪より播州に至る、海濱を巡視し、兵庫より上陸し、神戸小野濱に至りて、海軍營所建築の地を、自身に指畫せられたり。其床几跡の、湮滅せん事をおそれ、予不文を顧みず、自ら記して、一片の碑石を建てたり。其文、左の如し。

文久三年歲次癸亥四月二十三日

大君駕火輪船、巡覽攝播海濱。至三千神戸、相其地形、命臣義邦、使作海軍營之基。夫吾邦方今急務、莫急三千海軍、將以三此營爲レ始。

英旨振三起士風、實在三千是。可レ謂三當時之偉圖、而千歲之鴻基也。願大君踞床指畫之處、恐其久而湮滅也、臣義邦、謹勒三千石、以貽三永世云。

元治元年歲次甲子冬十月八日

軍艦奉行安房守勝物部義邦撰

おれも、月日は忘れてしまつたが、何でもおれが、大阪に居た時分であつた。京都では、攘夷論が甚だ盛んで、佐久間も、呼び出された頃だ。國防についての議論が、種々に分れて、八幡山や山崎に臺場を築いて防ぐ、といふ論もあつたさうだが、いよく攝海の防禦が、最も必要だといふことになつて、攘夷黨の公卿で有名な、姉小路公知卿が、大阪へ來た。當時、攘夷黨が、勢ひを振つた頃とて何でも姉小路には、暴徒が七十人ばかりも、從うて居た。

その頃、おれは、砲臺の事で、大阪へ來て居たが、姉小路から召されて、その旅館、本願寺に行たら、汝の意見を述べよ、といふことであつたから、おれは大に論じた。全體、臺場を築くには、莫大の費用が入るが、その出處はありますか、など議論した。すると姉小路も、初めて種々の事情が、分つた様子で、頗る閉口したようだ。そこで、おれは、先づ私の汽船に乗つて、攝海を巡視なされ、その上で見込を立てられよ、と勧めた所が、姉小路も、早速承知して、順動丸に乗つて、一晝夜間、播磨攝津の海岸を巡視した。

おれはまた、到底小さい臺場では、役に立たないから、寧ろ海軍で以て、國防の備をするに如かずといつたら、姉小路も、いよいよ感服した。そこで姉小路は、京都へ歸つて、朝廷へ説きつけた爲に、朝廷でも、おれの意見を容れるやうになり、また將軍の方も、勿論、おれの意見を採用した。この上は、將軍家も、一應實地を、巡視して置かなくては、いけないといふことで、おれが案内して、巡視があつた。かういふ始末で、兵庫に、海軍が、出来ることになつたのだ。

海軍練習所は、今の神戸税關のある所にあつた。おれは、生田の森の方に、宅を構へて、澤山の塾生を置き、また少し見込があつたから、地所をも段々買入れた。今、兵庫縣廳が建つて居る邊も、當時、おれの所有地だつた。もと神戸は、七百石の天領で、路の兩側に、百姓家があつて、街も、一通りになつて居たが、庄屋を生島四郎太夫といつて、最初おれは、その家を旅宿にした。その時、生島に、この土地も、今はつまらない百姓家ばかりだけれど、早晚必ず、繁華の場所になるから、地所などは、しつかり買つて置け、といつた所が、生島も、半信半疑ながらに、おれがいつた通り、地所を買入れて置いたら、果して維新後には、一坪何十圓といふ、高價になつて、非常に儲けたさうだ。

その後、何かで、少し損をした、といふことだけれど、今でも、なか／＼の財産家だ。おれは、成るべくは、土地の者を、使つて遣らう、といふ考で、百姓などを、澤山用ゐたから、彼等も、大に喜んで働いたが、中には、その爲に、財産家になつたものも、随分ある。明治六年に、おれが神戸へ行

たら、元おれの家の門番であつた、飴賣の娘が、立派なお茶屋の主婦になつて居た。かういふ風だから、おれも、神戸へ行くと、中々もてるのだ。

この時の將軍(昭徳公)は、歳は、まだ若かつたが、なか／＼聰明のお方で、巡視のことも、練習所のこと、おれが、直接に申上げたのだ。

塾生の中には、諸藩の浪人が多くて、薩摩のあばれものも、澤山居たが、阪本龍馬が、その塾頭であつた。當時のあばれもので、今は海軍の軍人になつて居るものが、随分ある。

然るに、幕府の役人からは、勝は海軍を起し、地所を買入れ、薩州のあばれものや、諸藩の浪人を集めて、そして彼等も亦喜んで、勝に服してゐるといふのは、何か仔細があるであらうなど、ひどく悪まれて、とう／＼、しまいには、江戸の氷川へ、閉門を命ぜられ、地所なども一切、取揚げられてしまつた。おれも、あの地所が残つて居ると、こんなに貧乏でもあるまい。

五

文久三年の十二月に、十四代將軍(家茂)が、上洛せられる時は、幕府では例の通り、陸路、東海道を、御通過になるといふ、豫定であつたけれども、おれは、日本は海國であるから、國防の爲には海軍を起さねばならぬ。而して、海軍を起すには、將軍などが、率先して、之を奨励して下さらなく

てはいけない。それ故、この度の御上洛も、諸藩の軍艦を従へて、海路より、御出發あるがよろしからうと、老中などに建議した。

所が、老中なども、至極尤もの事ではあるが、諸藩から、各その船を出させるのが、なか／＼困難だと、心配するから、それは私が、屹度引受けます。併しながら、一旦私に、お任せある以上は、種々些細な事まで、貴下がたより、御指圖があつては困ります、といつたら、それは承知だから、一切お前に任せる、といふことになつた。

そこで、おれは、直に諸藩に命じて、今度は將軍が、海路より、御上洛になるから、各々その船艦を出して、お供をせよと達した。所が、西洋形の船を所有する藩は、皆一艘づゝを出したが、また中には、幕府の船を借りて、乗組員だけは、その藩から出して來たものもあつた。その時集まつた船と船將とは、この表の通りだつた。

幕府	翔鶴丸	肥田濱五郎
朝陽丸	伴鐵太郎	
千秋艦	荒井藤次郎	
第一長崎丸	鈴木卓太郎	
播龍丸	濱口卓右衛門	
	長崎奉行所屬	頭取
	定役	濱口卓右衛門

越前龍丸	薩摩安行丸	佐賀觀光丸	加州發起丸	南都廣運丸	筑前大鵬丸	雲州八雲丸
不	船將	番頭並	軍艦奉行	松本主殿	奉行	奉行
明	大山彦介	濱野源六	岡田雄次郎	長岡安之助	杉原奎	

乗組員は皆、私共は船のことは、誠に未熟であるから、萬事指圖を頼むといふから、よし／＼、おれが引受けた、心配するには及ばない、といつて、おれの部下から、堪能の者、三人ほどづゝ、各藩の船に、乗達しました所が、彼等も大に喜んだ。その上彼等は、藩から相當な手當を、もらつて居る上に、幕府からも、幕船同様に、給料を與へたから、丁度、二重に給料を、貰らふ都合で、ます／＼喜んで。

將軍が、多數の軍艦を率ゐて、上洛するといふことは、前古未曾有の事で、實に壯觀であつた。併し、前古未曾有の事であるだけ、おれの責任は重く、且つは、諸藩の船もあることだから、おれは始終、檣の上に登つて、艦隊の全部を、見渡して居たが、大阪へ着くまで、一週間といふものは、殆

ど眠らなかつた。

六

財政困難といふ境遇は、おれも、幕末において、自から経験したことであるから、今日の時勢を考へると、ひどく胸にこたへる。それで感慨の餘り、いろ／＼と、古い書類などを調べて、「機運遺蹟」といふものを、書き始めた。

これは、天保、弘化の頃から、明治の今日まで、凡五十年間、時勢變遷の大綱を書いたのだが、初めの二十年は、おれが、非常に苦心した時代で、その間には、鎖港論と、開港論との騒ぎがあり、尊王論と、佐幕論との争ひがあり、櫻田騷動があり、長州征伐があり、終に、維新の大改革に終つたのだが、こんな大騒ぎの本も、畢竟、國帑空乏の一事に、過ぎなかつたのだ。

この時代で、本當に國家問題ともいふべきものは、彼の開國の國是を、決定したことだが、これについて、世間に説くのは、大抵間違つて居るから、おれは、當時の書類や、手紙などによつて、自分が、實際經歷した事を、今いつた「機運遺蹟」に、書かうと思つて居るが、からだの具合が悪いから今は、中止して居る。

あの時、開國の國是を決定するのに、力のあつたのは、薩摩の齊彬、土佐の容堂、筑前の黒田、伊

豫の伊達、まづこれ等の諸侯であつた。併し當時は、世間の議論が、やかましかつたから、これ等の諸侯も、極めてその意見を秘密にして、臣下のものへでも、容易に漏らさないで、幕府でも、諸侯の意見を確かめる、といふことには、随分、骨を折つたのだ。それで大久保一翁が、齊彬公の意見を聞き出したのが、一番の手始めであつた。

堀田備中なども、随分、骨を折つたが、この備中といふのは、實にえらいものだ。どうしても、當時第一流であつた。

終りの三十年も、なか／＼面倒な時代で、到頭、憲法も出来、國會も開けて、日清戦争まであつたが、これも畢竟、財政困難が本だ。それで朝廷のものも、民間のものも、がや／＼、議論ばかりして、ちつとも、その救済策などを考へないから、世は、ますます、困難になるばかりだ。

いくら戦争に勝つても、軍艦が出来ても、國が貧乏で、人民が食へなくて、仕方がない。やれ朝鮮は弱い、支那は無氣力だの、いつても、國家の生命に關する大問題が、其方のけにせられるやうでは、まだ鎖國の根性が抜けない、といふものだ。

併し、只今では、當局者も、頻りと、骨を折つて居るから、おれなどは、黙つて居るのが、相當だらうけれど、おれだつて、人の苦んで居るのを見ては、人情にも、ちつとして居られないから、當局者の参考にもと、今いつた「機運遺蹟」を、書きかけたのだが、何れ遠からず、完成する積りだ。

七

北條早雲と云へば、炯眼なる戦將とのみ思へども、その實は、非凡なる政治家也。關八州は、元來、京都將軍の領地にして、其租税の苛煩なる、全國中、比類なかりし。その割合は、七公三民位にもありつらん。早雲之を察し、法を三章に約し、輕税簡法、以て民を率ゆ、民之に從ふ、水の下きに就くが如し。彼が羈旅の身を以て、手に唾して關八州を收めたる所以は、獨り英雄の心を攪りたるにあらず、民心を服したれば也。足利は、北條の例により、徳川は、足利の例による。武家諸法制の如きも足利の例を、斟酌したるに過ぎず。

地方自治は、珍しき名目の様なれど、徳川の地方政治は、實に自治の實を擧げたる也。看よ、名主と云ひ、伍組と云ひ、自身番、火の番と云ふが如き、皆な然るにあらずや。北條の時代には、宋元通寶を用ひ、足利の代には、永樂錢を用ひ、知行高迄が、永樂錢を以て、その相場を極むるに到れり。黄金の輸入は、足利時代の貿易にして、殊に其の隆盛を致せり。當時、堺浦は、貿易の中心にして、天下の富、此所に在りき。信長が、上國の形勢を察せんと欲して、京師に入るや、徑ちに道を轉じて、堺浦に到れり。彼れ、天下の爲めに、武を布かんとするの雄志あり、その堺浦の富に向て、着眼したる所以のもの知る可し。秀吉に到りては、堺浦の豪富を、大阪に移し、その金を、大阪城に收めたり。

如何に黄金多かりしかは、その諸將に頒ちたる、賞賜の夥多なるにて徴す可し。

細川頼之は、日本の大經濟家なり。海外貿易より、足利氏財政の制度、斯人の創始に出るもの多し。足利義滿は、明帝より、日本國王に封ぜられたりとして、史家、口を極めて之を非難す。余は之を、回護せんとするにあらず、併しながら、彼が、虚名の封册を受けたるは、之に據りて、實例を探らんが爲めたるを忘るべからず。如何に彼が、明に向て、永樂錢の輸入を仰ぎ、その惠與を請ひたるかを見れば、彼も中々、食へぬ奴じや哩。

戊辰の變は、余は町飛脚によりて、幕閣よりも、一日早く承知せり。當時、余は、閑居中なりしを以て、進言の機を得ざりし。扱て、愈幕閣に知れ渡りたれば、城中、鼎を沸すが如く、祭りにさへ騒ぐ、江戸ッ兒の常なれば、その騒ぎ大方ならざりし。當時、幕議は、少々の行き違ひより、事生じたる次第なれば、別段の大事にも、到るまじとの衆議なりしも、余は竊かに恐れたり。西郷めが、此の機に乗じて、天兵を指し向けはせぬかと。果然、來れり。彼は實にゑらい奴じや。

余は、天下に恐ろしきもの、二人を見たり。一は横井小楠、他は西郷南洲。横井は、西洋の事とて別段、澤山知り居るにあらず。多くは余より聞きて、知りたる位なり。併し、その思想の高調子にして、とても階子かけても、余は及ばぬと思ふこと、着々ありき。余竊かに思へり、横井は、自から爲す人にあらず、然れども、若し彼の言を用ゆる人あらば、是れ

由々敷大事なりと。

後、西郷と相見、その意見議論、余更に譲る所なし。獨り譲る所なきのみならず。余、彼に教ふるもの、少しとせず。然れども、余が所謂、天下の大事を負擔するものは、果して彼にあらずやと、余竊かに恐れたり。

余は、幕府の閣老に向て、此の二人あること、及び此の二人の行末には、必ず注意を怠らぬ様、進言し置けり。

後、閣老、余に語りて曰く、其方が目鏡も、大分間違つた。横井は、何かの申分で、蟄居申し附られ、西郷は今、御用人の職に在り、家老とか何とか、身分でもあるものならば、兎も角も、斯る輕きものが、何事をか、天下になし得んやと。

然れども、余は竊かに恐れたり。横井の思想を、西郷の手で行ふ時には、最早それ迄なりと、果然、西郷は、出で来れり。

余が、西郷と、初めて相見たるは、兵庫開港延期の談判員を、被仰付の爲め、余が召されて、京都に入らんとしたる途次、大阪の旅宿に於て也。當時、西郷は、御留守居格にて、黒縮緬の羽織に、鬘の紋附けたるを着て、中々立派な風采なりし。

彼は、兵庫開港延期を、餘程、重大の問題と信じ、此れが爲めに、憂慮措かざりしもの、如く、頻

りに余に向て、その處置を、聞かんとせり。余申す様、未だ委細は、承知せず候得共、恐らくは、此の談判員、被仰付候爲めの召命ならん。小生は別段、此れを難件とは存せず、小生にして、談判員たらば、外國の全權に向て問はん、君等は、山城の天皇を知れりやと。彼等必ず、知れりと答へん。然らば、天皇の聖意を安んずる爲めに、延期なし呉れと云はん。而して他方に於ては、加州、備州、薩摩、肥後、その他の大名を集め、その衆議を採りて、以て陛下に上奏し、更に國論を、決する所あらんと。

それより、問ふに任せて、余は、芥蒂なく、幕府、今日の事情を談じたり。彼曰く、兎角幕府は、薩摩を、畏惡する風あり、漫に猜疑の眼を以て、禍心を包藏するものとなす。誠に以て、迷惑至極なりと、余、答へて曰、幕府のつまらぬ役人共には、左様な狭き見のものもある可し。併し、幕府とて、人なきにあらず、左様に、見くびりたるものにもあるまじ、先づ打やりて置き給へ、左様な事に懸念し、若しくは憤激するは、果して、貴藩の大をなす所以にあらずと。彼曰く、善し。

余が、重ねて相見たるは、戊辰、江戸城受渡しの談判の席上にて有之也。曾て坂本龍馬、余に告げて曰く、先生屢ば、西郷の人と爲りを稱す、試みに之を訪はん、願くは添書を給へと。彼れ薩摩より歸りて曰く、成程、西郷と云ふ奴は、わからぬ奴ぢや。少しく叩けば、少しく響き、大きく叩けば、大きく響く。馬鹿なれば、大なる馬鹿なる可し、利口なれば、大なる利口

なる可しと。龍馬も中々、鑑識ある奴じや。
 西郷に、及ぶ可らざるは、その大膽識と、大誠意とに在り。彼れ、余が一言を信じて、單騎、不測の江戸城に、乗り込む。余、事に處して、豈に參子兒の謀略なからんや。唯だ至誠は、余をして、相欺くに忍びざらしむるものあり。此時に際して、小籌淺略を事とするは、却て斯人の爲めに、余が腸の底を、見すかされんことを恐る。故に余も亦、至誠を以て之に應じ、遂に、江戸城の受渡しも、立談の間に決したる也。

人材登庸

薩州さんと云つて、別に、えらいことがあるもんかい。首取りが上手ぢや、城責めが達者ぢやのと云ても、娑婆が娑婆じや、そんなに有難くはないのよ。日外、老爺は、松方と榊山に、斯う話したんだよ。なぜ君達は、若いものを、どし／＼官に引上げないか、君達は、若いものだと言へば、えらものである、下風に置いて、重く用ゐないのはいけないうよ、と云つたのよ。昔時、老爺が、國事上のことで、薩州に下つたが、老爺は、薩州の國家老や、幅利の親株に會つて、種々國事上の話をしたんだよ。幅利の親株が云ふのには、え、彼の吉之助めがことで御座るか、あれはまだ二才で御座ると、一言の下

に、西郷をふりすて、仕舞つたんだよ。老爺は、薩州へ下らぬ前、西郷と腹を合はせ、種々の打合せをして、薩州へ下り、夫れを實地に行つたのよ。それを薩州の親株は、知らぬが佛であつたんだよ。面白じやないか、三東三文ゆぶり落された二才の吉之助めは、なか／＼えらいよ。西郷が、満腹の經綸を畫し、薩藩の方針を、一定したのは、忘れもせぬが、此際であつたんだよ。よいか。
 薩州から、榊山だの、松方だの、慶州將軍だの、何やら海軍將軍だのと云つて、政機を握つたり、兵馬の權を司つたりして居るのは、何の不思議なことはないのだよ。薩州は、藩主に、賢君齊彬公が出て、君恩十代百代の門閥を打破し、えらい西郷に、大權を握らしたんだよ。西郷は、君主の意を承け、役に立ちさうな若いものは、其器を見抜いて、どし／＼、役員に引上げて、權力を與へて遣つたから、今の榊山も、松方も、出て來たのじや。君なんか、頻に、人材登庸がどうじやの、斯うじやのと、吼立てるが、榊山も、松方も、老西郷に見習つて、情實を打破し、えらさうな若いものは、民間からでもよろしい、官邊からでもよろしい、どし／＼官に引上げて遣り、一方からは、お役目大義と云ふ風で、若いものを、いちめるんだよ。若いものを、いちめるばかりではない、自分でも、若いものと同様、お役目大義と思つて、役目と打死するのぢや。さすれば、政務は、立派に擧つて、各種異様の豪傑が、生れて來るんだよ。若し、松方や榊山は、薩州の若いものを、最眞目に、此の登庸法を行つたら、それこそ大失策だよ。此私心さへ扱まなければ、榊山や松方は、國民の受けもよく、意

外に大きな手柄を、顯はさうよ。

西郷説諭の密旨

明治十年の役であつたよ、三條公が、岩倉公に密旨を下し、岩倉公が老爺に、西郷が鹿兒島に、兵亂を企てたから、鹿兒島に下り、西郷に説諭して、兵亂を取鎮めて来い、と云はれたよ。老爺は、大決斷を成されるなら、これから直ぐ、鹿兒島表に下り、西郷に會つて説諭し、兵亂を、未發に取鎮めて、立派に復命致さう、と云ふのよ。所が岩倉公は、貴殿が申さるゝ大決斷は、どんなものか、と云はれたが、老爺は左ればなり、大決斷と云ふのは、大久保、木戸兩人が官職を免する一條と云つたので、岩倉公は、夫は難題、大久保、木戸の兩人は、國家の柱石だから、免職を申付くることは出来ないと申されたよ。老爺は、夫れなら、折角の御密旨でも、眞平御免と、斷つたのよ。

鹿兒島表では、桐野が、旗擧げが政府に知れたらば、今に勝麟が、誰かの密旨を受けて、出掛けて来るだらうと、老西郷に話した。所が老西郷は、馬鹿を云へ、勝は出掛けて来る男ではないと、からからと笑つたと云ふことぢや。どうだい、老西郷は老爺の胸中を、見透して居たのぢや、思へば早、二十一年前のむかし話ぢや。將旗の影に、仰いで見ると、眼の圓い、骨相の太い、背の高い、俯して思ふと、濃厚柔和の優男が、眼前にちらつくやうだよ。

餘裕

人には、餘裕と云ふものが無くては、逆も大事は、出来るものではないよ。昔から、兎も角も、一方の驍將とか、一番槍の功名者とか云ふ者は、假令如何な風に見えても、其の裏の方から、覗いて見ると、ちやんと、分相應に、餘裕を備へて居つた者だよ。今の人達に、此餘裕を持つて居る者が、何處にあるか。人物は、随分澤山ある様に見える世の中だけれども、己等の眼には、頼と見えないう、皆無だよ。其處へ行くと、大西郷が、懷はれるのさ。彼れは、常に謂つて居たよ、人間一人前の仕事と云ふものは、高の知れたものだ。

どうだい、餘裕と云ふものは、此處だよ。いくら蚤取眼で、天下の大機を見たとして、観えるものではないよ。いくら物事に齷齪して働いても、仕事の成就するものではないよ。功名を仕よう、と云ふ者には、逆も功名の出来るものではないよ。屹度、捷戦を爲ようと思つて、戦つた日には、中々、其通りに、捷戦を爲るものではないのだよ。是等はずまり、無理があるからいけないのだよ。詮じ詰めれば、餘裕が無いからの事だよ。

お前方には、見えないかへ、大きな體をして、小さい事に心配して、あげくの果に、煩悶して居る者が、世の中に随分多いじやないか。駄目だよ、彼れ等には、逆も天下の大事は出来ないよ。つまり物事を、餘りに大きく見るから、いけないのだよ。物事を、自分の思慮の裡に、疊みかける事が出来ないものだから、あの通り、心配した果が、煩悶となつて、壽命も何も、縮めて仕舞うのだ。全體、

物事は、分別爲なければならぬ物が、却て物事の方に、吞まれて仕舞ふから、仕様がななのだよ。これと云ふのも、矢張り、餘裕がないからの事さ。

無我

何事をなすにも、無我の境に入らなければいけないよ。悟道徹底の極は、唯無我の二字しか無いのだよ。いくら禪で鍊り上げて、中々さうは行かないよ。いざとなると、大抵の者が、棄れて仕舞ふものだよ。

きり結ぶ 太刀の下こそ 地獄なれ

踏込み行けば 後は極樂

と、是れは、昔の劍士の言ふたことだよ。其調は、酷た素朴だがの、つまり無我の妙諦は、這裡に潜んで居るのだ、よしか。

天分

つまり、餘裕、思慮、膽力など、謂てもの、其人の天分だよ。天分と云ふものは、實に争はれないものだよ。併し磨けば光るのだよ。どんな者でも、平生の修養次第にあることも、亦中々争はれないものだよ。己等もの、十七、十八、十九、血氣盛りの此三年の間、劍術の修業をした時に、いろいろ禪で練て見たがの、己等の修業は、大層役に立つたよ。

八

俳諧といへば、其角堂や、夜雪庵などが、おれの處へ来るから、おれも、一寸やつて見る氣になり、幾つも作つたが、茲に一つ、おれの得意の句がある。それは、

時鳥 不如歸遂に 蜀魂

ほととぎす、ほととぎすつひに、ほととぎす。人生すべて、かくの如しだ。少壯のときには、時流に従うて、政黨とか、演説とか、選筆とか、辭職とか、騒ぎたてるが、これは、即ち時鳥だ。しかし、これも一時で、天下の事、意の如くならず、己みぬる哉、己みぬるかな、寧ろ故山に歸りて、田地でも、耕すがましだと、不平やら失望やら、これが中年から初老の間で、所謂、不如歸だ。而して、彼是する中には、年が寄つて、もう蜀魂だ。つまり、十七文字の間に、人生を一括したのだ。

この句を永機に見せたら、どうも先生のは分らない、といふから、困つた奴だと、今の通り、説明して聞かせてやつた。すると猶ほ考へて居たが、先生のは、字義が六つかしいといふから、それは、字義の講釋などは聞かなくても、見る人にはわかる。芭蕉の句でも、見る人の眼識次第で、深遠の意味が、自から心に浮んで来る。もし芭蕉が、おれの句を見たなら、屹度、感心するだらう、と、威張つてやつた。

其角は、才でとほした人だけれども、芭蕉は、またえらい人だった、その句を味つて見るのに、皆な禪味を帯びてゐて、その人品の高雅なところが想像せられる。そして、その語は、西行の古歌などから、取つたものが多く、學問は、中々博かつたやうだ。「道ばたの木樅は馬に喰はれけり」といふ句から思ひついて、おれが、

晝顔の とがまを洩れて さきにけり

と詠んだが、どうだネ。「稻妻の行く先見たり不破の關」實に、千萬言を重ねても、言ひ盡せぬことを、やすくと、言ひ顯はしてあるが、おれも、かうやつた。

稻妻や またくひまの 人一世

それから、まだ、いくつもあるが、

夜の雪 草鞋もぬかて 子を思ふ

これ等は、少し調子が卑いから、夜雪庵などにも、分るだらう。

車引き 車引きつゝ 過ぎにけり

これは車夫が、車も随分引いたから、なにか商賣を代へやうくと、思ひつゝも、矢張り、車を引いて居て、到頭、轉業の機會がなく、それで一生を過ごす處を、詠んだのだが、浮世は、皆この通りだよ。

米櫃に 一夜つかるゝ 老鼠

これは、貧乏士族が、何か食ふ道に、ありつかふくと、思つて居る内に、自分の身が、まづ、たふれてしまふ。かういふ人は、屢々おれの家へも來るが、恰も老鼠が、一夜かゝつて、米櫃を嚙つて、さて、これから米を食はう、といふ時になつて、體は疲れる、夜は明ける、といふのと同じだ。どうも、今の人がいふ俳諧は、皆な規模が小さくて、小天地の間に、踟躕して居るが、あれはいけない。おれは曾て、

雲の峰 すぐに向ふは 揚子江

と詠んだことがある。詩でも、山陽の「雲耶山耶」などは、まだく小さい。

小説も、退屈な時には、讀んで見るが、露伴といふ男は、四十歳位で、彼奴なかく學問もあつて、今の小説家には、珍しく物識で、少しは深さうだ。聞けば、郡司大尉の弟だといふが、兄弟ながら、面白い男だ。

紅葉といふのは、才子だ。小説の外にも、仕事の出來る奴だ。書いたものに、才氣が現はれて居る。「むら竹集」を書いた、篁村とかいふ男の小説は、近頃、一向見えないが、もう種切になつたのか。それとも又、商賣替でもしたのか。なに、まだ壯健だと、それでは、老い込んだのだらう。それから、浪六といふ男があるやうだが、あれの書くのは、千篇一律で、何時も俠客ばかりだ。併

しそれも、腹の無い人間ばかり書くから、どれもこれも、意味がない。彼奴も遠からず、種切になるだらう。

露伴ばかりは博い、書くものに、皆な趣がある。佛書も、少しは讀んだらしい。作者は、何でも腹が廣くなければいかん。

馬琴も、おれが、小さい時分は、なか／＼盛んだつた。彼奴も、十二三の頃には、兒島傳庵といふ御典醫の小僧であつて、この時に、初めて作者になる階段を、上りそめたのだ。その頃、根岸肥前守といふ人が、三十俵二人口の小碌から、立身して、御勘定奉行まで、経昇つた。これ程、世渡の上手な人が、隠居の後「耳袋」といふ書物を作つたが、兒島とは、懇意な間だから、いつもこの書物を、貸して遣ると、その使には、必ず馬琴が來た。ところが思ひきや、馬琴は、途中で、風呂敷包を解いて、「耳袋」を讀んだと見えて、後年、著作をするのに、屢々この中の事を種にしたといふことだ。また、小説を書いた禮物も、貯蓄しておいては、支那小説を、買つて讀んだから、彼奴の趣向は、何時も、變化がうまい。あの「閑話休題」といふ熟語も、支那小説に、よく用ひる語だ。「八犬傳」は「水滸傳」を、丸抜にしたのだけれど、おれが、十七八の時に、あれが初めて、出版せられた頃には、非常な評判で、所謂、堂々たる大儒者も、之に及ばなかつた。實に、絶世の才子だつた。京傳は、町人だ。その弟の京山も通人で、才子でよく穿つたことをいつた。

種彦は、二百俵の旗手で、高谷彦四郎といつて、漢學も和學も、よく出來た。極めて伶俐な人であつたから、奥向へも出入して、幫間の如く、如才なく立ち廻つた。そして古風な事が好きで、やれ近松だとか、やれ西鶴だとか、始終、騒いで居つた。おれの親父とは、懇意であつたから、折々は、遊びに來て、おれを捕まへては、あなた本が好きなら、私の宅へ來て御覽、いろ／＼、小説の考證もある、などいつたり、また、あなた暇なら、小説でも書いたら、どうだなどいつて、小説の秘書のやうなもの、貸したりした。

あの評判の「田舎源氏」は、大奥の事を、書いたもので、その頃の大御所様は、妾が四十人、子が六十人といふ程、えらい方であつたから、種彦は之を材料にして、大御所を、光源氏に見立て、その他、繪組の模様なども、お濱御殿を、そのまゝ書いた所がある。如才が無いから、奥の部屋々々へもはいつて、その事情に、精通して居つた、と見たて、書いたものが、皆な活動して居る。今の小説家は、何故、穿ちが下手だらう。諷刺といふことを、殆んど知らない。たまく／＼書けば、眞面目で新聞に、毒づく位の事だ。氣が短いのか、それとも又、脳味噌が不足なのか。

馬琴の「八犬傳」も、あれは徳川の末世のことを書いて、つまり、不平の氣を漏らしたのだ。一寸みると、なんの意味も、ないやうだが、その無さ／＼な處が、上手なのだ。京山や、春水なども、本町あたりの、大町人の内幕を、書いたのだ。

馬琴の諷刺は、ちやうど、司馬遷の『史記』の様なもので、褒貶曲折が著るしい、凡そ窮屈な時代には、才の競争で、手を拍つやうな、上手な諷刺が、多くあるものだ。

姓は今忘れたが、號を金鷄といふ、戯作者の味噌摺があつた。味噌摺といふのは、今の批評家の下等の奴だ。金鷄は、まだ二十歳餘りの、若輩であつたけれど、なか／＼の才物で、たとへば『姓名録』といふやうなものを作つて、當代の作者や役者を、鯛だとか、鯉だとか、鮒だとか、鱒だとか、價打をつけて評するから困る。名譽を好む人は、豫め金品を贈つて、その機嫌を取つて置く、といふ始末。その摺物の如きも、早晚お上へ、没收せられる覺悟で、二十兩のものをも、早く百兩位に、儲けて置いた。それ故、お上にも仕方がない。

また、その頃、京都の儒者に、東條琴臺といふのがあつた。當時、寺門靜軒の『江戸繁昌記』が、非常に評判のよかつたころだから、琴臺も、江戸へ出て、一と旗擧げやうと思つて、江戸の大家先生を、大勢、兩國の萬八へ招いた。御馳走といふ前觸れだから、何れも出席して、席上揮毫だの、課題だのやつた後、足るほど飲み食ひして歸ると、翌朝、萬八から、昨夜の割前だといつて、諸入費の頭割を取りに來た。あれは、琴臺の御馳走であつた筈だ、といふと、琴臺先生は、皆様から頂けと仰つて、今朝、既に京都へ、御出立なされた、といふ。それは一杯食はされた、と思つても、後の祭りだかういふ惡戯を、したのもある。その頃の書畫會といへば、谷文晁や、渡邊華山なども出て、頗る賑やかなものであつた。

十返舎二九も、なか／＼の才物で、あれは花川戸の船宿の亭主で、職が職だから、流石は通人だつた。

そんな風にして、作者が、巾を利かしてゐたから、後には、水野越前守などの、お叱りを受けて、奉行所などへ、引かれたものもあつたが、それはその筈だ。

今の人も、文學は元祿にある、といふが、尤の事だ。あの近松門左衛門の如きは、えらい奴だ。坊主上りださうだが、才は充分あつた。平賀鳩溪も、諷刺は巧みだが、近松には及ばない。近松の淨瑠璃の中に『出世瀧徳』といつて、淀屋辰五郎の事を、書いたものがある。その文中に、淀屋が、豪奢の様を寫して『金の冠、着ぬばかり』と書いたが、それでは朝廷に對して、勿體ないといつて、直ぐその次に『癩は持病にありとかよ』とやつた所は、實に名文だ。笏を、癩に代へた所などは、實に才子だ。

なか／＼うまい諷刺ではないか。尤もこの頃は、田沼時代だから、作者も、時勢が癩にさはつて、畢竟あれで、不平を洩したのだ、昔の作者は、すべてそんな遣り方だから、旗下にも學者にも、皆な好評を得た。

今の小説は、西洋ものを加味して、昔し物を焼直すから、廣いことは廣いけれど、淺くつていけな

い。昔の小説を読むと、その時勢がわかるけれど、今の小説では、今の時勢は、決してわからない。それに諷刺が浅はかで、すぐに人を怒らせるなどは、餘り智慧がないではないか。露伴などが、今少し年をとると、好からう。書いたもので見ると、あいつ中々えらい。そして経歴もあるらしい。まづ今日では、露伴が一等だ。

九

曾て、宮内省から頼まれて、江戸の歴史を調べて、一部の書物を作つたが、城廓の沿革は勿論、法律、風俗、寺社、其の外すべて、漏れなく載せてある。

之を調べる時に、一つ不審であつたのは、江戸城が、扇ヶ谷の執事、太田道灌の居城にしては、餘り大き過ぎる、といふことだ。何の記録を見ても、江戸城の門は、三十六とあつて、全體の結構が、なか／＼大ききうだ。全體、この時分の記録では、漆間萬里軒のが、一番確からしい。この人は、もと京都相國寺の僧で、後に道灌の客分になつて、顧問をして居たので、江戸名所圖繪などにも、澤山この人の記録から、引いてあるが、この記録にも、矢張り、城門三十六と書いてある。

そこで、色々考へて行つて、到頭、その譯が分つた。當時、扇ヶ谷は、關東の管領で、その居城は今の川越であつたが、平生は、鎌倉に住んで居て、川越へは、一年に一二度も行くばかりであつた。

それ故に、萬一、八州の野に、不意の兵亂でもあると、鎌倉と、居城との連絡は、忽ち断たれる心配がある。そこで、之に對する豫備として、八王寺を始め、その外諸處に、つなぎの砦を置いたので、江戸もまた、その一つである、といふことが分つた。

その頃の鎌倉街道といふものは、高輪の臺から、赤坂離宮の中を、通つて居たと見えて、あの離宮が、紀州の屋敷であつた時分には、現に、鎌倉街道の一里塚が、残つて居た。鎌倉と川越との、つなぎの城を置くには、この江戸は、實に屈強な處だから、當時、管領の威光で以て、城門が三十六もある様な、大きな城を、こゝへ築いて、八州の壓へにしたのだ。そして道灌は即ち、その城代であつたのだ。

道灌も、この城を築くについては、場所の選擇に、随分、骨を折つたものと見えて、諸々方々に繩張りなどした跡が、残つて居る。今の道灌山なども、畢竟、その一つだ。それで諸方を檢分した末、今、江戸城の立つて居る所が、一番よい、といふことになつたのだ。この頃、江戸城の外に、今の山城町や、伊皿子にも、小さい砦があつた、といふことだ。

道灌といふ男は、あの時代にしては、随分、氣品の高い人物で、八州の人心も、大に歸服した。そこで、その伊皿子に居つた、某の讒言にあつて、終にあの災難にかゝつたのだ。

『窓含西嶺千秋雪、門泊東吳萬里船』といふ額を掛けてあつた、靜勝軒は、今にたつた一つ、宮城の

内に、残つて居る。彼の櫓の所にあつたのだ。
 今では、富士の雪ぐららるは、見えるかも知れないけれど、海も何も、見えはしない。併し、道灌の頃には、八重洲橋の外は、みんな海であつたさうだから或は東吳萬里の船を、門前に泊する景色も、實際あつたかも知れない。それから、櫻田門外より、霞ヶ關へかけても、ずつと諸屋敷があつたらしいが、兎も角、随分、規模が大きかつたに相違ない。

東京奠都三十年祭について、先日、岡部府知事などから、おれも發起委員になれ、といつて来たから、おれは、斯ういふ風な返事を、出さうと思つたけれど、折角、人が骨を折つて居るのに、邪魔をするも、氣の毒だと思つて、まあ止にしたが、その草稿がある。

戊辰之變、勿々、已に過ぐ三十一年、今や遷都の奠を舉んとし、我を以て、其委員中に加へんと聞く。我豈、是に當らむ。蓋、府下無事に今日ある、其初め西郷氏の力なり。後、區劃盡力、遷都の舉に及びしものは、大久保氏の功なり。今兩氏あらば、其殊功に可報なり。然して兩氏、泉下の人と化す。我獨存在、前人の功に居て委員たるは、其志に非ず。又知者の耻る所、嘗て明治廿五年懷舊に不堪、竊に蕪詩を作り、感慨の情を述ぶ。廣く人に示さずと雖、是我が素志。今に及で益老朽、不便の身體を以て、衆人の後に付き、空奔せむ哉。此情を察し、我を以て、委員と成すな

れ。

又思ふ、其奠たる、舊に泥す、東都三十年、上下、其居を安じ、業を樂むものは
 聖恩の厚に出づ、衆民、爰に感銘成せば、其舉止、浮華に流れず、謹で以て祝賀すべし。是我素願也。

三十一年三月

おれの精神は、この末の段にあるのだ。下々のものは、南京米を、食つて居る様な今日だから、餘り金の入るやうな騒ぎなどは、しないがよい。委員なども、こゝの所へ、注意しなくては可けない。そこで、こんな腰折が出来た。

咲く花を 散らさて祝へ 田舎人
 又、かう云ふ發句と、歌が出来た。

上野飛鳥 都の花と なりにけり
 たちかへる 我が古里の 墨田川 昔忘れぬ 花の色かな

おしまひの歌は、昔し江戸から、静岡へ引拂ふ時に、おれが「つねだにも 住まゝくほしき墨田川 わか古郷と なりにけるかな」と詠んだのと、前後照應して居るのだ。どうだ、面白いだらう。

小栗上野介は、幕末の一人物なり。彼は、精力人に絶し、心計に富み、略々世界の太勢にも通じ、特に、誠忠無二の徳川侍にして、恰も、彼が先祖たる、小栗又一の面影を帯びたり。一言すれば、彼は、參河武士の長所と、短所とを具へたり。その胸襟の狹窄なりしは、甚だ彼の爲めに、惜む可かりし也。

彼は、長州征伐を奇貨として、一舉に長州を斃し、再舉に、薩州を斃し、幕府の下に、郡縣制度を置かんと欲し、佛公使レオン・ロセスを介して、佛國より、銀子六百萬兩、及び年賦にて、軍艦數艘を借り受くるの約束をなせり。此の事を知るものは、慶喜殿の外、閣老始め四五人に過ぎず。

長州の事、甚だ艱むに際し、幕府、余を起して、休兵の談判を、なさしめんとす。江戸を發する前一日、小栗窃かに、余に語りて曰く、吾が徵命を帯びて西上あるは、必ず長州談判に關する用向あらん、果して然らば、實は斯々の密謀あり、君も定めて同感ならん、故に敢て、斯の機密を告ぐと。

余、争ふも詮なきを見て、左様かと、黙頭しつゝ、大阪に赴き、閣老板倉を見て曰く、承れば斯々の御目論見ある由、至極結構なり、然れども、天下の諸侯を廢して、徳川氏獨り存するは、是れ天下に向て、私を示す也。左様の英斷あらば、何ぞ徳川氏絶つ、政權を返上し、天下に向て、模範を示し、然る後、何ぞ郡縣一統の政を來さざると。閣老、愕然たり。

斯くて、慶應三年丁卯の歳の十二月に到りて、佛國より、破談の報に接せり。如何に小栗が、此の報に接して、失望落膽したるかは、佛公使レオン・ロセスが、予に語りし、左の言葉にて、一半を知るべし。曰く、小栗さん程の人物が、僅か六百萬兩位の金の破談で、腰を抜かすとは、扱もあきれ入りたる事に候はずやと。六百萬兩、六百萬兩、小栗の爲めには、徳川の天下を睹するの六百萬兩、然るに、越えて明治元年、戊辰の正月は、早くも伏見鳥羽の火花は散れり。三百年の徳川政府は、瓦解せり。小栗は、事の成す可らざるを見て、上州の采邑に退居せり。博徒の群、兼て彼に快からざる者あり。且つ彼が財寶を、利せんとするものあり。官軍に讒訴して、彼は遂に、無慘の最後を遂げたり。而して、思ひきや、彼は清貧の士ならんとは。

水害。今度の大水はどうだ、東海道から、近畿、中國は、申すまでもない、東北までも、えらい目に、逢ふて居るではないか。河の水が汎濫して、堤防をひき裂いたり、湖水が溢れ出して、市街を浸したりしたから、堪らない。そこで田畑の損害、畜類の死んだのは、一時眼をとちて、算外とした處で、人間の死んだのは、どうするか。

田畑の損害は、錢金を出して、救ふて遣れば、それで先づ済む、とした處で、人間の死んだのは、どうするか、どうしてやつて遣るか。いくら御上でも、此れには、仕方があるまい。ましてや、諸處方々の被害地へ、やれ百萬兩でござれ、やれ五百萬兩でござれ、やれ一千萬兩でござれと、是非とも、損害の多寡に據つて、救助金を、出して遣らねばなるまい、此金は、何處から出すか。

なんだへ洪水で候の、やれ大水で候のと、大層に騒ぎ立て、其狼狽さ加減は、まあどうだ。己等の眼から見れば、是しきの事は、少の放尿に過ぎないじやないか、どうだ。

権現堂の堤がきれたと、今日聞いたよ。彼處がきれるときは、本所深川は、幕地に押し来る、此水の爲めに、大難儀をしなければならぬじやないか。

幕府の頃は、どうだい、天明の大洪水でも、天保の大洪水でも、今の様に、少の放尿位の水になんだ、大層もない、河川汎濫、堤防決潰など、七六づかしく、事を騒ぎ立てる様な事は、唯の一度もないが、どうだ、降参したらう。

堤防。

それだから、己れが言はない事じやない、疾うから、言つて居るじやないか。治水の事は、餘程よく、氣を付けて貰はなければ、いけませぬぞよと。どうだ、少し計りの水に、狼狽る様ではならぬ

から、言つてあるのだ。御上の人は、今になつて、始めて目が醒めたらう。

見なさい、天明の時や、天保度の洪水でさへも、何の屁の河童と、幕府は、済まして居た者だよ、又た済まし込で居られるじやないか、なぜならば、幕府が、堤防を拵ゆる方法と、今御上で、堤防を築き上げる方法とは、丸で違ふよ。丸で違ふから、いくら大洪水でも、屁でもないのに、僅か少の放尿位に、手も足も、出ないとは何事か。

幕府が、河川の堤防を拵ゆるには、其堤防の基脚に、注意したものだ。それだから、地下を深く、五丈も六丈も掘りて、それから力を籠めて、かためてくるのだ。さうして、段々堅く積立て、来て、いよ／＼外に現れて見える様な處迄来ると、よろしいか、もう唯泥土位で積んで、さうして其上に、柳を植ゑたのだ。それだから、寔に見掛は悪いけれども、丈夫の事は、どんな大洪水でも、安心して居られたものだ、よろしいか。

拵へ方計りでない、未だ此外に、澤山の用意があるんだ。先づ利根川に就て、一寸言つて見れば、水際に堤防があるだらう。其堤防の内に、田畑を拵へて、其次に、又々大きな、最も手堅い、堤防を拵へたものだ。堤防と、堤防の間にある、田畑は、何の爲めかと云へば、これには仔細がある。見なさい。萬一にも、第一の堤防の内、何處か決潰した時には、此扱まれた田畑が、水勢を分岐して、第二の流水となるから、更に第二の大堤防は、どんな洪水でも、平氣で居れる譯にしたものだ。

それだから、幕府は、二個の堤防間に挟まれたる田地は、土地の百姓に、唯取にて、作らせてあつたものだ。此百姓等は、倘し洪水などで、第一の堤防がきれた時には、折角、丹精して造り立てた、五穀は、水の爲めにめちやく／＼にして、遣られるから、出水の時などは、各村が、一生懸命になつて晝も夜も寝ずに、是れを防いだものだ。其上で、何處か一方口の破れた時には、他の方面を受持つて居る者等が、總掛になつて、喰ひ留めたものだ。

倘も是れを喰ひ留めない時は、破れたる處より、下層にある田畑は、一面に水に浸されるから、さあ大變になる。それだから、みんなが、此處へ遣つて来て、一生懸命になつて、喰ひとめたものだ。それをどうだい、御維新後になつてからは、此扱まれた田地へも、細かく繩を入れ、反別を量つて、一々税金を取る様になつた。税金計りではない、堤防を丈夫にする爲めに植ゑてあつた、其柳の樹迄も、みんな切倒してしまつた。實に、困り者じやないか。

まつた、治水の法は、未だ夫れ計りではない。外に、いくらも用意がある。譬へば、河川上流の兩岸には、いろ／＼な草や木を、八重葎の様に、ごちやく／＼に植ゑ込みて、水勢を、一段弱める工夫も、したものだ。

これは、利根川計りではない、日本國中、何處の川の堤防でも、皆かういふ風に、力を籠めて、用意してあつたものだから、どんな洪水にも、枕を高くして、沿岸の人民は、寝て居られたのだ。今で

は、澤山の入費を遣ふてさへも、こんなざまだ。少しの水で、引繰り返される様では、困りまゝつてしまふじやないか。

御維新前は、唯の素人でさへも、こんな丈夫な堤防を拵へたのに、どうだい、今日では、やれ何博士で候の、やれ何技師で候のと云ふ者でなければ、出来ないものと、思ふて居るじやないか。其癖、こんな人等が、澤山の入費を遣ふて、拵へた堤防も、何少し計りの出水に、堤脚を洗はれて、ぶくぶくと、直に壊れてしまふではないか。

己れは、悪口を云ふ譯ではないが、こんな博士とか、技師とか云ふ先生などは、みんな書物を読んだ計りで、肩書があるのみ、書物と仕事とは、丸で違ふものだよ。五年か八年も、書物も讀めば、誰れでも、博士や技師位には、なれるじやないか。夫れだから、困ると云ふのだ、どうだ。

昔、美濃、尾張の治水法は、織田信長が、上手に遣つた。駿河の阿部川は、加藤清正が、堤防を拵へた。信長の方も、清正の方も、孰れも、地下を、六七尺も深く掘りて、地盤から堅めて、築き上げた。それだから、昔は、どんな洪水でも、今の様のざまは、しなかつたのだ。古人の用意は、どうだ、い、恐れ入つたらう。

それだから、己れが言はない事ではない。樹木亂伐の事と、堤防築造の事は、御上でも、餘程、注意しなければなりませんぞと、いつでも言ふて居るのに、災害を、眼の前で見なければ、平氣の平左

衛門で居るから、困るのだ。己れの言ふことは、後ちになると、屹度實事となりて、現れて来るが、不思議じゃないか。不思議と云へば、不思議だが、實は、先きが餘りに、見え過ぎるからだ。今年、六十一年目の雨年だよ。これから雨も降る。風も吹く、雷も鳴る。みんなに、氣をお付けと、言ふてお呉れ。

見附の石垣

お前達に、徳川時代の話を聞かせると、直にけなして、何んだ、あんな舊弊時代と、輕蔑するけれども、是れは、大間違ひだ。

見なさい、どうだい、舊幕の頃は、今の人達に、企ての出来ない、丈夫な堤防を拵へて、水利を計つたではないか。今の奴等は、一言いふて、二言めには、直に學理應用とか何とか、ナマイキなことをヌカスが、何も仕事は、出来ないじゃないか。尾張の野に、堅固な大堤防を拵へた、織田信長でも、駿州阿部川の兩岸へ、丈夫な堤防を拵へた、加藤清正でも、工學士とか、何々博士とか言ふ、免狀は取らない、どうだい。

唯堤防計りじゃない。丸の内へ入る、見附の石垣は、どうだい、何と立派なものじゃないか。己れは見掛がよいから、立派だといふのではない。つまり、見掛のよしあしには、頓着はしないのだ。實に幾百年たつても、大丈夫だから、立派なものではないか、と言ふのだ。

あの見附の石垣を拵へてから、こつちへ幾百年たつたと思ふか。まあ指を攫なへて見なさい。随分舊いじゃないか。どんな大雨にも、大風にも、大地震にも、あの石垣は、たつた一つでも、狂ふて動いたことはない。今の人達の、山師仕事とは、丸で普請が違ふ。昔の人は、今の人のように、人目に見える様な處は、頓着しない。其代りに、誰にも見えない地底へ、いくら力を籠めたか、知れない。昔と今と、違ふ處は此處だよ。

道灌が、お城を拵へてから、城のぐるりは、都合十三の見附を拵へたが、其頃は、まだく、武藏野原時分だから、沼地が、大層多かつた。

丁度、今の八重洲河岸の近所は、實に大層な、深い沼であつた。それだから、今の八重洲河岸の見附を拵へる時なんかといふものは、いくら苦心したか、知れない。此見附の方は、淺野幸長の受持であつて、當時、驍名の高かつた、神田日向が、此八重洲河岸の見附を、拵へたのだ。

當時、日向は、どんなに苦心したか、まあ聞いておくれ。日向も中々、負嫌の男だから、他の見附を、受持て居る、人達に優る、とも劣つてはならないと、精魂を籠めて、漸く拵へ上げた處で、大雨と大水に逢つた處が、もとく沼地の事だから、大丈夫に、地盤を固めた積であつた甲斐もなく、ぶくくくと、地盤から崩れ出して仕舞つた。

さあ、此處が面白い處だ。さすがの負嫌の日向は、幸長に向つて、くやし涙をこぼして申上げた。

『日向は、不肖なものでございますが、どんな軍でも、鳶口一挺あれば、いつでも敵陣を採崩して、人には退を取つた事は、ございませぬのに、此度、仰せ附けられました、八重洲河岸見附の石垣は、水のために採崩されて、残念至極』と、男泣に泣いた。

さうすると、淺野幸長は、兼て負嫌な日向が、残念がるは、尤の事だと思ふて、いろく慰めて、再び日向に命じて、拵へさせた。處が運悪くも、又も崩れたのだ。夫から日向は、命に換へても、拵へるとて、三度目に拵へたのが、今の八重洲河岸見附である。

何處の見附も、みんな手別をして、別々の人が拵へた。夫に此時分は、誰でもみんな、負けない氣性が、張詰て居る時だから、誰でも普請奉行は、他に負けまいとて、一生懸命、夜の眼も眠らずに、遣つたものだ。今の若い者等の、紙の様な薄い氣魂では、逆も出來た事ではない、よろしいか。たしか今の櫻田見附の石垣は、加藤清正が、拵へたと思ふた。何でも、見附を拵へた面々の紋が、みんな其拵へた見附に、刻してあつた筈だが、今はどうしたかしらん。

かういふ譯で、みんなが大張合で、精魂を籠めて、拵へたものだから、幾百年たつても、どんな地震でも、ちつとも障りはない。唯の一つの石でさへ、狂はないのも、理りじやないか、今の人達の天麩羅仕事とは、丸で違ふよ。

何だ、今の人達は、見榮ばつかり繕つて、いか物計りしか、出來ないくせに、やれ學者で候の、や

れ學理上どうのと、ナマイキな事をヌカスけれど、學者も學理も、糸瓜もあつたものぢやない。ほん

とに呆れるよ、どうだい。

お前なんぞは、己の前でこそ、己の話す事を、成程々々と、鹿爪らしく、聽て居るけれども、家へ歸ると、直に、勝の老爺めが、くだらない、舊幕時代の話を聽かせたなど、言ふだらうが、それは、もつての外の不心得だ、よろしいか、どうだい。

外交

今の人達は、やれ外交が面倒だとか、是程、困難な物はないとか、箸の上下に迄、泣面を爲るが、乃公には、此人達の氣が知れない。

まあ、聞きなさい。御維新前に、斯ういふ事が有つた。幕府から、回陽丸を、和蘭に注文した時に、榎本や赤松などを、海軍傳習生として、和蘭に遣はした。丁度、回陽が出來上つて、愈々日本へ回航して來る時分には、此傳習生等も、少しは海軍の様子拵を、知つて來たものだから、回陽を乗廻して、日本へ歸つて來た。

此時、回陽には、和蘭の海軍士官十三名が、日本の海軍御備教師として、乗て來た。さあ是が、幕府外交の、一悶着の種と成つた。何故と云ふに、此時分には、英吉利の海軍士官を、日本御備教師として頼んだものだから、和蘭海軍士官の、未だく日本へ到着しない、ずつと前に、早や日本へ來て

居たのだ。夫だから、和蘭の海軍士官も、英吉利の海軍士官も、大憤りに、双方が憤つたのだ。
先、和蘭の海軍士官は、斯ういふ事を言つて、憤り出した。全體、我々は、和蘭の天子様から、勅命を以て、幕府に備はれて来たものだ。其備はれて来るものにも、只は来ない。日本の海軍を、我々和蘭海軍士官の一手で、教育して貰ひたい、と云ふ御申出でに依りて、来たものである。其を何ぞや、英吉利の海軍士官にも、亦頼む杯とは、實に以ての外の事であると。

夫から、英吉利の海軍士官等も、此事のあるのを聞取りて、亦もや火の手を上げて、大憤りに憤つた。矢張り、憤り立てる、言草は、丁度、和蘭士官等の言ふ事と、同じ意味さ。全體、何の事です、幕府は、我々英吉利海軍士官に、日本の海軍を、一手に教育して呉れと、お頼みが有るからして、遙々、此の絶東迄、遣つて来た者だ。今更に、和蘭海軍士官を備ふて、海軍の事を任せるとは、何の事だと。さあ大變な事が、持上つたと、幕府の外國奉行達は、遼東半島の三國干渉の當時に、伊藤さんや陸奥さんが、大狼狽に狼狽した様に、狼狽して、やれ今日も相談でござる、又今日も相談でござると、毎日々々、相談計りに、日を暮したけれども、薩張、如何して始末を附けて宜いやら、頼と纏りが附かなかつた。

其處で、奉行達より、乃公の處へ、此始末を頼みに来たのだ。乃公は、此時分には、最早、外國語も、やつて居るし、外國人にも、名前が知れて居るし、外國の事情にも、通じて居たから、是非にお頼み申すと、泣附て来たのだ。夫から乃公は、直に、外國奉行の額を鳩めて、相談最中の席へ罷り出た。

皆様方に於て、外國士官の始末を、勝に、お頼みなさる事ならば、一應、申上げねば相成らぬ事が、ムりまする。別儀にも無之けれども、此事一切の全權は、私に、お任せに相成らば、私は、萬事お引受け申して、幕府には少しも、御迷惑に相成らざる様、お取計申して見ましやう。倘し、其様でなく、部分のみお任せありて、談判の進行中に、制肘を受けまます様では、私は、眞平御免を蒙りますと、乃公は、斯う申出た。

其様した處がね、奉行達も、困り切つて居る最中だから、何條、異存を申すべき、即座に、全權を任せて、勝さんに、お頼み申します、と言つたから、乃公は直に、回陽丸に乗り居る、和蘭士官を宥めて、先づ此方より、談判に着手した。和蘭公使をも立會せて、「幕府は、色々の事情がムりまして、折角、皆様、遙々此處迄、来て下さいましたけれども、今の處では、何分、込入た事情も、折重なつて有りますから、皆様を、お頼み申して置く譯合には、相成りません。其代に、皆様方の約束月給三年分を差上げますから、一先、歸國して下さい」と言ひ出したのだ。

全體、此場合では、兎にも角にも、理由なくして、破約することだから、中々八釜敷のは、始めより分つて居る。處でね、乃公の顔に免じて、思つた程、八釜敷い理窟も言はずに、到頭承知して、和

蘭海軍士官は、一同歸國する事と成つた。其處で、乃公は、氣轉を利かして、和蘭士官を、築地の旅館へ、連れて来て、金千兩を、酒肴料として、呉れて遣つた。其様した處が、大層乃公に、お禮を言ふて、歸國してしまつた。

夫から、此談判の落着を見て、今度は、英吉利の方へ懸合をして、甘く遣附けた。此事件を片附ける爲めに、乃公は、早馬にて、三日の間、横濱へ通ふたよ。此頃の英吉利公使は、パークスであつた。今のサトウは、其頃の書記生だ。

其様いふ風に、乃公は古くから、外國人に名前が知れて居るから、名前のある外客が、日本へ来る時は、其小供等迄も、勝さんの處へ寄つて見ようとて、乃公を、尋ねて来る。乃公は、日本では、餘り名前が知れないけれども、西洋には、随分、鳴響て居るのだ。どうだい、お前達が、生意氣な事を言つても、いけないぞ。

遼東半島の彼の態は、まあどうだい。早くから乃公は、注意して遣つたのに、乃公の言ふ事を聞かないものだから、前より知れ切つた、馬鹿な目に逢ふのだ。外交が六ヶ敷杯とは、呆れ返る。乃公は是迄、色々な目に、出逢て見たが、遼東半島の三國干渉位は、朝飯前の事だ。

乃公は近頃、身體が丈夫になるに附けて、耳も聞えて来たから、憤りたくて堪まらない事が多い。情實

情實の間に生じたるものは、情實の爲に敗れる、と云ふことは、極つた事じやないか。今の内閣を拵へる人達は、餘程、此邊を考へて呉れなければ、いけないじやないか。繰返し、情實の相撲取を爲す様では、寔に天下國家の爲に、相濟まぬ事だ。斯ういふ情實の間を踏切て、物の見事に、遣りて除けるのは、左様さな、まあ、大久保利通だらうよ、大久保の他には有るまい。

だがね、大久保と云ふ男は、餘り功名を急ぐ缺點が有るから、折々遣害いがあつたけれど、彼の男の様に、思切た果斷に富だ者は、まあ珍しい。夫だから、情實の相撲取をする、今の世の中には、ああいふ男が、是非とも入用だ。

意地強き執着力

大事を爲すには、壽命が長くなくては、いけない。見なさい。乃公はもう、七十六に成るけれど、未だびんくとして壯健だ。四十年前の事は、何でも記憶して居る。夫に人間は、意地強き、執着力が肝要だ。意地強き、此の執着力が無ければ、天下の事は、何事も出来ないものだ。

何事に拘らず、見込を立て、一度遣つて見やうと決心した時は、猛然として奮ひ起り、前後左右上下十方の障害物は、鐵脚で踏散らす、大勇が無くては、申々成功するものではない。

膽力、智力、勇氣、精力

人間は、屢々逆境に陥りて鍛練しなければ、確然した人間には、成れないものだ。結局、斯うい

ふ逆境の間で、練上げた膽力、智力、勇氣が、一代の事業を、成効する處の血液と云ふものだ。能く人は、膽力がどうだの、魂氣がどうだのと言ふけれど、是は矢張、面々其の人の天分に由るものだ。けれど、自分が平生、心懸けて修養さへすれば、如何とも成るものだ。夫だから、己はもう是丈しか延びないと、自分で諦める者は、唯夫れだけで、固まつて仕舞ふけれども、更に己は猶ほ澤山に、延びなければ成らぬ、と思ふて修養すれば、人間の朽果つる迄延びるのが、天分と云ふものだ。どうだい、徂徠でも、白石でも、彼等が若い時分には、皆田舎で、大根の尾や、甘藷の蔓を嚙つて生長したじやないか。其逆境時代に苦心して、思はず知らず、練上げた精力が、徂徠でも、白石でも結局は、彼等の一代に、事業を成効せしめた、血液と成つた譯であるのだ。

昔正成が、一萬に足りない、小勢を以て、千窟城に楯籠つた時は、どうだい、關東十萬の軍を、長らく悩ましたではないか。勿論、正成の智謀には、相違はないが、結局、楠勢が、大層強がつたからの事だ。強くなつては、幾ら正成でも、さうは行かないものだ。其後はどうしたい、天下に武名を誇つた關東武者も、三河武士を威張らせなければならぬ様に、成つて仕舞つたじやないか。是はどういふ譯かと云ふに、林訥粗野で、さうして、鬚面毛脛なる、關東武士の特色を、絹布の長袖に、包む様に成つたからの事だ。所謂、世界を一統したと云ふ、羅馬の花の都も、一朝、蠻族ガウルの鐵蹄に踏荒されて、落花狼藉の影を、曠く羅馬の衰亡史に止めた、と同じ事だ。夫れだから、今の若いお前達は、常に斯ういふ歴史の變遷を、考へなければいけない。

一一一

時事有感

維歲癸丑夏六月。聯邦裝レ舶來ニ海涘。馱舌曉啼天色昏。破レ長夜夢ニ群動起。金鞭躍レ馬塵迸飛。欲レ發不レ發千弩矢。回レ船闖入金澤岬。投レ錘直測東流水。全權彼理唱ニ國命。帷幄屏レ人附ニ雙鯉。云我聯邦三十六。舉レ賢任レ能民樂只。守レ株覬レ兎人所レ嗤。時勢變移須ニ審諦。颶風覆レ船年又年。到レ岸其奈レ受ニ鞭捶。同是乾坤覆載民。貴邦何視比ニ犬豕。願待ニ再來ニ聞ニ報答。轉レ輪忽失飛鳥駛。自レ海内急ニ邊警。柳營上書堆ニ萬紙。策出ニ萬全ニ奈レ彼何。和戰異議勞ニ唇齒。景山老公傀奇質。啣レ命塞々定ニ國是。尊レ皇斥レ夷議一發。肺肝誰知存ニ遠旨。秋風又送ニ魯西船。彼云邊陲接ニ隣比。比隣交盟勿ニ輕忽。東入ニ蝦夷ニ乞ニ究端。時發ニ大喪ニ上下哀。九澤傳レ書涕泗裏。白虹橫レ天吉邪凶。築レ壘鑄レ礮練ニ兵技。獨披ニ忠肝ニ福山相。未レ見蕭牆生ニ荊杞。洗汚布新世所レ稱。喜向ニ雲霄ニ無ニ僣佞。烏兔勿々不ニ期年。米使促レ報金灣巖。都下靜肅不レ如レ昨。萬化轉機方寸七。妙語解レ怒無ニ人知。約成去向ニ豆州鄙。一時苟安非ニ完好。况復米使遭ニ彈指。秋來英吉利入ニ瓊浦。頻向ニ我邦ニ欲レ容レ韃。此時西歐相吞噬。英佛就レ中最雄偉。初月旗又雙鷺旌。飛礮轟レ地驚ニ驥。電機傳レ信呼吸間。鐵艦如

山連嶠崎。邦人至此動忘憂。廟廊空鎖招諫匾。鋒鏑鑄砲出宸斷。衆口鑠金事遂止。人云關西眞豪傑。慧眼爛口島津氏。眷々委質本爲國。至誠誓欲保天紀。斗帳只憂缺儲嗣。一是一非論彼此。侘年釁隙生此間。勿惑天授眞臺壘。若早令有定儲君。紛々群疑不駭耳。和蘭貢艦號觀光。我邦千秋海軍趾。微臣充撰講此技。爲師者誰伯爾子。五年留學無所得。屠龍術拙愧此仇。初發江都乙卯年。風濤撼船進透迤。東顧扶桑萬里遙。何圖大震報變徵。宮殿第宅與茅屋。累倒橫地共危墜。天道本是無公私。福禍如斯不足恃。邦家大勢果如何。壅塞難除日解弛。佐倉爲相人屬目。老公枕々歎短晷。豈料警策功未竟。可痛福山相遽死。政綱紊亂追日甚。漸覺衰兆逼眼底。米使登營傲朝鮮。論客底事唱國耻。物議愈噪關以西。使命不復達丹宸。後相辭職反掌間。茫々槐陰南柯蟻。百萬黔首無所歸。誰以丹心鑑藏否。近江主侯拜元老。天下咸期清渣滓。大統迎駕奉遺言。何人漫欲窺玉筮。治國唯當重公明。撫御藩翰何用詭。可惜秘籌甘細節。遠尋小逕追野雉。幕中之賓養野狐。假將虎威恣驕侈。鴨東名妓多傾國。妖冶丰姿獻嫵媚。嘯月戲花琵琶湖。遊俠遺風不顧禮。知否鯖江思慮陋。風流徒欲學紈綺。崔鴛魏鴛相追隨。宮中忽變襟裙裾。大常樂散夜悄然。簾前切挑深宮妣。一朝戒惰雖令出。闕外亦同我牀第。多情不免一世悔。滅却名分汚青史。堪歎元老膽識小。小信疑誤諾唯。終見不能奉宸慮。自負橫流失其美。訛言百出多怨望。佞巧乘機恣舌揚。風聲黯澹承明殿。陰蟲

亂咽凋蘭芷。丹楓未落竹葉枯。黨人之禍多疑似。刺々招禍江東下。江東元是君家壘。此際豈無開濟手。至誠通神超衆裡。誰令有司輕黜陟。公私混淆已哉矣。一獄未了又一獄。處士冤憤徹骨髓。血灑朝衣三月雪。哀痛無人救虎兕。世間輕耳却重目。百年公評由天視。微臣此時滯聯邦。五月歸來聽終始。聽了審察大勢遷。熒惑且天泣忠士。群小跋扈日紛噪。鬱氣蓬勃倒冠履。同胞吞嚙眞可憐。局促徒勿失範軌。

讀野史有感

憶昔承久元龜間。時事壞爛多難肋。雲霧蝕日黯無光。天子蒙塵空踟躕。狐啼宮闈艸侵階。鐘鼎無人講典則。庸臣相望奈禍胎。大廈傾危乏扶翼。風雲帳下起蟄龍。楠氏提劍起拜勅。大義先破嗟闕車。靖難籌謀存胸臆。若非此公張皇基。海內何日啓壅塞。只奈廟廊陰雲蔓。掣肘忌機如掃軾。眷眷尙思海岳思。裏戶金革湊川北。死時廷尉雖官微。千秋高節垂八極。前有藤公後小楠。忠孝前後護社稷。饒舌如何傾衆聽。窮途茫茫塵垢蝕。春榮秋枯浮雲過。龍駕所幸困荊棘。南山傷思古鄉路。陽和融雪消不得。櫻樹不知人間憂。開落關情歸思逼。將軍營中巧商量。恣事羅飾譎詐力。奉皇自誑控伺。可憐骨肉相剝食。更疑甘爲梁所欺。重弊乞封殊辱國。金閣經營非不美。佞狎阿意誤黜陟。自以此海內益分裂。割據蓄兵空剛克。堪歎蒼生無

所歸。王綱解紐失繩墨。右府崛起勦群雄。烈々餘怒尙未熄。可憐壯圖跌半途。當時豪傑無不惑。豐公元是一匹夫。神機所發誰能測。叱咤捲風勢拔山。眼中不見百萬敵。睥睨寰宇膽如斗。小心翼翼奉天職。更有達人尙名節。高義家寧有反側。尋舊如昨不可追。志遡千古倍鬱鬱。抑荏苒流光感易生。此感畢竟無人識。憑軒只見蒼烟橫。晚風吹鴉群籟息。忽忘青松霜後操。千秋之下仰謙德。

蟄居中記所感

慶應乙丑十月八日、某氏來訪。具告都下之風評。初聞而相疑。既而拜其書也。愕然不知所措。又此重事。非成於成之日。蓋必有其因矣。頃都下唱太平無事者。比々皆是。京師之間亦同焉。而突然有此事。曷堪怪訝。澆季之世。言路壅塞極矣。吾人雖賤。於奕世之恩。何有厚薄。雖害不見用而蟄居。豈可緘默而止乎。古人曰。蓋棺論定矣。今也不要他言也。及拜其書。遺恨充塞胸間。既而大息曰。嗚呼邦內紛擾。五六年于茲。然上意下徹。庶民不敢私議君上。蓋人心之靈。有不言之而感通者。仰望富貴權榮。人心之所向也。況於天下之威福乎。而棄之如弊屣。無他。英旨唯在邦家之安危耳。嗚呼爲臣子者。奉體此意。則中興之大業。或有成矣。而浮雲蔽明月。上意竟不能貫徹。何堪遺憾。感慨之餘聊記之。

慶應二乙丑十月十二日夜

臣 義 邦

上野廣小路なる松源樓座敷新築落成を祝ひて

咲にほふ上野の花は朝夕に、見れどもあかず葉ざくらに、たもとすゞしき忍ばずの、いけの蓮の蔭清き、露のしら玉ほどもなく、霜とぞかはるとしの矢の、はやまのまゆみいろづきて、ひま行くこまのあがきさへ、かくぞありけるいつしかと、朝しるたへに大江戸の、大路の塵も雪つみて、たゞずやあらむ寒風に、とる盃のめぐるまに、ながめも酔もいやましぬ、ときはの松のみなもと、たゞへる爰のたかどのは、千代にやちよとことほぎて、老もわかきもはや酔ひにけりいにし戊辰の春、我、敵味方の亂射に逢ふて、しばし此家に立入りし事もありき。あるじの婦はふるき知る人になむ、此せちからき世に、家の風ふき起しぬるは、丈夫も、おさく及ばざるのはたらき者といはむも、空響にはあらずかし。

▲痴遊曰く、松源の名、今は知る人少なし。先生の遺文をよみて、感無量。丸万の魚すきに舌鼓をうつ、若き人々よ、此遺文をよみて、往時をしのびたまへ。

濁り江を 所得顔に すむ魚は きよき流れを いとふなるらむ

われ勝に おのが門田へ ひく水の 其みなもとは かれやしぬらむ
 かしまじと 眞柴おり添へ たく蚊火の むせぶ計りを 思ひでにして
 いとはやも 大空わたる 年の矢の 今宵最中の 弓張の月
 筏師よ こゝろしてさせ とる棹の みじかればぞ 下りがちなる

梅のひと枝

花の色清きに、其香のかぐはしき、又たぐひあらじ。之に打向ひて、心のよしなきこと言出るぞ、可笑くあはれに覺ゆる。花やもし靈あらば、人の世の愚かしき、いかで斯くと笑ひなむ。是を思へば、いとく耻かしくこそ。

荒れ果てし 昔の庭に すむ月を 獨り友とや 薫る梅が香
 人の世の 下るに染で 雪の中に 咲出初し 梅のはつ花
 月のみぞ 夜な／＼すめる 梅の花 あはれむかしの 宿は荒しを
 月すみて 梅薫る夜は 大江戸の 大路の塵も たゞずやはあるらむ
 かむばしき 名をとゞむべき 人は誰ぞ 花は昔の 香に薫へども
 時ぞとて 咲出初し 梅の花 くだりゆく世の すがたあらじな

植初し 主人は誰や 古へを 忍ぶ袂に 梅かほるなり
 住み捨て、古にしあとを 来て見れば 軒端の梅は 春を忘れぬ
 あながちに 厭ふにあらで 塵もなし 清くも薫る 梅の初花
 時來れば 雪の中にも 咲出で かほれる花を 誰にたとへむ
 世の塵も 清きに染みて 跡もなし 豊かに薫る 園の梅が香
 時ぞとて おどろの中に 咲く梅の 清きは人の 心にも似ず
 夜る光る 玉にたとへむ 梅の花 あやなき闇も 香やはかゞるゝ
 人の世の 覺束なきに 似ざりけり 野末の梅の 雪にかほれる
 むめさきて 三日四日たちぬ いざやけふ 行きて尋ねん 雨に濡るとも
 ますら雄の かざしにせばや 梅の花 ゆきの中にも 咲てかほれる
 打寝ぬる 夕の夢も かほるらむ ねやの軒端に 香ふ梅が香
 さきいづる 我が草の家の 梅の花 ちりに汚れし 面影もなし

櫻花の吟

思ひなく 花見る折は 一とせの 樂しと思ふ 日數なるらむ
 宵の雨の 晴れし朝氣の 長閑けさに 綻び初めし 山櫻かな

山ざくら 花にたとへし 益荒雄の 末は薪と なりて果なむ
 さくら咲く 日敷の程は 雨風も 心あれやと 思ひこそすれ
 人知らぬ 心の中の わびしさも 花の下には 消えやしぬらむ
 いたづらに 咲きて散るらむ 山ざくら 都に耻ぬ 色香なれども
 いつの間に 残れる雪は 消えぬらむ 今朝より櫻 咲き出にけり
 咲くを待つ 程の日敷は 長けれど 早散初る 山ざくらかな
 天さかる 鄙に咲けども 山ざくら 雲井もおなじ 色香なりけり
 思ひきや 斯く永らへて 今年また 忍ぶの岡の 花を見むとは
 上野懷舊
 飛ちがふ たまの響きに 散る花を 袖にうけしも 昔なりけり

終焉之記

甲申のとし、神無月、某に訪はれ、そのたかどのに飲む。歡をたすくる校書數輩、老たる、若
 き、とりく興をそふ。皆酔びれぬ。某校書いたく酔ひ、しばし我に語る、はなはだ興あり。
 且、才あり、辯あり、我が心にかない、醉に乗じて、處世の要を述べ、また我が身の上を評し、語

云、凡、人の世に處する、微を知り、機を察するを以て、要とすべし。ゆるに、官に居ては、猛き
 薩摩人、智ある秋人と、友交し、官を去れば、縦横雄辯、かの蒙昧を導き、英士を友とし、俊物
 従ふこと雲の如く、雷名四方に轟き、其學や深く、其智や測るべからず、此ぞこの世のすぐれ人な
 らじ、君一もこれに處するや、いまだ見きく處あらざる也。君これをして、なさざるは智の乏しき
 にあり、出て仕へざるは、能のなき也。君よく其心にとひ、己れを詳にし賜はで、上の司、憐
 みをたれ、議官の末にや入り賜はむ、是もまた、世に處するの道ぞかし。然るを察し賜はず、空々
 寂々、一生をすぎ賜はむとせば、今より後は、世ますますからく成行き、一飯の口を養ふも、いと
 かたかるべきをや。

己れ君のみ名を聞くこと久敷、目に見奉るは、けふぞ初なり。酔て申すにはあらず、腹たち賜ふ
 なよ、我がつゝみなく告るをき、賜へ。我は、や、よそぢを過ぎ、いそ路ちかし。ゆるに、すぎし
 越かたをも見つる也。いにし戊辰の初、官軍のあづまに下る、君、萬の事、其主に任せられ賜ふと
 聞き、此府下は申途もなし、東西のつはもの、唯君あるを知り、如何に猛くやあらむ、いかに智や
 おはすらむと、かたきも見、また頼敷思ふ方多かりし。君が成賜ふ處、唯何といふ、わいためなく、
 おほしきことも、なし賜はず、かなたに頭つき、こなたに膝つき、人に使はれ賜ふて、よひるのわ
 いためなく、空敷はしり廻り、見苦敷ぞ、にがく敷計ぞ、人も見、はたいふなる。果は官兵に

疑はれ、味方にいまれ、やみうちに逢ひしも幾度ぞ。いかに逆れ、遁れ賜ひしや、幸に殺され賜はぬぞ、よしとやいはめ、あしとやせむ。いくほどなく、世や、おだやぎた事に、ひと度は、いかめしき官に昇り賜ひし、と聞しに、君が才なく能なきを、人々知賜ひ、忽ちに追退けられ賜ひしと聞ゆ。いかに悔しと、思ひ賜ふらむと、蔭ながら、人に聞くに、君唯笑て、心あるか、心無きや、更に其分ち、わからずと、人も罵りたりし。

君が下司の輩は、今、位いや高く、出るに馬くるま、その意氣雲のごと成るを、君今老さらばい獨りあゆみ、此うら寒き空に、膚寒げに、頭に雪をいたゞき、人の笑そしるも、空吹風のごと、見賜ふは、いかなるみこころぞや。我おもふ、またく、其主の仰、君が力にすぎ、其任の重きに、堪へ賜はざりけむ。今、事去り、獨り世に立賜ふに及で、狐のはなれし人のごと、なりやし賜ひけむ。いかに怪敷、きはみ也けり。聞く、君今、むそ路を越賜ふと。ますく老朽賜ふらむ。今より世にたち、交らひ賜はず、冬は火桶を友とし、夏は木蔭に冷、いくばくもあらぬ齡を、事なく過ぎ賜ふぞ。君が一生のさちならめ。我、君をあしさまに、云ふにあらず、同敷此江戸の生れにあるなれば、憚らず申なり。かまへて、わが諫に、より賜ひてよと。

我、此批評を聞き、閉目、今古を思へば、實に頭上の一針、亦我が終焉の詳傳、これより他ならず、かつは淨玻璃鏡前の口供ならめとおもふに南無。

甲申神無月末 勝海舟誌

少壯時代

男谷家と、勝家とは、共に三河以來の、純な幕臣であるから、その系譜の如きも、ハツキリして居るが、檢校になつて、男谷姓を、名乗つた人は、越後の小千谷から、出て来た、といふだけの事で、其以外の詳しい事は、少しも判らぬ。

此檢校が、海舟の曾祖父に當り、一種の人物であつたから、長男を、男谷家へ養子として、自分も、男谷姓を、名乗つたのである。従つて、檢校に就ては、其以上、語るべき事はなく、檢校として、身を起してからは、後世に傳ふべき、多少の物語はある。

初め、小千谷から、出て来て、江戸に落付き、適當の職業を、見付けようとしたのだが、生れつきの盲目でもあり、頼るべき知己もないので、如何ともする事が、出来なかつた。

そこで、毎日のやうに、町を歩いて、職業を漁りに、苦心はして居たが、國を出る時から、懷裡に

は、三百文ばかりの端た錢が、有つただけの事であるから、如何に、物價の廉い頃とはいへ、その位の資本では、碌な商賣を、爲し得る譯もなく、殊には、盲目の身であるから、餘程の辛棒と、極端な儉約をしなければ、何等かの職業を、見付け出す迄に、一文無しになる恐れがある。

道中筋も、やつて来たのだらうが、江戸へ着いてからも、按摩をして居たのである。これといふて、泊るべき家もなく、安宿へ泊るとしても、一と晩泊れば、それだけに、錢が減る譯であるから、いろいろと、考へた末、どこといふて、所を選ばず、行き當りばつたりで、空屋さへあれば、それへ泊る事にした。

空屋へ、寝て居れば、屋根代を、取られないのであるから、錢の方へ響きがなく、少し空腹のさへ、忍耐をすれば、三食のところを、二食で済まし、時に依つては、一食で忍耐することもある。

空屋へ、寝て居るのであるから、夜具や布団はなく、藁か莫産を敷いて、ごろ寝をやつて居たに違ひない。食事は、行く先々の飯屋で、済まして居るから、煮炊きの世話はなかつた。

夏の間は、それでも済むが、冬になれば、さういふ譯にもならず、さればとて、宿屋へ泊る事は、尙更、むづかしいのであるから、やはり、空屋へ、寝る外はなかつた。

斯ういふ譯で、半年餘りを、過すうちに、寒い冬の日が、廻つて来た。さうなると、今迄のやうに一枚の莫産や、少しばかりの藁では、夜の寒さが、凌げる譯がなく、流石に、忍耐強い小僧でも、これだけには、餘程弱つたらしい。

雪の降る或夜の事であつた。國に居る時から、持病になつて居た、癩に取りつめられて、苦しむ乍らも、杖を頼りに、身に迫る寒さを堪えつゝ、歩いて居たが、そのうちに、癩の痞かひどくなつて、今は堪へ切れず降り積つた雪の中に、バツタリ倒れて、何時か知らず、氣が遠くなつてしまつた。

高癖つゞきの、大きい屋敷で、立派な冠木門がある。此家の主人が、幕府の典醫、石坂宗哲といふ人であつた。

少し時間が経つてから、門番の甚兵衛が、酒を買ひに出よう、として、小僧の行倒れを見付けて、それから、内弟子の書生までが、飛出して来て、門番小屋へ擔ぎ込み、親切に、手當を加へたから、やうやくにして、呼吸を吹き返した。

正氣付いたのを見て、いろ／＼と聞いて、見たら、

「越後の小千谷から、稼ぎに出て来たのであるが、頼るべき人もなく、流しの按摩を、やつて居るうちに、今晚の事になつたのである」

と、いふのであつたから、

「お前が泊つて居る家は、どこであるか」

と、問ひ返したら、

『泊る家は、無いのだ』

といはれて、これには、門番も、大に困つたが、兎に角、其晩は、泊めてやる事にした。翌朝になつて、主人の宗哲が、それを聞いたから、門番と共に、小僧を呼んで、仔細を聞いて見た。小僧は、少しの繕ひもなく、有の儘を打明けた。宗哲は、慈悲深い人であつたから、ひどく同情して、其儘に、門番小屋に、置いてくれる事になつた。

これで、泊る所と、三度の食事だけが、安定した譯である。夜になると、按摩を流して歩くから、何日の間にか、得意も出来て、少しづつ、は蓄へも、殖へて行く。勵みがつくから、一生懸命になつて、稼ぎ始めた。

宗哲の家には、一六の日に、病人が、通つて来る。お城勤めの典醫は、町の病人を、診ぬことになつて居るが、名醫といはれる人には、誰にしても、診て貰ひたいから、人傳を以て、頼みに来る。それには否といへず、診てもやれば、薬も投ずる。幕府の方でも、それだけは、大目に見て居た。

どうせ、貧乏人はなく、診て貰ひに来るものは、旗本の隠居とか、大家の主人、時には、大名の重臣などが、やつて来るから、供待の部屋では、大勢の折助が、集まつて居て、飯より好きな、手慰みに、時を送るのが、常例の如く、なつて居た。

そのうちに、盲目の小僧は、その部屋へも、這入つて来て、賭博を打つ者へ、幾らかづつ、資本を貸してやる。巧く目が出て、勝味になつた者は、幾何かの利子を附けて、資本を返す。小僧は、之に味を占めて、一六の日には、必ず部屋に来て、それを繰返して居た。

肉眼は見へずとも、心眼は、確かであつた。負け込んで、資本をねだる者があつても、自分の勘で、氣に容らぬものには、何といふても、貸してやらぬ。見込みをつけて、貸してやる者は、必ず勝つ。従つて、自分の収入もよい、といふ譯で、小僧の貯蓄は、一日増に、殖へて行く。

其事を、宗哲が聞いて、小僧を呼付けた。

『お前は、供待の部屋へ入つて、手慰みの資本を貸す、といふ事であるが、それは宜しくない。病人のお供が、さういふ事をして居る、といふのは、良くない事ではあるが、制し切れないから、據所なく、見て見ぬ振をして居る譯で、そこへ、お前が出て行つて、たとへ僅にもせよ、資本の融通をして、利分を取つて居る、といふ事が、世間へ聞えらると、わしが迷惑をする。然し、お前が、それを止められたら、困る事でもあらうから、お前の儲けた上へ、幾らか、足し前をしてあげるから、それを資本に、何か商賣を、始めたらよからう』

と、斯ういふ風に、道理を分けて、話されて見れば、今更に面目が悪く、小僧は只管、詫び入るのであつた。

斯ういふ譯で、部屋へは、出入しなくなつたが、眞面目な、小金貸を始め、それが巧く、當つて、

幾何もなく、一戸を構へ、それから、段々仕上げて、大きい身代を作り上げたのである。

檢校の株を買つて、人に知られるやうになつた時は、長者番付に載つて、江戸市中に、大きい地所を、十七ヶ所も有つ、といふ程になり、小梅の水戸邸には、一手に、御用を勤めて、數十萬兩の貸金をして居た、といふのだから、大したものである。

子供は、九人もあつて、それ／＼に、財産を分け、多くは武家にした。長男は、男谷家へ入つて、下總守と任官し、將軍の指南番として、一般には、劍聖として仰がれ、島田虎之助の如き、劍客でさへ、其門に入つて、恥としなかつた程である。

一一

檢校に關する、いろ／＼の逸話がある、その中の一つ二つを、述べて見よう。

金貸はして居ても、無理はしなかつたらしい。借方から怨まれて、仇をされた、といふ事聞かず餘り公事訴訟にも、携つて居らぬから、よほど上手に、やつて居たに違ひない。

晩年に近く、面白い事を、やつて居た。木綿の黒紋付に、小倉の袴を添へて、附近の貧しい人へ、毎日の如く、一着づゝを、贈つて居た。

人間は、どういふ機みで、出世をするかも知れず、又、如何なる事で、公の席へ、出る事がないと

も言へぬ。さういふ時に、禮服の一着ぐらゐるは、用意して置かぬと、義理を缺く事にもならうから……』

と言つて、幾何かの金を附けて、送り届けるから、貰つた人は、どれ程喜んだか知れぬ。

自分は、大きい身代になつたが、何時も、木綿の紋付であつた。新しく仕立たのを、一日着てから皺を延して、翌日は、人に與へる。それを死ぬ迄つゞけた、といふのだから、實に、感心なものである。

病氣になつて、醫者が見放してから、貸金の臺帳を、焼いてしまつた。

「臺帳があると、子供等が、其金を欲しくなる。相手の出やうに依れば、慘い事もしよう。わしは、長い間、金貸をして居たが、人から怨まれるやうな事は、一度もして居らぬ。子供等には、それぞれに、手當もしてあるから、それ以上に、金の要るべき筈はなく、金貸といふやうな稼業は、二代つゞけて爲すべきものではない」

斯ういふて、貸金證文は、名前と印形を切抜き、借主を呼んで、安心させてやつた。斯ういふ心掛であつたから、生前に怨みを受けず、死後に、慕はれたものであらう。

三男の平藏は、幕臣の勝家へ、養子に入つたが、持參金は、三萬兩であつた、といふから、其頃の

こととして、大したものである。

徳川の時代には、本格的な武士で、一家を成して居る者が、相續すべき、一子を有するため場合、その家長が死ねば、家は、断絶されることに、なつて居たのだ。

それであるから、いよく子供がない、となれば、豫め養子を容れて、相續權を、留保して置くのが、通例に、なつて居た。

最初は、家格に應じて、相當のものでなければ、養子には成れず、假に、養子をして、親類縁者でなければ、許さない事に、なつて居たのであるが、長く、太平がつゞいて、士道も紊れ、さうした制限も、追々に、崩れて来て、末期養子といふ事が、行はれるやうになつた。

末期養子とは、どういふ性質のものか、と云へば、家長が、死に臨んで、養子を迎へる、それを指して、末期養子と、いふたのである。

日本の家族制度は、家名を以つて、第一としてあつたから、養子を迎へて、家名の存續を謀るのは、武士の家でなくとも、一般の町家でも、同じ事であつた。

厳格な制度に、拘束されて居た、武家に於てすら、苦し紛れの末期養子などといふ、變な方法が、許されるやうになつたから、其後は、養子の取扱ひも、極めて樂になり、若いうちから、養子すること、大目に見られるやうになつた。

其間に、持參金の多寡に依り、養子するといふ、悪弊も、起つて来た。甚だしきに至つては、親よりも、養子の方が、年の上なのさへあるやうになつた。

然し、幕府への届出は、假令幾つでも、年下の届にして、形式だけは整へたのであるが、要するに武家の格を、賣買するやうになつたのだから、士道の頹廢は、此一事を以ても、知る事が出来る。

平藏は、大金を持つて、養子に來たのであるから、極めて小祿の勝家も、其頃には、深川の油堀に大きな屋敷を構へて、贅澤な生活をして居た。

油堀から、本所の龜澤町へ移つて、俵の小吉に、嫁を迎へた。其間に生れたのが、麟太郎であつて小吉は、後の左衛門太郎であるが、麟太郎は、義邦といひ、後に、安芳と改めたが、本篇の主人公、勝安房は、即ち其人である。

勝の家は、三河以來の武人で、初めは、榊原小平太に使はれ、僅に、四十石ばかりを、與へられて居たのだから、大したものではなかつた。

一俵の立米が、假に八圓として、八百圓となる。それを月割にすれば、六十幾圓であるから、家族の五人もあれば、今の時代でも、其中の幾人かは、干物になる外はない。

さういふ貧しい武家へ、三萬兩の持參金といふのだから、實際からいへば、勝家を、買収したのである、とも云へる。

平藏は、厳格な人であつたが、小吉は、放縦な性質で、小供の時分から、腕白もひどかつたが、金遣ひも荒く、その行ひは、頗る荒々しくて、屋敷の者が、持餘したばかりでなく、悪戯のために、近所の者から、尻を持込まれた事さへ、少なからずあつた。

二十歳に近くなつて、放蕩を覺へ、仲間の青年や、年上の者から、煽て上げられて、親の金を持出すばかりでなく、偽判で、扶持米の先取りを、やつた事さへある。

家出をして、伊勢参りに行つたのは、十五六歳の頃であるが、途中で、旅費がなくなり、乞食の姿になつて、いろく苦勞した事もある。

屋敷へ、歸つて來てからも、放蕩は止まず、亂暴は働く。附近の破落戸を集めて、盛り場を荒し歩いたり、徒黨を組んで、喧嘩を始めたり、その縮尻の始末は、平藏が、つけて居たのだ。

さういふ譯で、二十一歳の時、座敷牢へ入れられ、二十四歳まで、究命させられた。麟太郎は、文政六年の正月生れだから、丁度、父の小吉が、座敷牢に居る時、生れた事になる。

小吉は、座敷牢の生活で、幾分か、性質も變り、家長として、勝家の當主にされたのであるが、父の平藏に向つて、

「私も、長い間、亂暴な生活をして、御心配をかけ、洵に相済まぬことであつた。就ては、麟太郎に家督を譲つて、隠居をしたい、と思ふが、どうでせうか」

と、言ひ出した時、平藏は、

「お前が、今迄の行狀を、自分から、悪かつたと思ふなら、自ら戒めて、これから先の行狀を正しくし、一應は、勝家の主人らしい所も、人に見せるのでなければ、勝家に對しても、よろしくあるまい」と言はれて、小吉も、其氣になり、これから、仕官の運動を始めた。

仕官をするにしても、自分は、小普請入であつたから、上席に居る、支配役の四人へ、袖の下を、送る必要があり、其上に、組頭が居るのだから、それにも、贈賄しなければならぬ。

小普請入で居れば、生涯、遊んで居てもよいのだが、役に就くとなれば、身邊を飾る必要もあり、交際費も要る。隠居して居る、父に、此事を話して、相談はして見たが、父は、出金の求めに應じなかつた。

此時に、屋敷の一部を抵當にして、多少の金を作り、熱心に、仕官運動を始めたが、遂に効もなく仕官の目的は外れてしまった。そのうちに、平藏は、死んでしまつたから、もう、金の出所はない譯で、麟太郎に家督を譲つて、自分は、隠居してしまつた。

家督を相續した時、麟太郎の年は、十六歳であつた。家督相續といへば、人聞きはいゝけれど、財産といつては、一文もなく、其代りに、借金は、ウンとあつたのだから、麟太郎の苦しみは、一と通りでなかつた。

劍術は、伯父の男谷下總守から、手解きをして貰ひ、竹刀使ひが、判るやうになつてから、島田虎之助に、教へられたのである。

島田は、豊前中津の人で、十八歳の頃に、九州をひと廻りして、殆んど、無敵といはれた程に、其道の達人であつた。江戸へ出て来てからも、到る所の道場で、仕合は試みたが、頭を下げて、師事する程の相手を、見出し得なかつた。

男谷に會ふてから、初めて師と仰ぎ、それから、淺草の三味線堀に、道場を開いた。男谷を、師に仰いだけれど、實力は、男谷以上であつた、といふのだから、島田の技倆は、大したものであつた。

麟太郎は、二十一歳の時、島田から、免許を授けられたが、それよりも、麟太郎の爲めになつた事は、心膽の練磨であつた。王子の稻荷で、夜明しをしたのは、其頃の事である。

島田は、劍術の達人であつたばかりでなく、世態の傾向に就ても、一見識があつた。麟太郎が、早く蘭學に志したのは、島田の勧めからであつた。長崎から、高島秋帆が出て来て、徳丸ヶ原に於て、西洋式の砲術訓練を試みたのは、天保十二年で

あるから、麟太郎が、十九歳の時であつた。

其頃から、蘭學が、一段と、行はれるやうになり、洋式の訓練は、ますます盛んに、なつて来た。それに對して、頑冥な連中が、反抗運動を起し、鳥居甲斐守などが、その尻押をして、蘭學者を、牢へ打込んだ。

島田は、劍術一方の人ではあつたが、それらの事情を、よく究めて、一時の彈壓は、功を奏すであらうが、却つて、それが爲めに、蘭學の復興が、盛んになる、といふ事を見込んで、それに先鞭をつける者が、最後の勝利者である、と考へたらしい。

そこで、練太郎には、蘭學を修めるやう、頻りに、勸説したのであつた。當時、高野長英が、翻譯書を著して、三兵タチキと名づけ、西洋の兵學を、其道の人に授けた所から、洋式の兵學に、志を有つ、者が多く、なつて来た。

今日、用ゐて居る、佐官尉官等の名稱は、長英の譯語として、残されたものである。又、訓練の場合に、小隊進めとか、或は、氣をつけ、捧げ銃、といったやうな、新しい號令は、秋帆に始まり、江川太郎左衛門に依つて、完成されたのである。

さういふ事を、知つて見ると、あの頃の先覺者が、時の権力者から、ひどい目に遭ひ乍ら、生命がけで、後進者のために、新しい教へを布いてくれたのに對し、甚深の敬意を、拂はなければならぬ。

麟太郎は、箕作玩甫に就いて、蘭學の教へを受けよう、としたら、程のよい事を言はれて、それとなく断られた。つまり、麟太郎の服装が、餘りにひどかつたのと、お土産の束修が、少なかつた爲めであらう。

負じ魂の強い、麟太郎は、箕作を見限つて、次には、筑前の人、永井青涯に就いて、學ぶことになつた。青涯は、本名を、助吉といふて、黒田の藩士であつた。

黒田の邸は、赤坂の田町であるから、本所の龜澤町からは、可成りの道程がある。それにも拘らず毎日の如く、通學を怠らなかつた。

弘化二年、二十三歳の時に、妻帯したのであるから、貧しい最中のことゝて、一家の生計は、一段と苦しくなつた。幸ひな事には、永井が、麟太郎の熱心に、深い同情を有ち、重役等にも紹介して、藩士同様に、邸への出入を、自由にしてくれた。

其頃の事であるが、和蘭の兵書を、古本屋で見付け出し、代價を聞くと、五十兩と言はれ、これには頗る弱つた。五十兩といへば、兎に角、大金なのであるから、自分の手元に無いのは、勿論、それだけの金を纏めるには、容易な事ではなく、さればとて、書物は欲しいし、そこで、四方、八方、飛び廻つたが、どうしても、約束の日迄に、金を整へかねた。そのうちに、書物は、賣れてしまつた、と聞いて、落膽したが、買主が誰であるか、と聞いて見た

ら、四谷の大番町に住んで居る、興力の某といふ事であるから、すぐに其人を訪ねた。

「あなたが、和蘭の兵書をお買ひ求めになつた、といふ事であるが、あれは、私が、買ひ取るつもりで、金策中、あなたに、買はれてしまつたので、洵に、残念に思ふが、もう少しで、金の纏りはつくつもりである。依つて、私へ、お譲り下さる事は出来まいか」

「それは、折角のことであるが、わしも、讀んで見るつもりで、買ひ求めた書物ゆゑ、今更、お譲り申す事は出来ぬ」

「然らば、幾日かの間、拜借をする事は出来まいか」

「其儀は、お断りする」

此問答を、幾たびか繰返したけれど、何としても、承知してくれぬ。そこで、麟太郎は、暫く考へて居たが、

「それでは、斯ういふ事に願へまいか。あなたは、あの書物を讀むとしても、晝間の間であらうから夜分だけを、私に、讀ませて下さらぬか。若しお許しがあるならば、毎晩、通つて参りますが、どうぞ、これだけは、お聞き届けを願ひたい」

「熱心な、お頼みではあるが、自分としても、時間をきめて、讀む譯にはならず、其儀は、平にお断り申したい」

「然し、あなたとしても、晝夜を通じて、お読みになる譯ではあるまい。夜半は、お寝みになるに違ひないから、せめては其時間だけでも、讀ませて貰ひたいが、如何であらうか」

「ハ、ア、わしが、寢て居る間に讀まう、といふのですか」

「さうです」

「而て、御住所は……」

「本所の龜澤町であります」

「えツ、本所の龜澤町といへば、此所までは、二里以上もある。それを夜半に、通つて来る、といはれるのか」

「其通りです」

「よろしい、折角のお頼みゆゑ、その時刻だけならば、お貸し申す。然し、戶外へ持出す事は、御免蒙る」

「其代り、夜中、尊邸に、置いて下さる事は、御承知を願ひたい」

「承知いたしました」

それで、約束が出来たから、麟太郎は、引取つて来た。

興力の方では、あアは言ふやうなものゝ、本所から通つて来るのでは、一日や二日は、格別として

長続きはするものでない、と考へたのであらう。

所が、翌日から、日が暮れると、やつて来る。四ツ刻が過ぎると、家の人は寢て了ふ。麟太郎は、

それから讀み始めるのだ。玄關の次に、狭い座敷があるから、そこを借りる事にした。

かくて麟太郎は、一日として休まず、約六ヶ月に亘つて、通ひとほした。此熱心には、遠がの興力

も頗る感心した。

「あなたに、お伺ひしたい事がある」

「どういふ事か」

「拜借の書物に、斯ういふ所がある。それは、どういふ風に、解釋したらよいか、お教へを願ひたい」

と言つて、不審の箇所を示した。所が、其人は、まだそこ迄は、讀んで居なかつた。

「ハ、ア、わしは、まだ其邊までは、讀んで居らぬ。俄の質問を受けても、お答へ致し様はない」

「さういふ譯なら、自分で研究いたしませう」

「あなたの様な、熱心な人は、多くあるまい。わしも、讀み乍ら研究はしたが、あなたの志に感服

したから、此書物は、進呈いたす事にしよう」

と言つて、其書物を、麟太郎の前に差出した。

「有難い仰せではあるが、實は、全部を寫し取つて、此通り、持つて居るから、其思召は辭退いたし

度い」

「何と、この書物を、寫し取つたのですか」

「左様……」

「全部を、寫したのですか」

「昨晚で、寫し終りました」

「フ、ム」

「これも、偏にあなたのお蔭であります」

「實に驚いた、持主のわしは、まだ半ばを讀んだだけで、讀了して居らぬうちに、あなたは、全部を讀んだ上に、而も、寫し取つたといふ、その精力と、熱心に至つては、わしの遠く及ばざる所である、然るに、わしが、此書物を持つて居る事は、あなた程に、必要はないのだから、是非、差上げる事に致したい」

斯ういふ風に、言はれて、頻りに勧められるから、麟太郎も、喜んで受ける事にした。

當時の書生が、蘭書を學ぶ場合に、大概は、それを寫し取つたものである。それにしても、麟太郎の如き、精力を有つ者は、多くなかつたであらう。

買手が出来て、三十兩に賣れた、といふのだから、自分の望む物が、手に入つた上で、三十兩の儲けがあつた譯になる。

象山の塾に居て、辭書を寫し取つた、といふ事は、餘りに有名な事であり、今でも、その寫本は、清明文庫に、保存されてあるが、兎に角、麟太郎の苦學は、偉いものであつた。

四

日本橋から江戸橋の間、今の郵船會社の倉庫の在る、河岸地一帯に、床店が列んで居て、昔は随分賑やかであつた。そのうちに、古本屋が一軒在つて、主人の名を嘉七と謂ふ、生粹の江戸ツ子で、面白い肌合の男だから、最負に仕て呉れる、顧客も多くて、却々繁昌した店であつた。

一日、未だ年の弱冠い武士が、店先へ立つて、頻りに書棚を、チロ／＼視て居る。服装は、極めて悪い方だ。黒木綿の紋付に、小倉の袴、塗の剥げた、細身の大小、何う見ても、金の有りさうな人ではない。併し、書物を好む人には、服装に頓着せぬものが多く、存外に、斯ういふ人が、價を擇ばずに澤山買ふものである、と、嘉七も、商賣には抜目のない男だから、早くも、上客と見て取つた。

「エー、此方へ、おかけ遊ばして、悠々御覽下さいまし」

「うむ、彼の書物を鳥渡見せろ」

「へいへい、これで御座いますか」

「左様く、それぢや」

何か知らぬが十冊ばかりのものを、丁寧ていねいに、最初はじめから読んで居たが、氣きに容ゆるつた所ところでもあつたか、懐紙ふとろがみに、書拔かきぬきを始めた、嘉七かぢちは、妙めうな顔かほを仕して、見みて居た。

「イヤ、大きおほに邪魔じゃまを致いたした」

「へい」

「そのうち、また参まゐる」

その儘まま、平然すまして歸かへつてゆく、嘉七かぢちは、惘あきれ返かへつて、後影うしろかげを見送みおくりながら、

「何なんのことだい、馬鹿ばか々々々々しいにも、程度ほどのあつたものだ。へん、頃日このごろの武士さむらいは、狡ずるくて不可いけねえ」
それから、二日ふたかばかり経たつと、また遣やつて來た。

「この間は厄介やくがいであつた」

「へい」

「何か、珍めづらしいものがないか」

「へい、別べつに之これれと申まをして、珍めづらしいものも御座ございません」
嘉七かぢちは、前日ぜんじつに懲こりてゐるから、謝絶ことわりの伏線ふくせんを張はつた。

「左ひだりの棚たなの上うへに、イヤ、それぢやない、番ばんの上うへに在ある、それく、それぢや」

「之これれで御座ございますか」

「うむ、それぢや、鳥渡ちよつとみ見みせろ」

「へん、面白おもしろくもねえ」

「何なんぢや」

「イエ、何なん、別べつに何なんとも申まをしやア仕しません」

また前日ぜんじつの通とほり、平然すまして讀よんでるうちに、やがて書拔かきぬきを始はじめたので、嘉七かぢちも、癩しやくには觸さわつたが、對手あひてが武士さむらい丈だけに、迂濶うっかりしたことを言いつて、無禮ぶれい討うちなんぞ遣やられては、尙たほ更さら堪たまらないから、疥癩かんじやくを抑おさへて見みて居ると、今日けふは、一層そう沈ちん着ちやくいて、讀よみ耽ふけつて居たが、そのうちに、正午ひるどき時ときになつた。腰こしの所ところを探たづつて取出とり出したのは、竹たけの皮かわへ包つんだ、握飯にぎりめしの辨當べんたうである。

「ア、草臥くたびれた、少すこし憩やすまうか」

獨言ひとりごとのやうに、斯こう言いつて、ぐるりと向むき直ただつた、嘉七かぢちは、眼めをピカリと光ひからせた。

「その茶ちやを一いちぱい、馳走ちそうに預あづり度たいな」

餘あまりに他ひとを馬鹿ばかに仕した、如何いかに何なんでも酷過ひどすぎる、と思おもつて、嘉七かぢちは、口くちを尖とがらし乍なら、

「ねえ、旦那だんな、そりやア餘あんまり酷過ひどすぎませんかね。無代たぶで書物ほんを讀よんで、其その上うへに辨當べんたうの茶ちやまで出だせ

たア、他を馬鹿に爲るにも程度がありません、いくら此方が町人だツて、それぢやア弱いもの泣かせでさアね。私だツて、道楽に商賣を仕て居るんぢやない。一冊賣つて、幾何かの利益を見て、それで、家内を養つてるんですぜ。エ、旦那買ふなら買つて下さいな」
一生懸命で、嘉七は極めつけた。武士は怒るかと、思ひの外、一向、そんな舉動もなく、ニヤ／＼笑つてる。怒られるよりは氣味が悪い。嘉七の胸は、波をうつて居る。

古本屋の店頭に立讀みを爲ることは、今も書生の間、却々流行つてるが、之れは實に狡猾い横綱で、賞めた話ぢやない。先も商賣であるから、斯んなことが流行ツちや、遣り切れまい。所が、よく聞いて見ると、この立讀が多いと、自然、店頭が賑はふので、客足がしげくなるさうだ。而て見ると、立讀も罪をつくつてるばかりでなく、幾何か本屋の利益にもなつてるのだ。

勝の立讀は、全く悪い了見では、なかつたのだらうが、嘉七に取つて見ると、癢に障つたから、恐々ながら一本突込んで見たのだ。勝は、甚く恐縮の體で、

「イヤ、何うも、左様、正面から談じ込まれては、拙者も申譯けがない、併し、惡氣ぢやないから勘辨して呉れ」
怒られるだらう、と思つたら、案外にも詫びられたので、嘉七も、少々氣拔の仕た様子である。

「そりやア惡氣ぢやねえでせうが、餘り善い了見とも言へませんね」
「まア、さう言はず、と、許して呉れ。何時までも、斯ういふ身分では、居ない覺悟だ。いづれ一度は何とかして出世もするだらう。その時には、何とでもして報いるから、別に跡の減ると、いふ物でもない、許して讀ませては呉れぬか、何うぢや」

「へへー」

「苟くも武士たるものが、店頭に立讀を爲るのも、貧からのこと、思つて呉れ」
嘉七は、思はず手を拍つて、

「豪いッ」

といった。その叫びと舉動とが、餘りに頓狂であつたから、勝は、ニヤリと、笑ひを漏らした。

「豪いなア、貴下は豪いよ。年の若い御武家にしては、本當に氣の練れたもんだ。幾何、自分が悪くつても、今時の御武家に、町人から劍突を食つて詫まる、といふ人はねえや。宜しい、左様いふ理由なら、幾何でも讀み度い丈け、讀むが可いや」

「えッ、それでは、許して呉れるか」

「可う御座います。私も江戸ツ子です。ぎやツと生れて、水道の水で、産湯を浴つて、富士と筑波を兩眼に睨んで、生育つた男子です。さア此方へ上つて、悠々御覽なせえ」

江戸ツ子の面白味は、此處に在るのだ。嘉七が、勝に下から出られたので、悉皆氣に容つて仕舞つた。之れからは、勝も遠慮なしに、讀まれるやうになつた。

「旦那に、相談がありますかね」

「何ぢやな」

「そりや、外でもねえが、斯ういふ風に、御懇意になつて見ると、お互ひに氣心も知れて、何となく兄弟のやうなもんだ」

「そりやア、左様ぢや」

「旦那も、左様思やア、私も、左様思はアね」

「成程」

「其處で、相談があるんだ」

「何ういふ相談かな」

「旦那は、却々字が巧いね」

「ふーむ」

「私も覺悟の上で、旦那に、書物を讀ませてるのだが、矢張り無代ぢやア面白くねえ。其處が商賣だから妙なものだ」

「ふーむ」

「所で、私が考へたのだ。何うです。少し寫本を仕て呉れませんか、左様なれば失禮な話だが、辨當位は出ませう。旦那も、威張つて讀めるし、私も氣持が善いつてなもんだ。何ですな」

「之れは面白い考へだ、それでは、左様して貰はう」

「何うも驚いたね。旦那のやうな、氣輕な人は、御武家にやア珍らしいや」

「甚く氣に容られたな」

「エー」

嘉七は、全く朋友のつもりで居る。勝も、そのつもりで、嘉七を扱つて、讀書を專一に、毎日通つて居たのだ。

嘉七の氣性が面白いといふので最良に爲る人も多いが、そのうちで、最も長く最良に仕て居るのが、函館の澁田利右衛門といふ人であつた。

昭和の今日でこそ、函館というても、左迄に人が遠い、とも思はず、氣輕に往復も爲るが、それは全く交通機關の十分になつて、出入に不便のない御蔭と、思ふの外はない。昔は一言に、蝦夷地と唱へて、誰れしも命がけでなければ、行けない所のやうに、思つて居たのだ。その函館から、毎年春秋の二季には、必ず江戸へ出て來る用事といふのが、海産物の懸金を、受取の爲めで、日本橋際の四日

市に在る、問屋が取引先なのであるから、嘉七の店頭を始終通るので、書物の好きな澁田は、其都度に、必ず何かしら買つてゆく。それから懇意になつて見ると、嘉七の氣性に、竹を割つたやうな、潔白した所がある。之れに惚れ込んで、最貞を爲るやうになつた。今度も、また出府して、頻りに嘉七の店へ来る。と、歳の若い武士が、帳場に居て、何か書いたり讀んだりして居るので、何だか妙な事だ、と思つて居た。

一日ぶらりと、店頭へ来た、澁田が、今日は例の武士が居ないから、

「嘉七さんや」

「へい」

「何時でも、この帳場に、若い御武家が居て、何か書いたり讀んだりして居るが、彼の方は、何ういふ御仁かね」

「へい、彼の方で御座いますか、それに就いて、面白い話が御座いますので……」

之れから嘉七は、細かに勝のことを話したので、澁田は、膝を打つて感心した。

「左様かい 珍らしい心掛けの御方だ。而して、何ういふ身分の御方かね」

「それは分りません」

「分らない、そりやア全體、何ういふ理由だね」

「何ういふ理由で、別に理由なんか、ありやアありませんや、一度は、質いたこともあつたのですが、笑つて居て話しませんから、強て聞きも仕なかつたのです」

「お前から話して、私を逢はせて呉れないか。向ふ様に故障がなければ、是非、お話し仕て見たいが」

「宜しう御座いますとも、今日にでも、見えましたら話させよう」

澁田は、その後の四五日は、商用が忙しくて、嘉七の店へも、来る間がなかつた。今日は、少しの暇があつたので、遣つて来ると、嘉七は、早くも見付けて、

「旦那、よくおいで下さいました」

「まア、静かに仕なさい、人が見るではないか」

嘉七は、頭を掻き乍ら、

「毎日、待つてたもんですから、ツイお姿を見たので、思はず飛出しまして、大きな聲も出た理由です」

「何う仕なさつた」

「例の、一件が来て居りますので……」

「何ぢや、例の一件だなんて、そんなことを言ふものではないよ、それではお目にかゝらうか」

「さア、何卒おいで下さいまし」

澁田は商人でこそあるが、讀書好の男で、一見識有つてる人だ。勝に逢うて、話して見ると、普通の若侍ではない。行末に見込みのある、立派な人物だ。勝の方でも、澁田は、尋常の商人とは違ふ。慥かに話せる男である、と見て取つたので、之れからといふものは、非常に懇意の間となつて、勝は、屢々澁田を、旅宿に訪ねて、種々話して見れば、まさに話對手になる人だから、心のうちでは、善い友人を得たと、思つて喜んで居た。

澁田が勝に住所を尋ねた時、勝は答へて、邸は本所の龜澤町であるが、此頃は、赤坂の田町に居る。お訪ね下さることは平に御免蒙る、と言つたが、果然、今來て見れば、眼も當てられぬ、破屋の状、澁田も、坐りに勝の境遇に同情した。

「頼みます、頼む」

「どれ」

勝は、出て來た。

「やツ、澁田さんか」

「御近所まで來ましたでな、序というては失禮ですが、鳥渡お尋ねいたしました」

下駄を脱いで上らうとする。勝は、見るより手を揮つて、

「脱がんでも宜しい、その儘」

之れには驚いた。下駄穿の儘で宜い、といふのだ。言はれる通りにして上つて見れば、疊がない、床板ばかりだ。それも所々引剥してあるのは、薪の代りにでも仕たのだらう。勝が來るな、というたのも無理ではなかつたと、思つた。

好きな道の、書物の話で、半日を過した。澁田は、その翌日になつて、復た勝を訪ねた。

「私も、最早二三日で、函館の方へ歸りますが、この次は、來年に相成りませう、之れで暫時、お目にかゝりません。随分御機嫌能う御暮らし下さい」

「それは如何にも、残念のことで御座るが、御歸國とあつては、致方もない。海上の御無事を祈ります」

「就きましては、まことに失禮では御座いますが、之れは甚だ輕少で、何の御役にも立ちますまいが、何ぞの御用に御立て下さいまし」

と言ひながら、懷裡から取出したのは、金子の包みである。

「之れは何で御座るか」

勝の言は、流石に荒かつた。

『御立腹では恐れ入る。この包は金子で御座いますが、決して御貢ぎ申す、といふ次第ではなく、御手元も御不如意のやうに見受けましたので、融通は御互ひのこと故、一時、御使捨を願ひ度いで御座います。如何なる御大身でも、貸借は有り勝ちのこと、町人から御武家が、金子を借りたて、さまでの御恥辱でも御座りますまい。御都合がつきましたら、御返済を願ふこととして、何卒一時御使ひ下されて、好きな書物でも御求め下さらば、私の本望で御座ります』
誠意は溢れて、其志は金子よりも貴いのだ。今此で辭退しては、之れまでに言うて呉れる、折角の親切を空しうする道理と、勝は一時受けて置いて、いづれ返す機会もあるだらう、とはやくも腹を極めた。

『何も申さぬ、御親切は、難有く受けます』

『私も、それで快う御座います』

ほんの心ばかりの小酒盛、面白く話して、澁田は歸つた。跡で包を開けて見る、と驚いた。二百兩はいつて居る。如何に俠氣に富んだ人でも、これほどの大金を、惜氣もなく貸してゆくとは、只其志のほどが難有い、と、勝は深く澁田の恩に感じた。

田も、之れを聞いて大喜びで、勝が出立する前日に、訪ねて来た。

『さて、愈々御出立の段、ふかく御祝ひ申し上げます。就ては、私しも老る年で、江戸へ参りますのは、多分今年限りだらう、と思ひますが、貴下は、前途の長い御身ゆる、随分御出世を遊ばして下さるやう、乍蔭神佛に祈つて居ります。この手紙は、私の極懇意に致して居りますものばかりで、何れも皆立派なもので、殊更に書物を有つて居りますことは、大抵の學者も、及びませぬほどの人、貴下が、半年や一年、足を留めても、決して失禮な待遇は致しませぬ。私から御紹介の爲めに、書いて参りましたから、何かの時の御爲にもなりませう、何卒御取置下されませ』

重ねくの澁田が厚意には、我慢の強い勝も、泣かずには居られなかつた。

『いや、何から何まで、御世話になり勝ちで、千萬御禮の外は御座りませぬ』

『御言で恐れ入ります。随分、御身を大切になされませ』

『不思議な御縁から、御懇親に相成つて、之れで長の御別れとは、まことに残念の至りで御座る』

『私とても同じこと、まことに残り惜しう御座ります』

と、互ひに名残の惜まれて、夜の更けるまで話込んで、澁田は歸つた。

この澁田といふ俠商は、その後は終に出府も爲ず、函館に於て死んだが、今は、孫の代になつて居

る。勝の爲めに書き残した、手紙三本の名宛は、嘉納治右衛門、竹川竹齋、濱口吉右衛門の三人であつた。

治右衛門といふのは。攝州灘の酒造家で、今の講道館の館長、嘉納治五郎の父である。竹齋といふのは伊勢の醫者であつたが、非常に博識な人で、藏書家では評判の高い方、それから吉右衛門は、今の吉右衛門の祖父に當る人で、紀州の素封家としては、今日でも猶ほ令名ある家で、この三人へ残した、紹介状が勝の修學に益したことは、勿論の事であつた。

五

佐久間象山は、信州松代の人であるが、父を、一學といふて、これも、相當の人物であつた。醫者の家に生れた、象山のことであるから、學問の修業は、父が勵ます位であつた。一と通りは、松代で修め、それから、江戸へ出て来て、佐藤一齋の門に、學んだのである。

けれども、年の若い象山は、師のいふ事ばかり、肯いて居たのではない。殊に、其頃から、傲岸不屈の氣分が、溢れる程であり、師の一齋とも、遂に衝突して、自分から、其門を飛出した程である。國許に居る時、小さい頃から、指導してくれた人に、澁谷修齋といふ人があつた。勿論年長者でもあり初めは、象山に、親しく教へて居たのだが、遂には自分の力にも及ばず、象山の進歩が早いだ

けに、澁谷は、持餘したのであつた。

江戸へ出てから、象山の氣質を、幾分でも、矯め直したい、と考へて、友人の林鶴梁へ、頼み込んだ。鶴梁は、澁谷から、詳しく聞いて、快く承知した。

鶴梁は、眞田侯の爲めに、講書の役を勤め、それが縁となつて、赤坂の溜池に、大きな邸を貰つて、住んで居た程であるから、同じ眞田の家臣たる、象山の事を頼まれて、快く承知したのは、當然のことである。

所が、これは大失敗に終つた。象山に比べて、鶴梁は、遙かに先輩であり、年齢も、相違して居るから、二十歳を越えたばかりの、象山に對しては、大に軽く見て居たのであらう。然るに、象山は、先輩であるからといふて、無條件に、鶴梁を尊敬する、といったやうな、軽い調子の男ではなかつたから、初對面の談論で、先づ、衝突してしまつた。

澁谷が、心配して、いろいろに、調停を試みたけれど、二人は、そんな事に頓着なく、激論を闘した末、

『お前のやうな、年の若い、田舎仕込の書生が、儒學の本道に就て、彼是れいふても、そんな事は、江戸に通用せぬ。もう少し、玉川上水でも呑んで、人間らしくなつてから改めて、會ふ事にしよう』と、鶴梁が、怒鳴りつけたのに對して、象山は、さらに押返した。

「先輩の人から、左様な事を、聞かされるとは、思ひもつかぬ事であつた。元來、學問の上に、江戸と田舎の區別はあるまい。儒學の本道といふても、それを説くに、二つの道が、別れて居る筈はなく、若し、之れありとすれば、いづれかに、誤りがあるのであつて、それを年の別を以て、裁かうとしても、さうは行かぬ。江戸の先輩は、自分定め烏天狗ばかりで、碌な者は居らぬ。今日限り、お訪ねはせぬつもりだから、左様、御承知下さい」

と言はれて、鶴梁は、カン／＼になつて怒つた。

かくて、二人は、初対面の時、將來の絶交を、互に主張したのだから、實に面白い。

象山の鼻柱は、それ程に強く、年を経るに従つて、益々、強くなるばかりであつた。然し、實力は、充分にあつたから、その調子で、生涯を、押通してしまつた。

葦山へ行つて、江川の塾に入つた時も、調練の稽古を、させようとしたので、すぐに飛出してしまつた。その時には、既に、江川の砲術に關する、一般的知識を、呑み込んで居たのだから、驚くの外はない。

それ程の人でも、藤田東湖には、ひどくやつつけられて、ゲーの音も出なかつた。それ以來は、藤田にだけ、一步を譲つて、敢てさからはなかつた。

木挽町に、家塾を開いた時、吉田松陰が、訪ねて来て、その教を受けた。象山と、松陰の關係に就ても、面白い話はある。

松陰が、伊豆の下田で、捕へられた事件、それは、外國密航の失敗であるが、その背後には、象山が居たのだ。それであるから、松陰が捕へると、象山も捕はれ、二人ともに、藩へ預けられて、謹慎の身となつた。

其前に、勝麟太郎が、入門して居る。その時分に、和蘭の辭書を、引寫しにして、象山を驚かした。嘗に、そればかりでなく、勝に對する、象山の信用は、なか／＼に深かつた。

後には、象山の妻として、勝の妹が、嫁いで居る。それからの關係は、一層、密接になつて、勝の人物は、其頃に、輪廓だけが出來て、それから後は、自分の修練で、本質を整へたのであつた。

人に對する、應酬の間に、一種の風格を有つ、勝の調子は、象山譲りといふてもよからう。最初に一喝して、それからヂワ／＼、話し込んで行く、あの呼吸が、即ち、象山の本領であつて、巧みに、それを利用したのが勝一流の談論であつた。

奥州の水澤から、出て來た、高野長英が、長崎に於て、蘭人に學び、江戸へ出て來た、地方の識者に、知られるやうになり、盛に、蘭書の講義を始めた。

同時に、西洋の文化を、蘭書に依つて、多くの人に、教へたのであつたが、頑冥な幕吏に 既まれたのは、それが爲めであり、漢學を以て世に立つ、儒者と言はれる人達から、惡魔の如く、見られたのも、其頃の事であつた。

鳥居甲斐守は、林大學頭の家にに生れ、御家に寶にして居る、儒學を守る上から、蘭學の排斥を始めた。けれども、蘭學の流行は、なかくくに、強い力をもつて、進んで来る。

そこで、今の言葉で言へば、行政處分の彈壓を、加へる事になり、長英の一派は、或は入牢の身となり、或は、遠島處分になつた。

三州田原の渡邊華山が、長英の教へを聞き、それが爲めに罪を獲て、藩主に累の及ぶを懼れて、切腹したのも、此時の事であつた。

學問に關する事を、政治の力や、法律の處分で、抑へつけようとしても、それは、無駄な事である。一時は、効を奏しても、臆て、その反動が來て、時勢の推移と共に、一段の力を加へて、反撥して來る事は、古今東西の歴史が、之を證明して居る。

長英は、傳馬町の牢に繋がれ、終身、出牢の見込みはなかつたが、牢外に残る、同志や門人等が、苦心慘膽して、長英を助けようとする。

それが爲めか、どうかは知らぬが、一夜、烈風の時、火を起して、牢屋が危くなつた。それが爲めに、入牢中の者は、解放される事になつた。

長英も、一時の解放を受けて、出牢したのであるが、忽ち身を匿して、行方不明になつた。暫くは地方に匿れて、やがて、江戸へ歸つて來た時は、前齒を折り、藥を以て、反面を焼いたから、今迄の面影はなく、四谷に家を構へ、澤三伯と稱して、醫者をして居た。

蘭書を譯して、西洋の科學を傳へるのが、長英の仕事であつた。蘭學者は居ても、長英ほどに、深い者は少なかつた、そこで、澤三伯の名は、識者の間に、知られるやうになり、諸侯の中でも、新しい知識を、求むる人達は、三伯を迎へて、或は、兵書の翻譯を託し、或は、科學の講釋を聞くのであつた。

宇和島の伊達宗城や、薩摩の島津齊彬等も、其一人であつた。それであるから、長英は、宇和島へも招かれ、又、三田の薩摩邸にも、居た事がある。

勝麟太郎の名は、蘭學者の間に、認められるやうになつた。

一夜、同學の友人、横谷宗興といふ人から、紹介されて來たのが、澤三伯であつた。一見、舊の如し、といふ事がある。ちよつとの時間でも、話し合つて見れば、心のつながりはつくものだ。

『わしは、今、匿れて居る者であるが、大概は、御推察のつく事と思ふ。息のある限り、蘭學の秘奥

を、傳へて置きたい、と思つて、惜しからぬ命を永らへ、危い思ひをして、志ある人に、秘かに接して居るのであるが、君が、篤學の士である、といふ事を聞いて慕はしく思ふの餘り、お訪ね申したのである、今後、機會があらば、お目にかゝりたい、と思つて居るから、御迷惑でない限りお會ひ下さるやうに、願ひ置く」

「御挨拶で、痛み入る。先生の事は、豫て承知の上であれば、手前の方から、お願ひ申してもお會ひしたく存ずる」

「そのお言葉で、満足いたす」

「然し、先生は、大切の身であるから、輕卒な振舞はなさらぬやう、願ひたい」

「御注意の段、千萬忝けない」

それから、雑談に耽り、書物の話になつて、別れる時、長英は、懷裡から、一冊の書物を出した。

「これは、荻生徂徠先生の書かれた、軍法不審といふのであるが、これには、自分の書いた序文が添へてある、これを進上いたすから、一應御覽置きを、願ひたい」

と言つて、麟太郎へ、渡して行つた。

それから程經て、長英は、捕吏に向はれ、潔く、腹を切つてしまつた。

幕末の三舟

序言

海舟、泥舟、鐵舟、これらを、幕末の三舟と稱す。各自、それ々に特色があり、同じ時代に生れて、ひとしく、徳川の家臣である。その主張には、多少の相異もあつたが、徳川の爲めに、盡した點は、三舟ともに同じであつた。

海舟は、開國進取の説を、はやくから唱へて、その一本槍で、進んで來たが、泥舟と鐵舟は、攘夷論者であつた。幕府の倒れゆく運命に就ては、三人とも、早く理解して、時勢の推移は、やがて其處へ、落付くの外はない、と、視て居たらしく、流石に、泥舟と鐵舟は、悲痛な感じを以て、諦めては居たが、海舟は、其點に於て、割合に淡泊りと、考へて居た。

泥舟と鐵舟は、三河以來、譜代の臣であり、海舟は、中途から、飛込んで來て、譜代の格を得た人であるから、そこに、多少の相異はあつたのだ。

海舟は、海外へ渡つて、外國の空氣も、吸つて來たし、世界の氣勢が、刻々に迫つて來て、今や、日本の鎖國主義も、その力に押されて、近く破られるものと、考へて居たらしい。只、支那が、その大勢を、よく理解しなかつた爲に、英佛の兵に攻込まれて、城下の盟を爲し、遂には、領土の或部分を割き、又は、自由港を、餘儀なく、認めるに至つた。その經路を見て、日本が、更に同じ覆轍を踏まぬやうに、爲なければならぬ、と、考へて居たのは、海舟であつた。

幕府は、安政の當時から、開國條約に、調印はして居るが、國內には、猶ほ、多數の攘夷論者があり、幕府の中にさへ、同じ議論を唱へて居る者がある位であつた。萬一にも、是が爲めに、第二の支那となつては、それこそ、一大事であるから、どうかして、さうならぬやうに、と、海舟の苦心は、そこに在つた。

泥舟と、鐵舟に至つては、全く、海舟と、此點に於て、所見を異にした。攘夷は、日本の威信を、海外へ示す上に於て、止むを得ざる手段で、やがては、開國するにしても、それは自發的に、さうなるのでなければ、本筋ではない、と、考へて居たらしく、これが爲めには、倒幕派の一人たりし、清河八郎とさへ、手を握る事を、敢て辭さなかつた位だ。

海舟の學問は、和漢に亘り、且、西洋に及んで居た。それだけに、武士の意地に、囚はれる事が少なく、變通の才が、割合に、働らいて居た。

泥舟と、鐵舟は、純な武士氣質であり、その魂にも、少しの緩みを見せなかつた、佛典學と漢學に於ては、當時の士人としては、不相應には造詣はあつたが、西洋の書物は、全く讀み得なかつた。武術には、稀有の力を有つて居た。泥舟は、槍を採つて、名人の域に達し、鐵舟は、劍を以て、一家を爲した。

海舟は、島田虎之助に學んで、免許皆傳になつて居たが、武道を以て、世に立つ人としては、他の二舟に、遠く及ばなかつた。

海舟は、幕府の最後を、有意義に終らせ、徳川宗家を、窮地に救はう、として、舞臺一ぱいに働くべく、その全權を委ねられて居た丈に、責任も、頗る重かつた。

泥舟と、鐵舟は、その意識に於ては、海舟と同じ立場に在つたが、重き責任の人ではなく、一幕毎に、何等かの役廻りを引受ければ、それで、よい位の程度であつたから、海舟に比べて、甚だ身輕であつた。

明治になつてからの三舟は、それづくに、立場を異にし、海舟は、晩年に近く、樞府の顧問となり、身を終る迄、その椅子を離れなかつた。

鐵舟は、一たび宮中の人になつたが、それを退いてからは、全く一個の野人として、或時は、宗家の如く、又或時は、教育家の如く、古典的武人として、日本精神を鼓吹する事に依つて、その生涯を完うした。

泥舟は、世間と放れて、一切の名利は、其念になく、一般からは、舊幕殘黨の一人として見られ、自らも、然う見られる事を以て、敢て耻とせず、毀譽褒貶に、少しの介意なく、自らの領域を守つて、其分に安んじ、何時、世を去るともなく、靜かに幽冥の人に、なつてしまつた。

幕末の傑人として、三舟を視、各自に、その特色、風格を述べて見ると、頗る興趣の深いものがあるが、その経歴を物とする、となれば、一舟に、一冊を要し、而も、相當の紙敷を以てしなければ、大體を盡す事は出来ぬ。

三舟に關する、著述の類は、世間にも、相當、現はれて居るし、著者の全集にも、隨所に記述してあるから、茲には、三舟を一括して、その概要を、述べる事にしよう。

▲本傳と、多少の重複は免かれぬが、長いものを短かく、まとめて置くのも、悪くはあるまい。三舟の對照は、別の一冊と見て、切放して讀んで貰ひたい。

勝安房の祖先は、越後の小千谷から、出て來た、盲人であつた。遠い先祖は、どういふ人であるか、更に判らない。此の盲人が、十六七の頃に、江戸へ出て來て、幕府の御典醫、石坂宗哲の世話になつて、やうやく一家を作り、それから金貸を始めて、一代の身上ではあるが、分限者の番附に迄、上る程の蓄財をした。金の力で、檢校の株を買つて、本所の一ツ目に、屋敷を構へて居た。有名な、男谷檢校といふのは、此人の事である。

盲人ではあつたが、世間の事情にも、通じて居たし、又、金貸はして居たが、慈悲心も深く、附近の貧者は、常に保護を受けて居た。斯ういふ人であるから、男谷檢校の名は、存外世間へ響いて居た。其伴が、男谷下總守と稱し、將軍へ、劍術指南を爲て居たから、其一門は、頗る繁昌した。

男谷檢校の末子が、幕臣の勝家へ、養子に行つて、それから、三代目に生れたのが、麟太郎である。後に、安房守と任官して、幕末の際、天下に名を成した。明治の勝伯が、即ち其人である。

父の左衛門太郎は、武藝も出來たし、又、學問といふほどではないが、多少の文學もあり、當時の

幕臣としては、使ひ道にあつた人だが、父の平藏が、檢校の家から、分れて來た時、多くの持參金と、其他にも、財産があつた爲に、生活は、誠に裕である所から、強て仕官を求め、といふ様な事もしなかつた。只、懐ろ手をして、ブラ／＼遊んで居てもよい、といふ境遇が、却て禍を爲して、左衛門太郎は、さかんに放蕩もやれば、亂暴も働く、といふやうになり、やがては、其筋の者から、干渉もされた。

何しろ、氣働きがあつて、膽力もある所から、自尊心も強く、其筋の役人に反抗して、愈々、評判は悪くなる。糞ヤケになつて、博奕打の仲間へも飛込めば、香具師と組んで、色々な仕事もする。そんな事が、幾年か續いた爲に、トウ／＼財産を、目茶苦茶にして仕舞つて、果は親類が集まつて、座敷牢へ、打込む迄になつた。

さういふ父を、持つて居た、麟太郎は、幸か不幸か、自分が、家を相續して、勝家の當主になつた時は、モウ財産は、洗ひ上げた様になつて、一文の蓄財も無かつた。

父は、暴れ者であつたが、流石に、老る年と共に、氣は靜かに、なつた其代りに贅澤をいふて遊んで暮すのみであるから、麟太郎の心配は、一通りでなかつた。

家を、相續した時は、十六歳であつたが、それから刻苦勉勵して、苦しい中から、武藝も磨けば、學問も修めた。武士に必要とする、一通りの修行は、悉く修めたので、二十歳を迎へて、一人前の武士になつた時分には、何處へ行つても、立派に、押通し得る丈に、實力を有つて居た。

尤も、麟太郎が、それ迄に、なるに就て、其後見をして、世話をした人は、幾らもあつた。其中に於て、最も能く勝を見抜いて世話をしたのが、函館の海産物商で、澁田利右衛門といふ人であつた。

此人は、町人でこそあれ、心掛の立派な人で、殊に、讀書の力も、相應に有つて、日本橋の四日市にある、鹽物問屋へ、毎年、澤山の荷物を送り附けて、仕切の金を、受取に來る時は、必ず澤山の書物を、買つて歸る様に爲て居た。

日本橋から、江戸橋へ掛けて、河岸通りの、一帯は開放しであつて、荷物の、揚げ下しを、爲すやうになつて居た。

その河岸通りには、種々な床店が、列んで居たが、其中に、嘉七といふ人が、古本屋を、出して居た、澁田を、上得意にして、年に二度宛は、澁田に、澤山の書物を、買つて貰つて、多くの利益を得たので、嘉七の爲には、此上も無い、お客様であつた。

そこへ、勝が、出掛けて行つては、書物を借りて來て、讀んで居た。其縁から澁田に紹介されて、逢ふ事になつた。二人が、遇つて見ると、年齢こそ違つて居るが、互に相許してしまつた。それから、といふものは、親類の如く、深い交際を結んだ。或時は、澁田が、勝の爲に、二百兩の金を贈つ

て、家計の急を救ふた事もある。
 澁田は、年と共に、身體も衰へて來たので、商賣の事は倅にまかせて、自身は、函館へ引籠り、再び江戸へは、出て來ぬ事になつた。
 澁田は、勝を訪ねて、其旨を語り、一生の別れとして、紀念の爲に、勝の利益になりそうな人へ、紹介状を呉れた。其の一人が、伊勢の竹川竹齋であつた。外に紀州の濱口吉右衛門に宛てたのと、もう一通は、灘の嘉納治右衛門に對するものであつた。この紹介状が、勝の爲には非常な便宜になつて、これが爲に、勝の一身には、容易ならぬ利益を、得たのである。

一一

それから、幾多の苦勞を経て、幕府へ出て、役に就いた。二度も洋行して、歸つて來てから、謂ゆる新智識として、重く用ゐられた。それが爲に、軍艦奉行や、陸軍總裁を、務めるやうになつた。
 勝が、幕府に、重く用ゐられたのは、その新しい智識を、巧みに應用して、屢々良い事をして見せた爲ではあるが、何分にも、其時代の事として、高が座頭の血縁を引いて居る、といふ丈で、三河以來のものではなく、如何に人材であつても、門地の低いといふ事が、何時も邪魔になつて、結局は、出世の道も、思ふ程に伸びず、同じ出世をし乍らも、幾分の不平は、抱いて居たのだ。

早くから此人が、幕府の内閣に、這入て居たならば、徳川の末路も、今少し上手に、納まりが附いたであらうと思ふが、残念な事には、相當の役に取立られた、としても、内閣の實權に參與つた、といふのではなく、海軍とか、陸軍とかいふ方へ、採用されて居たので、思ふ様に、徳川の爲に、智囊を絞る事は、出来なかつたのである。
 けれども、長州征伐の時には、流石に、勝も、傍觀して居られず、幕閣の者に遇て、征長の不可なる所以を説いて、出兵に反對した。其議論が、餘りに劇しかったので、忽ち罪を得て、謹慎を命ぜられた。

所が、長州征伐は、勝が、豫言した通り、大敗北と極つて、二進も三進も、行かなくなつて仕舞つた。同時に、將軍の家茂が薨去して、その繼嗣がなく、辛うじて、一橋中納言、慶喜を以て、十五代の將軍に推して、どうか斯うか、纏まりは附けたが、扱て、如何する事も出來ないのが、長州征伐であつた。

この戦は、慶應元年から、二年へ掛けて、長い月日を費やしたが、幕府側の敗北であつて、其上に、將軍が變つたのだから、此際に何とかして、折合を附けて仕舞はぬと、禍は、蕭牆の裡から、起つて來る恐れがある。幕府の將來は、實に岌々乎として、危い事になるのであつた。是に於て、慶喜は、斷然、長州征伐を、中止する決心になつて、そこで、勝を呼出して、其使者を、命ずる事になつ

た。

勝は、最初から、反對して居た事ではあり、今、征長中止の使者として、長州藩へ、掛合に行く事は、自分の主張が行はれる事になるのであるから、謹んで御請はしたが、併し、戦が、これ迄にならぬ内ならば、左迄に苦心せずとも、戦の中止は、容易に出来たらうが、今日となつては、其掛合も、容易な事でない、とは、京都を出る時から、覺悟して居た。

斯くて、勝は、廣島へ来て、淺野侯に、對面の上、重臣の辻將曹を、打合せの相手に、爲る事に極めて、それから、辻の選抜で、藝州藩の家來が、長州藩へ、使ひに行つた。勝の代理として『毛利の方からも、適當な名代を送つてくれ、且その名代は、全權委任に限る』といふ事を、通ずる爲の、使者であつた。

徳川幕府と、長州藩は、極端に迄、その感情が、衝突して居たのだから、從て、確執の度合も、他藩に比べては、特に劇しいものがあつた。その結果として、始められた戦さが、いつも、長州藩の勝利となつて、幕軍は、敗北を續けて居たのである。

從て、長州藩士の鼻息は、非常に劇しく、藝州藩の家來が、勝の代理として、講和談判を開くから、相當の名代を選んで、寄越して欲しい、といふ、掛合に對しても、初めは、強硬な意見で、容易に、講和に應ずる氣色はなかつた。

併し、長い間の戦に、苦んで居る、藩の重役や、一門の人達が、これを機會に、先づ幕府の方では、どういふ條件を出すか、それを聞いてから、戦を續けるとも、又、和睦を講ずるとも、何れにか極めたら宜からう、といふ、意見を以て、遂に、強硬論者を押へ附け、毛利の名代としては、高田春太郎（井上馨）、春木強太郎（太田市之進）、長松文助（幹）、廣澤兵介の、四人を選んで、勝の掛合に、應接せしめる事になつた。

此返事を得て、藝州の家來は、廣島へ、歸つて来て、勝に、其の報告をした。是に於て、勝は、宮島へ乗込んで来て、大願寺を、談判の場所として、毛利の名代が、到着するのを、待受けて居た。

彼是する内に、毛利の名代も、やつて来て、これから、愈々、談判に取掛つたが、此際、勝は、高田の顔を見て、疑を有つた。兎に角、一と筋繩では往かぬ、人間と思つたのだ。先づ、此男の頭さへ、押へつけて仕舞へば、此の掛合は、難なく纏まる、と考へたのであるから、最初の應接に、高田の度肝を抜いて置いて、それから、掛合に掛つたので、存外に、高田等が、脆く讓つて、戦は中止に極つた。

勝は、佐久間象山に學んだ關係から、人に對する、應接の間に、佐久間一流の、やり方が現はれて、いつも、人に對しては、最初に、一喝を加へて、驚かして置いてから、本文に入つて、話し込む、といふ風があつた。

有體に言へば、此時に、長州藩が、ウンと踏張て、飽迄も、戦は繼續する、と主張したならば、幕府は、どうする事も出来なかつたのであるが、兎に角、勝の舌に翻弄されて、毛利の名代が、無條件講和を承知して、歸つた所に、勝が、掛合の巧妙なる點が、現はれて居る。

事情は、斯ういふ譯で、あるから勝は、無條件の征長中止は、非常に、骨を折つた積りで、歸つて來る、と、意外にも、幕閣の意見は、全く、一變して、

「假令、戦争の現状は、どうあらうとも、苟も、徳川幕府が、天下を、制して居る、勢を以て始めた戦を、無條件中止とは怪しからぬ。左様な事が、此儘に行はれては、幕府の威信に關する」

と言つて、勝が、約束して來た事は、殆ど無視されて、毛利へ對しては、百日の閉門を命じた。現に、戦争に打負けて、その談判委員が、この戦争を續けられては、幕府が堪らぬ、と思つて、無條件で、和睦を結んで、歸つて來る、と、其跡から、百日の閉門だ、と、いふのだから、毛利の方でも、之れに呆れて、勝に、だまされたものとして、非常に怒つた。それから、何の幕府が、と言つた風で、益々、反抗の心を、強めて行くから、幕府の爲には、却て、此命令は、良くなかつたのである。

尙ほ其上に、幕府の爲に、容易ならぬ事が、起つて居たのは、薩長聯盟の一條である。丁度、征長軍を差向けて、盛に戦つて居る時に、土州の坂本龍馬と、中岡慎太郎が奔走して、木戸

を初め、重立ちたる者を説いて、薩藩との聯盟を勧めた。これは、容易に纏まらなかつたが、坂本と中岡が、根氣強く、どこ迄も、押して行つたので、聯盟の段取りが進み、戦争の中止、と同時に、木戸は、密に京都へ乗込んで來て、薩邸へ入込み、西郷や小松に會つて、聯盟の約束は、終に出來たのである。

是等の人が、如何に働いても、時機が來ない、と、大した事にも、ならなかつたらうが、此時は、既に、倒幕の機運は、充分に熟して居たので、徳川の爲には、不利の形勢に、なつて居たのだ。その場合に、薩長の聯盟が、スラスラと、進んでしまつたから、忽ちにして、維新の變革は、那アした調子に、うまく運んだのである。

三二

慶應三年、十二月二十五日に、三田の薩摩邸を包围して、大砲を撃ち込み、邸の大部分を、焼拂つてしまつたのは有名な事で、生残つて居る、老人の中には、眼のあたり、其慘劇を見た人もあらう。兎に角、幕府としては、亂暴な事をやつたものだ。

▲徳川が、將軍職を辭退して、大政を奉還したのは、それより前の事であるから、所謂、幕府なるものは、もう無い筈である。従つて、これを、徳川と呼ぶのが正當で、幕府の稱をつづけるの

は、或は、間違つて居るかも知れないが、その當座は、やはり、一般からも、幕府といふて居たし、又、さういふて置く方が判りもよいから、嚴密な詮索は、暫く措いて、やはり幕府と、呼ぶ事にする。

薩摩邸の焼打も、事が、茲に至る迄には、いろ／＼経緯もあつて、幕府の方にして見れば、堪忍袋の緒が切れて、疝癩玉を、破裂させた譯であらうが、此事は、幕府に取つて上出来とは、いへなかつた。

三田の薩摩邸には、澤山の浪士が、集まつて居て、それ／＼に手を分ち、少しでも、幕府の不利になる、と、見た事は、遠慮なく遂行して、傍若無人の態度で、江戸市中を、荒しまはつて居た。

中里介山は、此事實を、『大菩薩峠』に織込んで、巧みな筆で、當時の内幕を、或程度まで、書流して居るが、兎に角、當時の薩摩邸は、幾多の疑問と奇怪事を、包藏して居た、邸には違ひない。

益満休之助といふ、快男子が、その中心となり、南部彌八郎、中村勇吉、肥後七左衛門などいふ、豪傑を集めて、浪人でも、博徒でも、何でも御座れ、と、引張込んで、暴れ廻つて居たのだから、幕府の取締りなどは、さらに届かなかつた。

龍造寺浪右衛門といふ、破牢の罪人が、飛込んで来てからは、その暴れやうは、一層に、はげしくなつて、府内の豪商で、殆んど、その害を被らざる者なく、果は、市中見廻の役人が、腕や足を斬ら

れて、街頭に、轉がつて居るといふやうな状態であつたが、それらの亂暴者が、引揚げて行く、跡をつけて見れば、大概、三田の邸へ、入つて行くのだから、遂に、それが問題となつて、幾たびか、幕府から懸合はあつても、瓢箪鱈で、何時も、要領を得られなかつた。

世間の一部には、西郷吉之助が、遙に指揮をして、やらして居たのである、といつて、頻に、非難する者もあつたが、果して、西郷が、此事に關係を有つて居るか、どうかは、實のところ、よく判らないのだ。

いづれにしても、結局は、市中見廻の主任である、酒井左衛門尉が、之を薩藩の仕事と見て、焼打の献策を、幕府へ出して来たから、それが、老中の間に、相談の題目となつて、遂に、之を遂行する事に決したのだ。

勝は、當時、引籠中であつたが、此事を聞くと、すぐに登城して、老中に、面會を求めた。

其頃には、若年寄の格を與へられて、勝も、幕吏としては、相當に重く視られた。長州征伐以來、それに反對した爲に、不首尾となり、さらに、長州藩の講和談判に就て、幕閣と、意見を異にし、それや、これやで、職を辭して、引籠つて居たのだが、斯うして、面會を求めて来れば、老中のうち、

誰か逢ふのが當然なのであるから、松平周防守が、面會する事になつた。
『本日、罷出でたのは、外の事でもないが、聞く所によれば、三田の薩摩邸に、焼打を掛ける、この事で御座るが、近頃、甚だ不慮な御處置と考へて、御中止に相成るやう、お勧めに参つたので御座る。』

『決して、不慮な處置ではない。只今は上様も、御留守の事であり、市中の人民は、何となく、不安を、感じて居る、折柄、庄内藩の、見廻に對して、亂暴を働か、加之、富豪を脅迫して、大金を奪ひ、到る所に、亂暴狼藉を働く。それらの者は、すべて薩摩邸に居る浪人者であるから、非常の御處置に及ぶ事は、止むを得ざる次第と、御承知ありたい』

『お言葉では御座るが、昨今の日本は、以前と異り、西洋諸國とも、交通の途がひらけて、時勢は、全く一變して居る。従來の如く、外様の大名を、御取扱ひ遊ばす場合に、君臣の關係を以てするの、甚だよろしくない、と考へる。』

例へば、外様大名は、その領地に於ける、一個の政府であつて、江戸の邸は、その政府から派遣された、役人の詰める公使館とも、見做すべき場所であるから、みだりに之を包圍して焼打をかけるなどは、以ての外の御處置である。
薩摩邸の浪人云々といふ、御言葉に誤りがなければ、その浪人の、引渡しを請求すれば、よいので

あつて、何處の何者か、所屬も判らぬ浪人へ、御處置を加へる爲に、薩藩を代表する、役人の詰所たる、其邸へ焼打をかけて、萬一にも、薩藩から、懸合を請けた時には、何と御答なされる。
況して、浪人の御處置に、一箇の大名を動かさし、兵力を以て、御處置を加へるなどは、却て御上の、御威光を損ずると、いふものだ。之がために、天下の一大事を引起したら、その責任は、何人が負ふ事に、なるのであるか』

と、勝が、非常な勢いで喋りまくるので、周防守も、少し、癪に障つた。
『たとへ、何と仰せられても、既に決定した、御方針を、變更する事は、相成らぬ。況して、拙者は、上様の御鑑識を以て、老中の御役に、居るのであるから、粗忽の處置は仕らぬ。御留守中の事に就ては、萬事を委任されて居る。拙者等の取扱ひに就て、彼是れ申さるゝのは、上様の御鑑識違ひ、ともいふ意味にもなつて、甚だ不慮の事ではないか』

『たとへ、上様の御處置でも、宜しくない事は、どこ迄も宜しくない、殊に、上様でもない者が、お役を笠に被て、不慮の御處置を執り、萬一の事があつた時には、その責任は、誰が執る事になるか』

『黙らつしやい。それは、あまりの暴言では、ないか。たとへ、何であらうとも、上様の御處置に迄、彼是れ申すとは、言語同斷、深く慎まつしやい』

「これは、怪しからぬ。徳川御一家の、御用ならば格別、天下の役人が、天下の事を、取扱ふ場合に、天下の心を以て、爲なければならぬ。此度の事を以て、徳川御一家の事と、考へて居らるか。それとも、天下の事として、考へて居らるか。そのお答へによつて、拙者にも、大に論ずべき點がある。如何で御座るか」

論争が、こゝ迄、押詰つて來れば、それから先は、もう喧嘩腰である。連も、穩かに話合ひのつく譯はなく。到頭、周防守は、席を蹴立て、御用部屋へ入つてしまつた。

勝は、天を仰いで、嘆息した。

「もう、これで、徳川も、終りだ。將軍の職を辭した、幕府が、何の権力を以て、大名の邸へ、焼打を爲するのであるか。亂暴も、茲に至つては極まりぢや」

此焼打は、豫定の如く、行はれてしまつた。

老人や、女子供が、算を亂して、海岸へ遁れ、それから、薩摩の藩船に乗つて、引揚げて行くのを、遠州灘まで追討をかけた、といふのだから、思切つた事を、やつたものだ。

益満、南部、中村、肥後等は、一同に代つて、縛に就た。龍造寺は、立腹を切つて、渦巻く火の中へ飛込んで、薩摩邸は、灰になつてしまつた。

果然、勝の考へた通り、此事が、京都へ知れると、薩藩の連中は、火のやうになつて怒つた。其他の者も、幕府の暴狀を怒り、徳川に對する、感情は、極度に悪くなつた。

伏見鳥羽の戦ひは、此一事だけでも、薩藩の者としては、負けられなかつた。其後の追撃、幕臣へ對する處置が、極端に迄、鋭くなつて來たのも、是が、一つの原因であつた。

四

當時の事情を、くわしく述べると、色々お話もあるが、今は、多くを略す事にする。

勝が、眞に精力を注いだのは、江戸城明渡の、一刹那であつたらう、と思はれる。併し、幸な事には、官軍の方に、西郷の如き、偉人が居つたから、勝の話も、巧く運びがついたのだ。勝に、どれ程の、智謀があつても、官軍に、西郷の如き人が居なかつたならば、あの際は、どうしても、大きな戦になつて、何れが勝つにしても、全國の人民は、どれ程に、迷惑をしたか、判らない。

然るに、幕府側の勝と、官軍の西郷と、甘い工合に、揃つて居て、互に、大局の上から、時世の前途を達観して、程良く切上げを、つけて呉れたから、大きな騒ぎにも、ならず済んだのである。

伏見鳥羽の戦は、慶應四年正月三日から、三日間の激戦であつた。併し、結局は、幕軍の敗北となり、官軍は、大勝利を得て、大體の勢は、定まつて仕舞つた。

慶喜は、會津、桑名の兩侯初め、五六人の者を従へて、江戸へ歸つて來た、といへば、體裁よく聞へるが、實は逃げて來たのだ。それから、第二の大戦を起すべく、それに就て、段々と、計畫を立てたが、幕臣の多くは、戦争繼續論者であつた。

其の背後には、佛蘭西公使ロセスを初め、陸軍雇のシヤノワンが、盛に煽り立て居たから、一層に戦争論が盛であつた。それを、勝が押へつけて、平和恭順を唱へるので、幕臣に憎まれた事は、實に非常なものであつた。

幕臣の中でも、戦争論者として、最も強氣であつたのが、小栗上野介であつた。その背後から、シヤノワンが煽りロセスが景氣をつけるから、小栗の鼻息は、實に素晴らしいものであつた。

シヤノワンは、勝を訪ねた。官軍を、箱根の嶮に扼して、大いに之を打ち破るべく、戦略上の意見を、頻りに述べた。勝は黙つて、聞いて居たが、シヤノワンが、取取つた跡から、解雇の通知をして、約束の期限だけ、給金を纏めて届けたから、シヤノワンの方では、グーともいへなかつた。強氣の戦争論は、是れに依つて、勢ひが削がれた。勝の遣方は、全く巧いものであつた。

勝は、幕臣の動搖なぞは、眼中に置いて居ない。只、慶喜が、どんな考で居るか、それ一つで、此大局は極るものとして、見て居たのである。

慶喜は、非常に、迷つて居たのだ。幕臣の、強い調子を見れば、戦つても見たくなくなるが、深く前途を考へて見れば、此上の戦ひは、國のためでない、とも思はれる。慶喜の立場からすれば、斯うした場合に、心の動搖するのは、當然の事である。

左右のものに、思ふさま、いはせても見たが、靜かに、落着いて聞けば、非戦論にも、相應の道理はある。主戦論は、武士の意地からで、深謀遠慮があるのではなく、薩長の専横は、憎いに違ひないが、今は錦旗を擁して、優勝の地に、立つて居るのだ。その内容には、どういふ無理がある、として、表面は、堂々たる官軍である。之れに反抗すれば、明かに朝敵となるのであるから、それも考へなければならぬ。

田安中納言の注意から、勝を呼んで、意見を糺す事になつた。勝は喜んで、御前へ出た。勝のいふ所は、明白な非戦論であつた。

五

慶喜には、まだ戦つて見たい、といふ考があつたから、勝の言ふ所は、餘り喜ばなかつた。併し、その主張には、一條の理義が、通じて居るから、終に慶喜は、朝廷へ、恭順を表する事になつた。

初め、慶喜の前へ出た時に、勝は、

「此上に、戦をつゞけて、其結果は、どうなる、と思召されますか」

と尋ねた。慶喜は、これに答へて、

『薩長の二藩が、朝威を、笠に被て、餘りに横暴を極めるから、それに對して、最後の戦を、致そうかとも考へる』

と言はれたので、勝は、更に押返して、

『そのお考へも、一應は御尤と、存じ上げますが、若し、官軍に勝つた、といったして、どうなりませうか。又、負けた場合には、どうなりませうか。御尊慮を、伺ひたう存じます』

と尋ねた時、慶喜は、黙つてしまつた。勝が、尋ねた事は、言葉の上に於ては、誠に平易な、質問の如く聞へるが、實は、この質問は、非常に、意味の深い質問であつた。

戦に勝てば、どうなつて、又、負ければ、どうなるか、といふ様な事は、どんな子供にも、答の出来る事だが、併し、其奥に、徳川宗家の前途は何となるか、といふ、大切な問題が、含まれて居るのであるから、これに就ては流石の慶喜も、容易に答へ得なかつた。

その時に、勝は、膝を進めて、

『私の愚見を申述べますれば、戦に勝ち、官軍を打負かしても、足利尊氏に、なる迄の事でございませぬ。又、戦に打負けて、幕軍の、敗北と極れば、宗家は、遂に廢絶となります。戦に勝つても、足利の二の舞で、若し負ければ、宗家が、廢絶されるのであります。して見れば、此上に戦を續ける、

といふのは、宗家の爲に、面白くないと思ひます。殊に、あなた様は、水戸家から入つて、宗家の御養子でございませぬ。御實子でも、家を潰しても宜い、とは申されませぬ。況て、御養子が、家を潰しては、尙更、悪からうと存じます。殊に、叛逆人の汚名を附けて、宗家を潰しては、あなた様の罪は、深い事になります。此邊に就ての思召は、何と御座りますか』

と、斯ういふ風に、道理を以て詰寄られたから、慶喜は、益々、答に窮して仕舞つた。慶喜は、極めて利口な、御方であつたから、勝の意を察した。是れは、自分に、恭順の意を表させて、官軍に、降服をさせた上、徳川宗家を、傷つけずに残す、といふ考である、と、いふ事がよく判つて見ると、尙更に、反對の意見は、述べられなくなつた。是に於て、慶喜は、覺悟の臍を極めて、

『お前の申す事は、能く相判つた。余は、恭順を表して、朝廷に、哀訴する積りであるが、それにしても、今後、如何なる措置を、取つて宜いか。それを、聞いて置きたい』

慶喜の覺悟が、それ迄に、決したのを聞いて、勝は、非常に喜んだ。『宜しうございませぬ。今後の事は、お引受けを致して、不肖乍ら、一身に代へても、必ず御宗家の名義は、萬世の下に迄、残る様に致しますから、どうぞ、あなた様は、此城をお立退を願ひます』

これを聞いて、慶喜は、少しく驚いた。戦は爲ぬ事に、覺悟を極めたが、江戸城を、捨て立退く、

といふ様な事は、考へて居なかつた。意外にも、勝が、城を立退け、と、いふのだから、不審の眉を寄せて、

「何と申す。余に、此城を捨て、何れへか立退け、と申すか」

「左様でございます。全體、石垣を、高く積み、堀を、深く穿つて、矢挾間、羽挾間を造り、多くの兵士に、左右を固めさせて置いては、折角に、恭順の意を表しましても、形の上には、矢張り、朝廷に、刃向ふ事に相成ります。依て、城地を抛ち、何れへかお立退になりますれば、恭順の意を、表した事になるので、ございます」

「成程、それは一應、道理とも思ふが、然らば、何れへ立退いて、然る可きか」

「それは、今更、申上げる迄もなく、上野の寺中へお立退になりますれば、お差支へはありますまい」

「何と申すか、上野の寺へ、引上げろ、と、申すのか」

「御意に、ございます」

「それは、どういふ譯で……」

「されば、三代の上様が、輪王寺を起して、これに宮様を、御一方迎へて、法親王と申し奉り、代々、宮家を以て、同寺の御門跡と、致してございます。それは、何の爲か。申上げる迄もなく、斯

様な折の御用意と拜察いたします。あなた様が、輪王寺へお立退にならせられ、宮様の御情けを以て、朝廷へ、お絶り申すのが、宗家を、この難局より救ひ出す、唯一の策でございます。

と、これを聞いて、慶喜は、初めて安心したらしく、

「成程。それは、余も、氣が附かなかつた。然らば、左様いたさう」

そこで、慶喜は、上野へ、引揚げる事になつた。東叡山寛永寺の本坊が輪王寺、其側に、大慈院といふ、小さい寺がある。それへ引籠つて、朝廷へは、宮様の執次を以て、哀訴する事になつた。

▲高橋伊勢守も、勝と、同じ事を、將軍へ、申上げて居るが、その間に、小笠原壹岐守が、關係して居る。

六

泥舟の本名は、謙三郎といふ。生れは、天保六年で、嘉永四年に、十七歳で、高橋連之助の養子になつた。

謙三郎の實父は、山岡市郎右衛門というて、三河以來の旗本である。二之丸留守居役、高橋義左衛門の女、お文が、市郎右衛門の妻であるから、謙三郎は、母方の實家へ、養子に行つた譯だ。高橋家は、やはり旗本で、薙刀、槍、劍の師範役であつた。謙三郎の兄が、紀一郎といふて、是が、槍を執

つては、日本一といはれた名人である。

實兄が槍の名人で、養家が、武術の師範役、といふのであるから、謙三郎が、槍の達人として、千石の知行を得たのは、別に不思議ではない。

萬延元年の二月、槍術師範兼奥詰兩番上席になつたのは、徳川家茂の直命であつた。文久二年十二月、築地に、講武所が出来た時、その師範となり、二之丸留守居席布衣になつた。

斯ういふ風に、出世は早かつたが、それは家柄といふよりは、寧ろ本人の武術の力であつた。三十歳にならぬうちに、槍一筋で、天下に認められたのだから、その修業も、一と通りではなかつた。それに就て、面白い物語がある。

兄の紀一郎は、日本一の名人であつたが、甚だ短命で、三十にならぬうち、世を去つて居る。兄に親み乍らも、極度の尊敬を、有つて居た。謙三郎は、兄の死に就て、悲嘆のあまり、全く厭世的人となつて、一時は、絶食して死なう、とした事もある。それを知られて、両親や妹から、涙の異見を加へられ、遂に思返して、専念、武術の修業に入つた。

『謙三郎』

と大きい、聲で、不意に呼掛けられた。熟睡して居た、謙三郎は、眼を覺ましてみると、亡き兄の

姿が、壓々と、枕元に見えた。

どう考へても、亡き兄が、枕元へ来る譯がない。夢かと思ふて、四邊を見れば、自分は、眼覺めて居るのだ。

ゴロリと、横になつて、また眠りに入つた。少しすると、

『謙三郎』

といつて、また呼び起された。

今度は、眼を閉ぢた儘、凝乎と、考へ込んだ。夢とも、現ともなく、兄が、語り始めた。

『お前の槍術は、やうやく、一人前になつたが、まだ物にはなつて居らぬ。修業は、これからぢや』

『兄上、まだ修業は足りませぬか』

『僅に、修業に就いたばかりで、まだ半ばにも、及んで居らぬ。疑はしく思ふなら、俺を、突いてみる』

『お對手を願へますか』

『さア、來い』

紀一郎は、いつの間、どこから持つて來たか、長い槍を抜いて、靜かに構へた。これを見て、謙三郎も、槍を執つて構へる。しばらくの間、稽古をつけて貰つたが、どうしても、物にならなかつ